

Title	金葉和歌集二度本攷(二) : 伝甘露寺経元本等数本に就いて
Sub Title	
Author	平澤, 五郎(Hirasawa, Goro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1969
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.8 (1969.) ,p.161- 283
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000008-0161

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

金葉和歌集二度本攷(二)

——伝甘露寺経元本等数本に就いて——

平 澤 五 郎

本稿は、前稿の所謂続群書類従初度本系諸本に続く伝存本の勘考にある。前稿に於ては、その系類諸本の基礎的調査と諸本間相互関係から抽出された本集選述経過を、初度本・所謂二度本との関連から併せ推論したものであつた。本稿も、以下伝甘露寺経元本等僅々四本にすぎないが、同様に伝存資料の観点から処理考察を加えたものである。次掲四本は前稿諸本とは異なり一系類を呈示する類似性は甚だ稀薄な諸点が存し、此処に前者同様の総括的な扱いは寧ろ当を失することは否まれないが、以下に縷述した如く、続群書類従初度本系諸本と、所謂二度本系諸本との間に位置する伝流本として留意される。初度本から続群書類従初度本系への撰述過程はすでに先学の御考察、拙稿なども加えて、本集改撰の意図は歌員の激動のみならず、その質的な変貌の姿を、略々把握されるところであるが、いわば此の第一次のきわだたしい変様が本集をして先行する勅撰和歌集撰述に比し、その破格な特異性を具現する第一歩であつたとするならば、次掲四本はその所謂二度本に著到する第二次的な改刪・補綴の草稿期を暗示せしめる伝存本と云

得る性格を各本それ〴〵に具有するものである。撰集の本質的変転はすでに前者に於て具体化され、更にこの草案期の胎動は猶も前者とは異なる意味に於て浮動・変貌を辿るのであつて、歌員の切継・形態の改修は前者につぐ顕著な様相を含有している点、所謂二度本系諸本と別して検討すべき対象と考えられ、本稿に、その意味で一括し扱うことにした次第である。その伝本は

(一) 静嘉堂文庫蔵〔室町末〕写・伝甘露寺経元筆八代集本

(ロ) 東洋文庫蔵〔江戸前期〕写本

(二) 天理図書館蔵吉田文庫〔江戸前期〕写本

(三) 今治市河野信一記念文化館蔵〔江戸中期〕写本

の四本であるが、ほど右の如く類別される。(一)・(三)は(一)とは寧ろ本来區別されるべき伝本であるが、単に便宜上分類したものにはすぎない。

扱、前稿と同じく、(一)伝本の基礎的处理、(二)諸本の特異性と相互關係及びその撰述経過を先行本たる続群書類従初度本系諸本との比較、更に所謂二度本への移行過程を総括的に考察することゝした。が論述の都合上、(一)・(ロ)は截然たる區別なく説述した場合もある。何故ならば(一)系統と(二)・(三)系統とは、前述の如く同一系統として認めがたい伝本類故にあるからである。

(一)

伝甘露寺経元筆本

本書は八代集九冊本の一冊である。装幀は綴葉装。茶褐色地菊花金繡の裂表紙、竪二十七・五糎、横十九糎。見返し、上方は金泥を塗り、下方を茶褐色地に墨筆で波形の模様を描いている。題簽は短冊型の絹切に「金葉和歌集」と墨書する。墨付百十六丁、前後に遊紙各一丁。又、卷八、国歌大観番号(507)と(510)の間(八十丁表)半葉がどうしたわけか白紙である。料紙は厚手の鳥の子、両面書。字面高さ約二十一・八糎。毎半葉十行に、詞書・作者・歌をほゞ各々別行し三・四首を筆写している。内題「金葉和歌集卷第一(一十)」、部立は春歌とせず、春部・夏部……雑部とする。第一紙左肩に琴山の極札が貼付してある。即ち「甘露寺殿経元卿金葉和歌集(印)」とある。甘露寺経元は諸家伝に「伊長卿男、本範家改一信 実侍従三位為豊男」とあり、天文四年誕生、天文廿年三月廿七日少納言、同年九月廿一〔廿二〕日改名経元(依勅為伊長卿子)の後、永禄六年七月六日蔵人頭廿九歳、元龜三年十二月廿八日左大弁等を歴任し、天正七年十一月十七日権大納言を極官に、同十三年五月八日五十一歳(法名円空)で薨じている。本書の筆写者をその人と俄かに判じ難いが、書写年代は室町末頃、降つても近世初頭と推定される。

本書には、奥書があり、それに

天治二年四月日依宣旨撰之／前木工頭源俊頼朝臣

とある。吉田幸一氏蔵本、伝兼好法師筆本に、これとほゞ同じ奥書「天治二年四月日依 院宣撰之 撰者前木工頭俊

頼」がある。後者は南北朝期の古鈔本であり、此の奥書は二度本撰述の時期推論のひとつの手がかりとして留意される。而しながら、本書はまえがきに誌したように謂所二度本系とは異り、版本系不載歌四十余首を収録するのである。各巻の歌員は次の如くである。春部百五首 夏部六八首 秋部百二八首 冬部五八首 賀部二九首 離別部一七首 恋部上七三首 恋部下百一首（一首書落し後述）、雑部上八六首 雑部下四七首 連歌十七聯 卷末歌一首である。但し卷九雑部上八六首の中には次の如く、現存伝本の大部分にみられる（610）源頼家母歌の詞書中の歌が源頼成歌として別箇に一首を設けている。即ち

源頼家朝臣物申ける人の五節に出侍けるをきゝて

源頼成

まことにやあまたかさねしをみ衣とよのあかりのかくれなき世に

とよみてつかはしたりける返し

源頼家母

ひかけにはなき名たちけりをみ衣きてみよとこそいふへかりけれ（610）

と二首に書かれているので、雑下八六首は八五首と訂すべきであろう。次に記す東洋文庫本も全く同様である。（註五参照）従つて本書の和歌総歌数は七二三首、連歌十七聯となる。

扱、その版本系不載歌四十四首は、春部七首、夏部四首、秋部二十首、冬部六首、恋部下七首である。そして、その過半数は初度本から所謂続群書類従初度本系（斯道文庫論集第七輯所収拙稿を参照されたい。）に引継がれてきたところの歌である。それらについては、後述する次の二本、東洋文庫蔵〔江戸前期〕写本・天理図書館蔵吉田文庫〔江戸初〕写本の欄外書入歌に、ほぼ同様同数のこの不載歌を収録するので、一括し併記詳説することにするが、いずれにせよ、本書並びに両本に載録する五十首前後の不載歌は、前稿に於て縷述してきたた所謂続群書類従初度本系の次に

位置する過渡期上の一撰述形態と考えられるのである。従つて、前記伝兼好本の奥書と本書のそれと近似するを以つて、系統上同一視することは、当然の事ながら避けられねばならないものである。

扱、本書を続群書類従初度本系の次に位置する一形態と一応の結論を推定しておいたが、謂所二度本―即ち正保版・八代集抄本の如き―流布本と比較するに、続群書類従初度本系にみられた如く、流布本系の歌を欠く様相を示している。それに就いては同様に後述するが、本書及び両本の如き一類―類と称してよいかどうかは別として―から、たゞちに流布本系へと撰述の経過を辿るとする考えに、やはり、ある躊躇を感じしむるものがあることだけを附記しておく。

まず 流布本（版本系）に載録され、本書に欠員する歌をあげると、―便宜上いまは国歌大観番号に依り略記する―

夏部 (109)源盛清歌、(110)大中臣定長歌、秋部 (172)三宮歌、恋部上 (376)俊頼歌、(409)神祇伯頭仲歌、(420)春宮大夫公実歌、(435)藤原為忠歌 恋部下 (458)皇后宮権大夫師時歌、(488)左京大夫経忠歌、(493)源親房歌、(509)源俊頼歌、(517)藤原永実歌、(531)読人不知歌、(549)源行宗歌、(550)源俊頼歌、雑部上 (572)平康貞母歌、(578)美濃歌、(579)内大臣家越後歌、(621)皇后宮美濃歌、※(630)加茂成助歌、雑部下 (649)源俊頼歌、(675)覚誉法師歌、(679)勝超法師歌、連歌 (704)読人しらす・前太政大臣家木綿四手唱和、(706)読人しらす唱和

の二十余首を数える。但し、その他、(516)一宮紀伊歌は「人のゆふかたまうてこむと申ければ」詞書のみあり、「うらむなよ影見えかたき夕月夜おほろけならぬ雲ままつ身そ」の歌を欠いている。そして次の(517)永実歌は前記したように欠歌であり、(518)源信宗歌の詞書「周防内侍したしくなりて後、ゆめくこの事もらすな」と申ければよめる」とある詞書を欠いて、(516)の詞書から「源信宗朝臣 あはぬまはまとるむほとんあらはこそ夢にみきとも人にか

「たため」にと続いている。次記の東洋文庫本も同様であるが、(516)の作者名・歌、即ち「一宮紀伊 うらむなよ影見えかたき夕月夜おほろけならぬ雲ままつ身そ」を書落とし、(518)の作者名・歌へと書続けた故の誤写と認められる。(517)の歌は東洋文庫にも同じく欠くので、この系統の伝本では欠員歌と考えてよいのであるが、所謂二度本諸本に於て、この(517)永実歌を欠く伝本を散見しないので、恐らく、この伝本系の一特徴と推定されるが、猶書写の上の誤脱とも考えられる疑問が残されるのである。

又※印を附した(630)加茂成助歌に就いてであるが、本書の該当箇所は、まず(629)の詞書・作者名があり、即ち「かものなりすけにはしめてあひて物申けるつゐてにかはらけとりてよめる 津守国基」(106ウ末行)とあり、次に(631)の詞書(107才第一行)「皇后宮弘徽殿におはしましけるころ云々」と続いていて、(629)国基の歌「きゝわたるみたらし河の水清みそこの心をけふそみるへき」、及び(630)の「返し 加茂成助 すみよしのまつかひありてけふよりはなにはの事もしらすはかりそ」を欠いている。(629)の歌は明らかに書落しであることは詞書・作者名を写しているところから云うまでもないが、(630)成助の歌は同系東洋文庫本にも之を欠き、その上、版本系諸本を除き殆んどが欠員歌であることから類推して、本書もやはり同様にもとゞこの歌を欠いていたもので、(629)の歌の如き書写上の誤脱とは考えられない。恐らく、106ウ末行に「津守国基」と書き終え、(629)の歌のみを書落とし、107才第一行に(631)詞書「皇后宮弘徽殿云々」と書き継がれていったものであろう。而し、それも本書書写時に於ける誤脱であるか否かは、本書の依拠本の見出されない現在如何とも決定し難い。

次に、(578)「返し 美濃 うれしくも秋のみ山の松風にうることのねのかよひけるかな」、(579)「月のあかりける夜人のことひくをきゝてよめる 内大臣家越後 琴の音は月の影にもかよへはや空にしらへのすみのほるらん」の

二首、及び(649)「下臈にこえられて歎侍りけるころよめる 源俊頼朝臣 せきもあへぬ涙の川ははやけれと身のうき草はなかれさりけり」の三首を本書が欠くことに就いてであるが、この三首は続類従本初度本系(初度本は欠部である)には、すべて存し、又所謂二度本系に於ても僅か一本―書陵部蔵〔江戸中期〕写桂宮本・函架番号C一・一一九―にこの三首の中の二首(578)・(579)を欠く伝本を管見するにすぎない。而もこの桂宮本は次稿に解題する如く、殆んど版本系といつてよい江戸期の写本であり、二・三の誤脱歌とも思われるものも散見されるので、この二首の欠歌は本書のそれと同一に扱い得ないものである。参考までに奏覧本を照し合せても、この三首は載録されているのを考え合せて、続類従初度本系から二度本・奏覧本に至る過程に於ても切継の対称とはならなかつた歌と推定してよいのではなからうか。とすると、この三首も、本書書写の時か、又はそれ以前において或は脱落した書写の上での誤りとも類推されるのであるが、これも前者同様に決めてかゝるわけにもいかないので、一応、こゝでは、それも本書特有のものとしておくことにする。

また、本書と二度本との比較に於ける歌員の有無ではないが―寧ろ直接には本書の歌順に関する問題であるが―(93)盛経母歌(正保版・抄は盛経母、抄に盛家イと傍記す)本書では唐突に卷一春部卷末に書写されている。即ち

摂政左大臣家にて人く三月尽のころをよませ侍けるによめる

源俊頼朝臣

かへる春う月のいみにさしこめてしはしみあれの程までもかな(98)

花のみや暮ぬる春を形見とて青葉の下に散のこるらん(93)

とある。卷末歌だけに、而も作者名も記すことなく書写されている点に問題が残される。この(93)の歌は初度本には(92)の次に記載され、続類従初度本系諸本に至り、更に二度本系では、版本・版本系諸写本を除く過半―殆んど―

に切捨てられたところの歌である。奏覧本に於ても当然の事ながら被除歌となつてゐる。たゞ天理図書館蔵吉田文庫本が本書と全く同様に(98)の次に巻末歌として書写されているほか、いまだ他に伝本を知らない。たゞ僅か京都大学図書館所蔵一本(函架番号23—キ8)が(94)大僧都證觀歌の次に位置しているのが例外である程度である。春歌の配列から見ても、(85)大夫典侍歌以下(92)内大臣家越後歌まで、晩春の藤花を詠じ、詞書も「藤花」「紫藤」等と各歌にわたり明記しており、(94)證觀歌以下は「三月尽」を題詠とする歌が巻末に至るのを一般とする形態であれば、この(93)の「花のみや暮ぬる春を云々」とある歌は晩春の藤花に準ずる歌として、(92)の「隣家藤花といへる事をよめる 内大臣家越後」の歌の次に元来位置すべきものと推論されるのである。猶且つ、それが巻末歌である処に唐突の感をまぬがれぬのである。と同時に作者名をも明記しないなど、其処に疑点をとゞめざるを得ない。これは、いずれにせよ、本来の形態とは認めがたい。とすると、想像されるのは(93)盛経母歌が切捨てられた時期——具体的には続群書類従初度本系以後から本書の如き形態の時期——に於て取捨の撰択に於て浮動性があつたと思われるのである。更に云えば本書の如き選述形態が一応草案された時点では一旦は切取られたのであるが、その後伝写の間に何等かの事情——例えば初度本或は所謂二度本系などを参し、偶々巻末に附記されるような事情——によつて、巻末に位置することとなつたのではないかとも思われる。ことに続類従初度本系は、春部では(72)伊通歌・(82)長実歌・(88)良暹法師歌・(93)盛経母歌の四首が見えず、そのうち(72)伊通歌・(93)盛経母歌は初度本から此の続類従初度本系に於て諸本すべて切取られた歌であり、而も(82)長実歌・(88)良暹歌は園林・岡田本のみにみられる被除歌にすぎず、又(82)長実歌・(88)良暹法師歌が本書に存するのであれば、本書の如き続類従初度本系を受け、それに続く系統本と想定する時、(93)盛経母歌が他本比較の過程に巻末に附記されるというのが如き可能性は想像されてよいのではないか。同様な意味では(72)伊通

歌についてもいゝ得るわけでもあるので猶疑点を残すのであるが(後述)。ともかくその書写時期はいずれの頃であるか勿論、之も決め難いが、本書や吉田文庫本書写以前であることは書写の様態からも窺われる。とまれ、(93)盛経母の歌は、僅か本書や吉田文庫本に残存する撰述過程の様相から、続類従初度本系か、この期に於ては、被除歌の対称として揺れ動いていたものであつたと推論されるのである。

更に細部に於ける歌詞・詞書・作者等の異同・誤写・誤脱などの詳細は校本の作製を待たねばならないが、たとえば一例として、散見する作者名の欠落・誤写・異同等に任意的に摘出してみると、(23)作者名欠(正保版「以下省略」大藏卿臣房)、(80)中納言(中納言雅定)、(138)欠落(藤原孝善)、(150)欠落(神祇伯頭仲)、(345)中納言(中納言通俊)、(433)欠落(美濃)、(681)欠落(覺雅法師、但し、この作者名は伝存二度本諸本に異同あり、後述する)等の脱落が見され、また、(94)大僧都言観(大僧都證観)、(97)藤原顕季(藤原顕輔朝臣)、(115)橘成光朝臣(橘成元)、(195)源仲昌(源仲正)、(491)前師資仲(前中納言資仲)、(610)源頼家母(源光綱母)、(662)藤原資信(藤原資陰)、(689)田口重之(田口重如)等の異同・誤写等が散点していて、必ずしも善本とは云えない写本である。

次に、本書の形態面から、歌の排列順序に就いて誌しておくが、次述する東洋文庫本と、本書は比較的近似するので、此処に併せ概括することにする。

以下に掲出した本文は伝経元本の歌順である。傍記校異は東洋文庫本である。(洋)と略記することにする。

(一)

この春は長閑(洋)のとかに句へはさくら花枝さしかはす松のしるしに(39)

左兵衛督実能

左京大夫経忠

山(40)さくら梢は風のさむければ花のさかりに成そわつらふ (40)

花をよめる

右兵衛督伊通

しら雲と嶺には見えて桜はなちればふもとの雪とこそなれ (72)

花春為友といふ事をよめる

内大臣

ちらぬまは花を友にて過ぬへし春より後のしる人もかな (51)

新院御かたにて花契週年といふ事を

待賢門院中納言

白雲にまかふさくらの梢にて千とせの春を空にしるかな (41)

(二)

人(ナシ)にさくらの哥十首よませ給へりけるによめる

修理大夫頭季

桜はな咲ぬる時は芳野山たちものほらぬ嶺のしらくも (48)

鞍馬寺大門花さかりなりときゝてわたりてよめる

永慶法師

山さくら嶺は霞のこめつればふもとの花を折てこそみれ 初74

山花留人といへる事をよめる

大中臣公長朝臣

をのゝえは木のもとにてやくちなまし春をかきらぬ桜成せは (54)

宇治前太政大臣家・哥合(の洋)にはなを(さくら洋)

皇后宮摂津

散(くトモ見ユ洋)つもる庭をそ見まし桜はな風(かせ洋)よりさきに尋(たつね洋)さりせは (49)

(三)

重服に・侍(て洋)けるとし三月尽(つこもりの日洋)に人のもとよりをとつれ・侍(て洋)ければ(てト見ユ洋)つかはしける

藤原顕季(輔朝臣洋)

おもひやれめぐりあふへき春たにも立(たち洋)わかるゝは悲(かな洋)しかりけり(き物をイ洋傍書) (97)

摂政左大臣家にて人(に洋)く・三月尽(心洋)のこゝろをよませ侍けるに(よめるイ洋傍書)よめる

源俊頼朝臣

帰(洋)かへる春う月のいみにさしこめてしはしみあれの程(ほと洋)までも(みむ洋)かな (98) (東洋文庫本(98)(97)ノ順)

花のみや暮ぬる春を形見とて青葉の下に散(コノ歌ナシ洋)のこるらん (93) (初度本作者ハ、藤原盛致、歌順は(92)ノ次。正保版、盛経母トス。続群書類従初度本系コノ歌ナシ)

(四)

藤原顕輔 (118)

ほと(119)(117)きす心もそらにあくかれて夜かれかちなるみ山への里 (119)

内大臣 (117)

待郭公の心をよめる (117)

恋すてふなき名やたゝん時鳥まつにねぬ夜の数しつもれは (117)

藤原孝善 (119)

承暦二年内裏哥合に人にかはりて (119)

時鳥あかて過ぬることにより跡なき空をなかめつるかな (118)

(五)

世にあらむん(洋)かきりは忘わす(洋)れしとちきりたる人の久しくをとつれさりければ

よみ人しらす

人はいさありもやすらむ忘ん(洋)られてとはれぬ身こそなき心ちすれ (508)

前齋院六条

すみかをしらぬ恋といふ心をよめる

ゆ行(洋)くゑなくかきこもるにそ引ひき(洋)まゆのいとふ心の程ほど(洋)はしりぬる (507)

(六)

〔題しらす〕

〔よみ人しらす〕

足引の山のまにくたふれたるからきはひとりふせる也なり(洋)けり (524)

みくまのゝ駒のつまつく青あを(洋)つゝら君こそまろかほたし成なり(洋)けれ (528)

津の国のまる屋は人をあくた川君こそつらきせゝはみ見(洋)えしか (525)

(七)

〔題しらす〕

〔よみ人しらす〕

逢あふ(洋)事のかたのに今は成ぬれはおもふかりのみ行にやあるらむん(洋) (536)

あふみにやありといふなるかれゐ山君はこえ越(洋)けり人は(洋)とねくせしらさ(洋) (535)

(八)

和泉式部やすまさにくして丹後に侍ける比(洋)都(洋)ころみ比(洋)都(洋)やこ比(洋)都(洋)に哥合哥(洋)の侍けるに小式部内侍哥(洋)のうたよみにとられて侍ける

を定頼卿つほね「のかたにまうてきて歌はいかゝせさせ給ふ丹後ノ文脱敷（公夏本ニヨリ補フ）へは人は^{ナシ（洋）}つかはして

けんやつかひはまうてこすやいかに心もとなくおほすら^{む（洋）やナシ（洋）はナシ（洋）}んなどたはふれていひてたちければひきとゝめて

小式部内侍

大江（洋）おほえ山いくのゝ道のとをければまたふみも^{見す（洋）}みぬあまの橋立^{はしたて（洋）}（586）

しほゆあみに^{にし（洋）うみ（洋）}西の海のかたにまかりけるにみるといふ^{物（洋）}ものをみつからとりて^{都（洋）}みやこにあるむすめのもとへつか

はしける

平康真女

磯なつむ入江のあまの立かへり君みるまての^{いのち（洋）}命ともかな（590）

かへ（洋）返し

むすめ

なかあする^{蟹（洋）}海士のしわさとみるからに袖の浦にも立涙かな（591）

百首歌の中に夢を

修理大夫顕季

うたゝねの夢なかりせは別にし昔の人を又^{また（洋）}見ましやは（587）

(九)

兼房朝臣重服になりてこもりゐて侍けるに出羽弁かもとよりとふらひたりけるを^{かへ（洋）}返しせよと申ければ

橘元任

かなし^{悲（洋）}さのその夕暮^{ゆふ（洋）}のまゝならはありへて人にとは^{わ（洋）}れましやは（664）

不例のことありける事有(洋)ころいかなとおもひつゝけて心ほそさに比(洋)

源行宗朝臣

いかにせむうき(洋)浮世中にすみかまのはては煙となりぬ成(洋)へき哉(669)

範国朝臣ナシ(洋)にくして伊与にまかりたりけるに正月より三四月までいかにも雨のふらさりければよろづいのりけれ

とかなはてせめてたへかたかりければ能因法師し(洋)に哥よみて一宮にまいらせて雨いのれと申ければまいりてよめ

能因法師

天河のかは苗代(洋)なはしろ水にせきくたせあまくだります神かみ(洋)ならは神(665)

(二)

醍醐の积迦会に花のちるをみて散(洋) 見(洋)

珍海法師し(洋)

けふも今日(洋)猶おしみやせまし法のためちらす花そと思ひなさはおも(洋)(687)

極楽をおもふといへる事こと(洋)

源師俊朝臣

四方の海浪(洋)の波にたゝよふみくつをもなゝへの網に引なもらしそ(686)

以上が伝経本元の歌順である。

まず(一)から考察すると、初度本は(72)伊通歌・(38)内大臣「春ことにまつのみとりに云々」・(39)実能歌・初(63)大宰大貳長実歌「人しれすこゝろをやりて云々」・(40)経忠歌・(51)内大臣歌・(41)待賢門院中納言歌の順序となり、(72)伊通歌が(38)の内大臣歌の前に位置するほか、初度本の上に記載する初(63)長実歌が、(39)・(40)の両歌の

間にあつて、以下続群書類従初度本系と異なる形態を示している。続群書類従初度本系はすべて、(38)内大臣歌・(39)実能歌・(40)経忠歌・(51)内大臣歌・(41)待賢門院中納言歌の歌順となり、本書―即ち伝経元本の(72)伊通歌を除いた順序と一致するのである。この(72)伊通歌は続類従初度本系諸本すべて初度本からの途次に切捨られた歌であり、且つ前記した如く所謂二度本に於ては版本及び版本系写本をのぞき再び採入した跡が見出せない。又、一方(30)摂政左大臣歌から(74)中納言雅定(初51―初107まで、但し(74)中納言雅定歌は続類従初度本にて採録されし歌)までは桜花が主題となり残花をもつて終焉しいる。(72)の歌を参考までに初度本のそれを掲げると「花をよめる 右兵衛督伊通 しら雲とみねにはみえてさくら花ちれはふもとのゆきとこそなれ初60」で異同は全くなく(漢字・仮名は別として)、上句に視点をおけば桜花の盛時をうたい、下句を―特に「ちれはふもとの」の第四句に比重をかければ桜花残映の時とみることが出来て、この桜花主題の一群の中の歌順末尾に配置される理由ともなる。自然二度本に於て、さきの初度本の位置を譲つて、この位置(桜花主題の末尾(72))に配されたのであらう。本書が―伝経元本―続類従初度本系を受け継ぐ形態線上にあるとすれば、こうした前述の事情が浮動する(72)伊通歌に考慮されての上でのことではなかつたらうか。一応、(72)の歌は続類従初度本系で切棄てられ、本書に於て、この位置に復活したものと推定しておくことにする。即ち(72)伊通歌を復活した以外には形態上に於て、続群書類従初度本系を踏襲したものであると。

さて、東洋文庫本の歌順を示すと、(39)長能歌・(51)内大臣歌・(41)待賢門院中納言歌となつている。(72)伊通歌は被除歌であり、(40)経忠歌も前歌同様、版本や版本系写本を除くと被除歌で、この東洋文庫本も切棄てられている。従つて、続類従初度本系のあとを受けたものとすれば、当然右の歌順となるわけである。いずれにしても、(40)経忠歌・(72)伊通歌は東洋文庫本には収録されず、前者はこの系統―他に類本を現在散見しないが―の派生する頃か

ら被除歌の対称となつたのであろうが、(72)伊通歌は続類従初度本↓伝経元本↓東洋文庫本の如き、再録更に切棄の経過を辿つたものか、或は続類従初度本↓東洋文庫本↓経元本の如く切棄更に再録の経過であるか明らかに決定しがたい。たゞ初度本からの変遷、(40)経忠歌などが経元本に存することなど考合せると、前者の経過が妥当性あるものと推定されるのである。

次に揭示した(二)の歌順であるが、初度本は(48)顕季歌・初73忠季歌「さくら花みるに心^はのつきなから云々」・初74永慶法師歌・(49)皇后宮摂津歌の順序であり、続類従本系諸本では(48)顕季歌・(54)公長歌・初74永慶法師歌・(49)皇后宮摂津歌と排列されていて、初度本初73忠季歌が除去され、代つて(54)公長歌が新たに撰入され(初度本未載)(48)の次に配置されている。掲出した本書―経元本と較べると、初74永慶法師歌・(54)公長歌とが入替つてゐるにすぎない。明らかに続類従初度本系を襲つたものである。これに比較して東洋文庫本は(48)顕季歌・(54)公長歌・(49)皇后宮摂津歌の順序となり、初74永慶法師歌を被除歌としている。この例なども続類従初度本系↓経元本系↓東洋文庫本系への移行形態を示唆する一例証ともなうかと思われる。

(三)は、初度本では(98)俊頼歌・(97)顕輔歌の順序となり、(93)盛経母歌(初度本盛致)は(92)内大臣家越後の次に排列する。続類従初度本系諸本(但し公夏筆両本のみ)は(97)顕輔歌・(98)俊頼歌(春部巻尾)の順、(93)は被除歌となつてゐる。東洋文庫本は(98)俊頼歌・(97)顕輔歌となつて、続類従初度本系と逆に入替つて春部をとじてゐるが、本書伝経元本の如く、(93)の歌を巻尾に配していない。先に二度本との比較の処で述べたように、(93)の歌を巻末に附記する伝本は、吉田文庫本以外に管見しないところであるし、それが恐らく伝写・伝流の過程に於ける特殊な事情が想定されるので、現在のところ、本書・吉田文庫本の一特徴と記するほかないのである。(97)・(98)或は(98)・(97)の

歌順は本書は続類従初度本系の両伝本とは異なるが、初度本のあとも猶変遷を示していて、この歌順はまた所謂二度本諸伝本中（被見数十本中）に相半ばする結果を示しているのも、別な観点から稿をあらためることにする。

次に(四)の本書の歌順は現存諸本では、本書以外にこの形態を見出していない。東洋文庫本は(113)歌から(120)作者名まで（ほゞ一葉歟）落丁していて推すべくもない。

因みに初度本・続類従初度本系をみると、正保版に較べ詞書と作者(118)、歌(119)と組合され、次は詞書・作者(119)、歌(118)と続いている。この歌順は正保版・八代集抄及びこの系統の写本を除きすべての二度本伝存本・三奏本も初度本・続類従初度本系の順序となつている。恐らく本来は初度本以下奏覧本にみる順序であり、版本系の誤りであろう。^{註一} 版本系は藤原顕輔歌「ほとゝきすあかてすきぬる云々」(118)、藤原孝善「子規心も空にあくかれて云々」である。たゞ、この誤謬は版本系の時点に於て惹起されたものと簡単には考えられない一傍証がある。それは吉田幸一氏蔵本の一本、伝兼好筆と称せられる南北朝期書写の古鈔本に

郭公をよめる

藤原顕輔朝臣或本孝善

ほとゝきすあかてすきぬるこゑによりあとなきそらをなかめつるかな

承暦二年内裏哥合に人にかはりて

藤原孝善或本顕輔

ほとゝきすこゝろもそらにあくかれてよかれかちなるみやまへのさと

とあり、詞書・作者名・歌すべてが版本系の順序となつている。かくあるのをみると、また「或本孝善」「或本顕輔」と補註しているのをみると、すでに南北朝期に歌順・詞書・作者名の混乱や誤伝が存在していたことを如実に明示しているのである。いずれにせよ、初度本・続類従初度本系・二度本諸本（版本系を除く）・奏覧本の歌序形態が、

本来の姿であろう。本書がこの両歌の間に(117)内大臣歌を位置せしめたのは如何なる理由によるのか、前後の排列形態からしても判然たらしむることは出来難い。と同時にまた単なる書写上の誤りとも俄に決めてかゝる理由も存しないので、この(117)も本書の特徴として後考を待つことにする。

(五)以下の箇所は初度本は欠部である。従つて続類従初度本系以後の対比をみるのほかない。その続類従初度本系は(507)前斎院六条歌・(508)よみひとしらす歌と続き本書とは前後を異にする。東洋文庫本は本書と同じく(508)・(507)の歌順である。二度本諸本は被見する限りの伝存本数十種ほどの中に於て、この(508)・(507)の形態を見出さない。奏覧本は此の一歌群は歌順甚だしく改変し、参考までに誌すると、(506)・(508)・(510)・(511)・(507)・(425)・(512)・(517)・(518)の順序となり、(509)・(513)・(514)・(515)・(516)が切棄てられている。その点、奏覧本は何等の示唆も与えない。とすると、(508)・(507)の歌順改変は本書伝経元本・東洋文庫本にのみ共通する特有のものと考えねばならぬ。歌順入替の理由は恋部(下)だけに推定すべくもない。奏覧本にみる激しい変化も這般の事情故にあらため得たのであろう。

本書(六)の読人不知の(524)・(528)・(525)の歌順は東洋文庫本も同様な順序を示している。続類従初度本系では橋本公夏筆両本が(524)・(525)・(526)……(528)と二度本の歌順を追っているが、ほか、中御門宣秀本・続類従本・園林本・岡田本が、(524)・(528)・(525)の歌順を示し、その点、本書・東洋文庫本のそれは、この四本の形態を襲つたとも想定されるのである。版本系を除く二度本は、この(524)・(528)・(525)の順序か、或は(524)・(528)・(529)・(525)の歌順かの、いずれかに拠るものが各々相半ばする現象を示している。奏覧本は、また、公夏筆両本の歌順に帰つて(525)・(525)・(526)……(528)の順次となつているが、前稿にも述べた如く、これも恋部(下)読人不知歌の一歌群であり、歌順排列に於ける積極的意義は、次の(七)同様にさして重視しなかつたのではなからうか。

次の(七)は同じく読人不知の歌群の中での変化である。続類從初度本系では、公夏卿天文四年筆写本を除き、(536)・(535)・(537)の順次で本書と同じある。東洋文庫本も又奏覧本も同一である。たゞこの天文四年本が(536)・(537)・(535)と改めてある。前稿にも述べたが、版本系以外はすべて一次の数本をのぞき(536)・(535)・(537)の形であれば、公夏卿天文四年筆写本の歌順は意図的な改変の結果によつて派生したものとは思われぬので、この歌順は版本系の誤写と認められるのではなからうか。但し、以下数本には、即ち、斯道文庫蔵伝水無瀬兼成筆「室町末近世初」写本には、(534)・(536)・「いとせめてこひしき時は云々」・(535)の順次で、「いとせめて」の歌が、両歌の間に挿入され、又今治市河野信一記念文庫所蔵の「江戸前期」写本(C)には(533)・(536)・(534)・(535)の順次となり(536)と(534)とが入替つてゐるのもあり、同記念文庫蔵、「江戸中期」筆写八代集本(後述E)には、(532)・(534)・(533)・(536)・(535)と排列され、(536)・(535)の順序は変らぬが、その前の(532)・(534)・(533)と変化してゐるなど散見される。更に古写本に属する「室町中期」頃筆写の天理図書館蔵本(函架番号911・23イ97)は(536)・(537)・(538)・(535)・(539)の順序となり、(536)・(535)の間に(537)・(538)が挿入されている伝本も存する。又、特に留意されるのは前記の吉田幸一氏蔵伝兼好法師写本の如き古鈔本に於て、(533)・(534)・(536)・(535)・(537)・(532)・(538)の歌順が見出されることである。これも(536)・(535)の順序は変らぬが、(532)の位置が甚だしく変つてゐるのを見ると、(532)から(538)までの歌順排列はすくなくとも伝本としては南北朝期にはすでに一種の混乱が存したものと認めざるを得ない。これら四五本の中で推定されるのは、(532)・(534)・(536)・(535)・(537)・(538)の三種に「いとせめて」の歌がからみあい、伝写・伝流の間に上述の如き変化を生じながらも、(536)・(535)の元来の形を何等かの傾向としてとゞめていたのであろう。

金葉和歌集現存本からすれば、僅々四五本のこれらの異同は既に南北朝期より散点したとしても、撰者俊頼の撰述

形態に於ける改変とまでは考えることは出来ないであろう。又、同時に版本系の(535)・(536)の歌順は恐らく金葉和歌集の原形でないことをも上記諸本は示唆するものであると、併せ参照し繁述したのである。

(八)歌順は続類從初度本系諸本を受けてか東洋文庫本も本書同様の掲出順次となつてゐる。二度本系諸本も版本系が異なる―即ち国歌大観番号順―ほか後述の次の二本に例外を管見するが、殆んどすべて、この排列となつてゐる。奏覧本に至ると(586)小式部内侍歌・(589)頭輔歌・俊頼歌「すまのうらにしはやく浦の云々」(奏覧本543撰入歌)・(592)式部歌「和泉式部」歌の順次と改補され、(587)頭季歌・(588)師頼歌・(590)平康貞女歌・(591)むすめ歌が除去され、俊頼歌を新らたに自ら撰出して、その形態は一変する。

扱、さきの例外二本とは、正宗文庫蔵天文十六年积雪岑筆写本・某宮家蔵伝飛鳥井雅教筆写本(雅教永正十七・文禄三)である。両本共に版本系統の伝写本ではなく、寧ろ二度本では精撰本と称せられるものに近い。この両本が版本系と同じく(586)・(587)・(588)・(589)・(590)・(591)の形態となつてゐる。尤も後者は写真のみにて披見の機会を得ぬが、前者は奥書する天文十六年頃の筆写本とみてよいので、正保版・八代集抄以前に於て、この歌順をもつた精撰本系の伝本が存在していたことが認められる。従つて版本系の歌順次第は必ずしも版本系の冒した誤りとも言ひ得ないのである。

(九)の形態に就いては、続類從初度本系の中では先行する撰述過程にあると推定される(前稿参照)園林本・岡田本の二本が、版本系と同じく(664)・(665)・(669)の順序を示しているが、他四本(宣秀本・続類從初度本・公夏筆両本)は本書及び東洋文庫本の先蹤となつたものと推定され、(664)元任歌・(669)行宗歌・(665)能因歌の順に排列されている。而し二度本で版本系写本を除けば過半はこの排列であるが、猶、古鈔本且つ精撰本に属する伝存本のなかにも、版本系

の歌順を散見する。例えば、正宗文庫蔵〔鎌倉期〕写伝為家本（存卷七・十）・同〔南北朝〕写伝二条為忠本・同〔南北朝期〕写伝二条為明本・同伝聖護院殿覺誓法親王本・尊經閣蔵建武五年写伝為遠本（この筆者極めは明らかに誤りである。次稿に誌す）等^{註一}に於ても見出されるが、それは（669）の歌が精撰本への過程に於て浮動し、被除歌の対称となつてゆく傾向に有因する。そして奏覧本に於て（664）・（665）・（666）と定着したのであるから、版本系そのみの形態とは云難い。例外としては、河野信一記念館蔵本の八代集、〔江戸中期〕写本（E）のなかに、（664）元任歌・（669）行宗歌・（689）田口重如歌・（690）同作者歌・（695）能因法師歌と排列する異形態の伝本が存する。―猶この写本については、所謂二度本とは別類をなすものと思われるので後述することにする―。

(2) の歌順も東洋文庫本も本書同様であるが、続類従初度本系では、園林本・岡田本が（687）珍海法師歌を記載せず、宣秀本・続類従本には（686）師俊歌を欠いている。そして公夏筆両本に於て（687）・（686）の配列となつていたのであるから、本書及び東洋文庫は、恐らく之を受け継いだものと思われる。

而し二度本諸本では版本・版本系写本は、これが（686）・（687）と倒置しておるか、精撰本の如く（686）の歌を被去歌としている以外は―即ち精撰本と版本系との中間的な系統の諸伝本では公夏本・本書の通り（687）・（686）の順次を示している。例えば正宗文庫蔵〔鎌倉〕写伝為家本・〔室町末近世初〕写長享元年僧都空済奥書本・同〔江戸中期〕写本・京都大学図書館蔵〔江戸後期〕写本（函架番号23・キ・9）・同〔江戸後期〕写本（函架番号23・キ・19）・同国語国文学研究室〔室町中期〕写本・書陵部蔵〔江戸初期〕写本（廿一代集之内、函架番号400―10）・同〔江戸初期〕写本（八代集之内、函架番号510―11）・同嘉永五年政通筆写本・同飛鳥井雅章筆写本（廿一代集之内）・同〔室町末期〕吉田兼右筆写本（廿一代集之内）・同〔室町末江戸初〕写本（函架番号501―664）・穂久邇文庫蔵文明五年写本・斯道文庫蔵伝水無瀬兼成筆写本・

天理図書館蔵〔室町中期〕写本等の多くを数える。

この場合も所謂二度本系に於ては続類従初度本系を踏襲する形態は(686)師俊歌(俊頼歌とする伝本散見す)を被除歌とする宣秀本・続類従初度本を受け継ぐ精撰本形態をとるか、或は公夏筆両本の(687)・(686)の形態を襲う本書伝経元本を継続する掲出諸本の如き二度本系類群を見出すのであつて、版本系諸本の形態とはなっていないのである。そのことは本書や東洋文庫本が続類従初度本系から二度本と比較し、猶四・五十首の歌を前者から受け継ぐという撰述過程を残す共に形態面に於ても前者を踏襲しながら、——特にこの例などは公夏本系を受け継ぎ——所謂二度本への改削に於ては直接に版本系諸本にと移行するのではなく、従本ほど通説となつている版本系から精撰本へというその途次の過程——いわば中間的な撰述形態を示す伝存本にと続く撰述経過があつたのではないかという示唆を与えている点、注目されるのである。また(686)師俊歌の如きは精撰本更に奏覧本に於ては結句切棄られる運命にあるのであれば、版本系の誤写と明らかに認められない限りは、一応さきの推定は妥当性あるものと考えてよいのではなからうか。

但し例外として、河野信一記念文庫蔵〔江戸後期〕写八代集本(E)に、(687)珍海法師母歌(母の字加うる伝本はまゝ散見する)・行真法師歌「うたゝねの消にし玉は云々」・(686)源俊頼歌(本書は師俊を俊頼とす)となり、続類従初度本系・本書・東洋文庫本・奏覧本にも未載の歌を挿入している。がそれを除けば、やはり(687)・(686)の基本をくずしていないのである。

以上、本書及び東洋文庫本両本と正保版との歌順比較の上に立脚し、その比較の結果を用例の範囲内で初度本・続類従初度本との関係、また所謂二度本の伝存諸本にみられる種々の改変とを併せ照合し縷述して来たのであるが、次にそれを総括すると、

(イ)本書伝経元本特有の歌順を示すものは(一)・(二)・(三)・(四)の例である。但し(四)の場合は東洋文庫本欠落部について不明である。

(ロ)続類従初度本系・伝経元本・東洋文庫本に共通する歌順は(ハ)・(九)(但し(九)のみ園林・岡田本を除く)の用例である。

(ハ)続類従初度本系の公夏筆両本のみと伝経元本・東洋文庫本に共通する歌順は(三)の用例である。

(ニ)続類従初度本系の宣秀本・続類従本・園林本・岡田本等四本と伝経元本・東洋文庫本と共通の歌順は用例(六)にみる。

(ホ)天文四年公夏筆写本を除き続類従初度本系・伝経元本・東洋文庫本の共通する歌順は(七)の用例である。

(ヘ)続類従初度本系と伝経元本・東洋文庫本とが異なる歌順を示すのは(五)の用例である。

従つて本書特有の歌順形態を示すものは(イ)の(一)・(二)・(三)・(四)であるが、(一)は前述した通り、(72)伊通歌は本書に於て再撰された歌であるので、その点を考慮すれば、続類従初度本系を踏襲したものである。(三)は(93)盛経母歌には特殊な事情が想定されるので、これは本書の原形とみることは出来難い。(二)は初74永慶法師歌と(54)公長歌と入替ったにすぎず、続類従初度本系に準ずる歌順といえよう。(四)は本書のみの形態であるので、結局は(一)・(四)が本書の持つ個有の特徴となるのである。又続類従初度本系の歌順を踏襲(と仮定する)したのは(ロ)であるが、(ハ)(ニ)(ホ)は続類従初度本系諸本のいずれかの系統本と共通する点、続類従初度本系の形態を受け継いだものであり、(ロ)に準じて考えられるべきものである。(ヘ)は東洋文庫本も続類従初度本系と異なるが、伝経元本の立場からみれば、(イ)に準ずることとなり、結局のところ、(イ)(ヘ)に本書即ち伝経元本と続類従初度本系との相違が見出され、又先行の初度本とも異なる点、本書の特有な歌順とみなされる。同時に、続群書類従初度本系の形態を踏襲した撰述過程に位置する一伝流本であり、(イ)・(ヘ)

に於て本書が新らたな歌順形態を試みたものと、僅か一本からではあるが推定されるのである。東洋文庫本に於ては(イ)項(四)の特徴が見出せぬので、判然とし難いが、本書に準ずる系統に位置することが予測されるのである。

こゝで説述の関連上、便宜的に本書の歌順形態とは直接に関係はないが、前述の如く本書の先行本と推論される続類従初度本のそれと、更に所謂二度本諸本間に於ける変改とを併せ、参考までに言及しておくことにする。比較に於ては続類従初度本系や本書・東洋文庫本等に存しながら(諸本間の歌員異同を含む)二度本に於て被除歌となつた歌員は前稿で述べた如く数多にのぼるので、それによる歌順の変化はこれを除くことにし、又二度本に至つての撰入歌等による歌順の相違も言及しない。又本書に於て(前掲)みられた続類従初度本系との歌順異同は当然の事ながら除くことにする。さて続類従初度本系では(註記以外は諸本同一の歌順である)。

(一) (6)長実歌・(5)前斎宮内侍・(7)顕季歌(宣秀本・続類従本・岡田本・園林本)、(二) (8)公実歌・(3)顕仲歌・(9)少将公教母歌、(三) (40)経忠歌・(51)内大臣歌・(41)待賢門院中納言歌、(四) (48)顕季歌・(54)公長歌・初74永慶法師歌・(49)皇后宮摂津歌、(五) (50)俊頼歌・(53)忠隆歌・(52)匡房歌(宣秀本・続類従本・岡田本・園林本)、(六) (94)大僧都勝観歌・(96)内大臣歌・(95)雅定歌(宣秀本・続類従本・園林本・岡田本)、(七) (98)俊頼歌・(97)顕輔歌(宣秀本・続類従本・園林本・岡田本)、(八) (119)顕輔歌・(118)孝善歌、(九) (213)忠隆歌・初293重基歌・初295忠兼歌・(217)長実歌・(218)俊頼歌・初294定信歌・(214)永縁歌、(三) (239)顕仲歌・(241)皇后宮肥後・(240)行家歌、(二) (300)道済歌・俊頼歌「雪ふれは谷の梯うつもれて云々」・(302)内大臣家越後歌・(303)匡房歌・(304)皇后宮摂津歌・(301)俊頼歌(宣秀本・続類従本・園林本・岡田本)、(三) 初427実重歌・(314)康資王母歌・(313)雅定歌・(315)皇后宮権大夫師時歌・初431致時歌(宣秀本・続類従本・園林本・岡田本は初427・(313)・初431・(314)・(315)の順)、(三) 「読人不知歌」(524)・(525)・(526)……(528)、(但し、

宣秀本・続類従本・園林本・岡田本(524)・(528)・(525)……(527)の順、(四)「読人不知歌」(534)・(536)・(537)・(535)(天文四年公夏写本)、(五)「読人不知歌」(539)・(531)・(540)(公夏筆両本、但し宣秀本・続類従本は(530)・(531)・(532)の順となる。園林本・岡田本(531)歌を欠く)、(六)(664)元任歌・(665)能因法師歌……(669)行宗歌(園林本・岡田本)、(六)連歌(706)・(708)・(709)・(707)・(710)・(704)(園林本・岡田本は(706)・(707)・(709)・(708))、等の歌順が本書とは別に見出される(続類従初度本系諸本間の歌順異同の詳細については前稿を参照されたい)。前述の条件を設けながら、猶かような形態上の異同を散見されるのであれば、さきの推論——本書が続群書類従初度本系に続く撰述過程に位置する一伝流本であることは更に亮然とするのであるが、そのなかで続類従初度本系の歌順排列形態はかく変動しながらも、なお前記の如く先行形態とは現在から何らかの推論し得る関係を僅々一・二本であれとぞめて、撰述の経過を伝存本のなかからも辿ることが出来るように思われるのである。がともあれ、本書或は東洋文庫本の如きは、金葉和歌集撰述に於ける初奏本から所謂続群書類従初度本への激変につぐ第二次の揺籃期の姿を残す草案本の伝流であつた、と和歌排列の変遷からも窺われるのである。

扱、それでは所謂二度本におよんでは、本書のような形態がどのように移行していったものかは、先に縷述したが、その二度本も、版本系から精撰本と様々な移ろいを残し示しているので、その経過の間を考慮しながら、本書から二度本の、どの過程にと形態の上で辿つたかを考えてゆくことにする。所謂二度本系は略々四乃至五系類に類別し得る。——尤も各類に於ける伝本間には猶図式的な系統をもつて律しえない異同の存するのは云うまでもないが——。

まず、(イ)版本系では、八代集抄本・正保版廿一代集本ともに歌順は、僅か相違する。——国歌大観番号は正保版のそれであるので、便宜上、すべてそれに依ることにする——。八代集抄は(一)(40)左京大夫経忠歌・(51)内大臣歌・(41)侍

賢門院中納言歌、(一)(48)修理大夫頭季歌・(54)大中臣公長歌・(49)皇后宮摂津、の順次となつてゐる。そのほか、この本系統に準ずる伝本では、更に(三)(71)高階経成歌・(40)左京大夫経忠歌・(72)右兵衛督伊通歌、(四)(118)詞書・作者名(藤原頭輔)(119)歌「ほとゝきす心も空に云々」・(119)詞書・作者名(藤原善孝)(118)歌「ほとゝきすあかて過ぬる云々」の変動が見られる。例えば書陵部蔵〔江戸前期〕写廿一代集本(函架番号403―12)・同〔江戸中期〕写十一代集(同515―63)・慶應義塾図書館蔵〔江戸前期〕写本・蓬左文庫蔵伝阿野大納言実頭筆写本・京都大学図書館蔵〔江戸中期〕写本(同23―キ37)等で、これらは、前記抄本の異同(一)・(二)は示さぬが、いずれ歌数は版本系に同じく(一・二の誤脱歌は例外として散見するが)而も江戸期の伝本である。

次の(ロ)の系類伝本では、(イ)の(一)・(二)・(四)の歌順を示すと共に、(五)(98)俊頼歌・(97)頭輔歌(但しこの系類では書陵部蔵元禄元年右京兆尹坂上筆写本に管見するにすぎない)(六)(416)藤原惟規歌・(415)相模歌、(七)読人不知歌(524)・(528)・(529)・(525)、(八)読人不知歌(534)・(536)・(535)、(九)(558)源定信歌・(561)惟信歌・(562)神主大膳武忠歌・(559)右近将曹秦兼方歌(但し之も前註記書陵部蔵元禄元年写本に見出すにすぎない)、(三)(586)小式部歌・(590)平康貞女・(591)むすめ歌・(587)頭季歌、(一)(664)橘元任歌・(669)源行宗歌・(665)能因法師歌、(二)(679)勝超法師歌・(681)権僧正永縁歌・(680)作者名欠(同永縁歌か。版本は寛雅法師歌に作る)、(三)(685)證成法師歌(正保版澄成に作る)・(687)珍海法師母歌・(686)俊頼歌、(四)連歌(709)・(708)・(710)の歌順となり、(イ)に較べ形態面では顕著な相違を示している。但し(五)・(九)は註記の通り、この系類では例外とみてよい。この系類伝本である書陵部蔵〔江戸前期〕写廿一代集本(同400―10)、同〔江戸前期〕写八代集本(同510―11)・同元禄元年写本・京都大学図書館蔵〔江戸後期〕写本(23―キ9)等いずれ江戸期の写本である。元禄元年写本はやゝ異類の如く見うけられるので、(一)・(四)までをみると、(三)・(五)・(九)が異形な歌順である。

そこで、これを除いたほか十一種の形態を、本書伝経元本・東洋文庫本と比較してみると、(一)(40)・(51)・(41)―伝経元本(40)・(72)・(51)・(41)。以下経と略省する。東洋文庫本(39)・(51)・(41)、以下洋と略省する―、(二)(48)・(54)・(49)―経本(48)・永慶法師歌・(54)・(49)、洋本(48)・(54)・(49)―、(四)(119)・(118)―経本(119)・(117)・(118)、洋本欠部―、(六)(416)・(415)―経・洋本(415)・(416)―、(七)(524)・(528)・(529)・(525)―経・洋本(524)・(528)・(525)―、(八)(534)・(536)・(535)―経・洋本同―、(三)(586)・(590)・(591)・(587)―経・洋本同―、(二)(664)・(669)・(665)―経・洋本同―、(三)(679)・(681)・(680)―経・洋本(679)被除歌・(680)・(881)―、(三)(685)・(687)・(686)―経・洋本同―、(四)(709)・(708)・(710)―経・洋本(708)・(709)・(710)―、となり、そのほかは伝経元本・東洋文庫本に(506)・(508)・(507)の歌順が見出されるが、(八)・(三)・(二)・(三)は二度本(四)群系統の排列と全く同一し、(一)・(二)・(七)等は前述した如く、歌順の変移は自然な推移として、説明し得る形態であり、寧ろ(四)群系統は前者に準ずるものであり、その踏襲した跡を示すものと考えられよう。従つて、(四)・(六)・(三)・(四)に明らかな改変をみるのであるが、これも(四)をのぞけば、(四)につぐ次の系統諸本にも、まゝ見出される現象であるので、本書伝経本や東洋文庫本の排列形態は、版本系にと移行すると仮定するよりも、この(四)群系統以後の形態へと受け継がれたとする経過を想定する方が妥当性あるものと考えられるのである。

又伝経元本・東洋文庫本にみられる四十余首の二度本被除歌は別として、版本系載録歌で、伝経元本・東洋文庫本にみられる欠員歌二十余首にくらべ、(四)群系では、僅か(531)読人不知歌、(572)平康貞母歌、(704)連歌を欠くにすぎないのは、如何様に考えればよからうか。

ひとまず、それはさておき、(四)群系統につづく、(八)系統のをみると(四)系統の、(一)・(二)・(四)・(六)・(七)・(八)・(三)・(二)・(三)・(四)の形態が基本となつていて、(四)系統の(三)・(五)・(九)の配列は同様に散見しない。例外としては書陵部蔵「江

戸前期」写廿一代集本（函架番号400—7）や同蔵〔室町末期〕吉田兼右筆廿一代集本に、上記以外になお、（492）伊賀少将歌・（495）上総侍従歌・（494）橘俊宗女の歌順、（571）僧正行尊歌・（573）源師光歌・（572）平康貞〔母〕の順次が散見されるように排列形態上では（ロ）群系統と殆んど異らない。更に最終的な精撰本系統を参考までにあげると、この段階に至るも、この形態に於ては僅かな変化を見出すにすぎない。例えば精撰本中の古鈔本二本のそれをあげると—尊経閣蔵建武五年伝為遠筆写本・正宗文庫蔵〔南北朝〕写伝二条為忠本—それは、（一）が（39）左兵衛督実能歌・（51）・（41）となり（40）歌が被除歌、（二）・（四）は（ロ）群系に同じ、（六）（416）・（515）の（415）が被除歌、（七）は（524）・（528）・（525）の配列、（八）・（三）は（ロ）系に同じ、（二）の（665）・（669）・（664）は（669）が被除歌、（三）の（679）・（681）・（680）は（679）被除歌、（四）の（685）・（687）・（686）は（686）が被除歌、（四）の（709）・（708）・（710）は（708）が被除歌となるほか、新たに、（58）匡房歌・（60）源雅兼歌・（59）長実歌の歌順、（295）匡房歌・（293）神祇伯頭仲歌・（296）大中臣公長歌の歌順の如き例外を見出すにすぎない。とすると配列形態としては、ほぼ（ロ）群系統の段階に於て一応、定着したものとみてよいわけである。従つて本書伝経元本・東洋文庫本の形態に続く系統は（ロ）又は（ハ）群系統と推論されるのである。

前例に倣つて、版本系載録歌で、伝経元本・東洋文庫本の欠員歌を（ハ）系統に対比すると、次の表の如くなる。○

ハ	洋	経	
○	×	○	(40)
×	×	○	(72)
○	×	○	(93)
×	×	×	(109)
×	×	×	(110)
○	×	○	(113)※
×	×	○	(122)
×	×	○	(167)
○	×	×	(172)
×	○	○	(186)
×	○	○	(240)
×	○	○	(252)
×	○	○	(256)
×	○	○	(277)
×	○	○	(289)
×	×	×	(376)
×	×	×	(409)
×	×	×	(420)
○	×	×	(435)
×	○	○	(443)
×	×	×	(458)
×	×	×	(488)
×	×	×	(493)
×	×	×	(509)
○	×	×	(517)※
×	×	×	(531)
○	×	×	(549)
○	×	×	(550)
×	×	×	(572)
○	○	×	(578)※
○	○	×	(579)※
○	×	×	(621)
○	×	×	(630)
×	○	○	(648)
○	○	×	(649)※
○	×	×	(675)
○	×	×	(679)
×	×	×	(704)
○	×	×	(706)

印は収録歌、×印は欠員歌である。※印を附したのは、伝経元本・東洋文庫本特有のものであり、誤写・誤脱等が予想され除去されるべきであるが参考までに記した。

(ハ)群系統諸本間には当然の事ながら歌員に於ける異同はまゝ散見するが―例えば(122)・(277)・(409)・(531)・(704)等であるが、諸本過半が欠員歌であるので、これをあげた。

まず、右表の(40)から(172)の間は伝経元本・東洋文庫本両本相互に異同があり、(ハ)群系統とは比較の対称としては不明確なものであるので、これからは避けることにする。以下を対比するに、(186)と(277)の六首は―秋部冬部前半に当る―(ハ)群系統は被除歌となつてゐるのに反し、(549)・(550)・(621)・(630)・(675)・(679)・(706)の七首は―恋下巻末歌から雑部連歌まで―逆に両本が未載歌となつてゐる。云つてみれば、まさに相反した様相を示してゐて、前者からすれば被除の傾向を示し、後者からすれば新らたな採録の傾向を示してゐる。別な見方をすれば前者は本集前半部に於ては(ハ)群系統以前の現象であり、寧ろ(ロ)群系統への傾向をとつており、後者は(ハ)群系統以後の更に所謂精撰本への過程をなしているものといえよう。従つて、この対比からは、両本が所謂二度本のどの系統にと直続してゆくかは明らかにしがたいが、両本には(ハ)群系統と共通する欠員歌十余首が数えられる点、一つの示唆を与えるものであらう。即ち両本は形態面では(ロ)群系統以後の傾向を示し、(ハ)群系統に至つて、右記の対比からも、この時点がその分岐点となつてゐることである。猶、この両本の歌員の異同については後述するつもりであるが、いずれにせよこの両本は、形態面では(ロ)群系統以後、(ハ)群系統を境とする前後の撰述過程にと移行したものであり、所謂版本系へと経過を辿つたものではないことは確実に推論し得ると思うのである。

因みに(ハ)群系統伝存本を掲出すると、書陵部蔵嘉永五年〔鷹司政通〕筆写本・同嘉永七年〔鷹司政通〕筆写本・同

飛鳥井雅章筆廿一代集本・同〔江戸前期〕転写本・同〔江戸前期〕写廿一代集本（函架番号400—7）・同〔室町末期〕吉田兼右筆廿一代集本・正宗文庫蔵長享元年大慈院僧都空済奥書本・同〔江戸中期〕写本・天理図書館蔵〔室町中期〕写本・京都大学図書館蔵〔江戸後期〕写本（函架番号23—キ19、但し右表とは別に〔72〕・〔109〕・〔110〕・〔122〕・〔167〕・〔186〕・〔240〕・〔277〕・〔531〕・〔572〕・〔648〕・〔704〕等が存し、〔122〕・〔277〕の間、経元本にほゞ類似する）・同蔵〔江戸前期〕写本（函架番号23—キ8、同様に〔40〕・〔93〕・〔415〕・〔435〕・〔494〕・〔630〕・〔675〕・〔678〕・〔679〕等欠員歌）、そのほか、この系統に準ずるものに、正宗文庫蔵〔近世初〕写本（岡田真氏旧蔵本、但し〔40〕・〔93〕・〔415〕・〔435〕・〔494〕・〔621〕・〔630〕等欠員歌）・同〔室町末〕写本（〔40〕・〔48〕・〔49〕・〔54〕・〔93〕・〔675〕・〔679〕・〔686〕等欠員歌）。同蔵山崎宗鑑筆写本（〔40〕・〔93〕・〔218〕・〔261〕・〔415〕・〔435〕・〔494〕・〔549〕・〔550〕・〔621〕・〔630〕・〔686〕等欠員歌）・河野信一記念文庫蔵山崎宗鑑筆写本（〔40〕・〔93〕・〔415〕・〔435〕・〔494〕・〔549〕・〔550〕・〔621〕・〔630〕・〔686〕等欠員歌）。京都大学国語国文学研究室蔵〔室町中期〕写本（〔40〕・〔93〕・〔313〕・〔415〕・〔435〕・〔494〕・〔549〕・〔630〕・〔675〕・〔679〕等欠員歌）等々散在し猶諸本間幾多の異同が存するので、二度本については次稿で詳述する予定であるので参考までに附記した次第である。

東洋文庫蔵〔江戸前期〕写本

綴葉装一冊本。表紙は砥粉色地の網目紙に金泥の草花模様、金切箔を散らしている。見返しは網目模様金紙。題簽は、表紙左肩に紅色地金切箔散らしの短冊に「金葉□□集」と墨書するが、色・文字等褪色・剥落している。料紙は薄手の鳥の子、両面書。縦二十三・二糎、横十七・二糎。墨付一二四丁。字面高さ約十八糎。每半葉九行乃至十行に、詞書・作者・歌をほゞ別行三、四首を筆写する。内題「金葉和哥（歌）集卷第一（一十）」、部立は前書同様に春歌・夏歌……とせず、春部・夏部……賀部・別離……雑部下・連哥としている。本書の書写年代は岩崎文庫目録に延

宝頃かと推定している様に、いずれ「江戸前期」頃の筆写本とみてよいだろう。

本書には巻末に次の如き本文と同筆の識語がある。即ち

金葉和調集 白河院

大治元二奏^(覽歌)覺之御在位崇徳院／木工頭源俊頼朝臣／奉勅撰之

春部 九十五 恋部上 七十三

夏部 六十三 恋部下 百一

秋部 百廿五 雑部上 八十九

冬部 五十八 雑部下 四十八

賀部 廿九 連哥 卅五

別離 十七

と各巻の歌数を誌したものである。但し現在は、後述するが、巻二夏部に於て、(113)の詞書「郭公の哥十首人々によませ侍けるついでに」とあり、(113)の作者名「摂政左大臣」及び歌を欠き、直接(114)作者名「源雅光」とある。(113)作者名・歌は誤脱か。いずれにせよ、この源雅光歌以下(120)歌の前、作者名、権僧正永縁まで約一葉落丁しているので夏部は五十六首となつてゐる。落丁以前の歌員を誌したのであらう。巻九雑部上は八十九首とあるが前書同様に実は版本系(610)源頼家(版本光綱)母歌「日影にはなきなたちけり云々」の詞書中に見える歌「まことにやあまたかさねしをみ衣とよのあかりのかくれなきよに」の歌を源頼成(版本頼家)歌として別にたててゐるので(註五参照)版本系の数え方からすれば実数は八十八首である。また連歌卅五首とあるのは唱和連歌十七聯に俊頼の巻末歌一首を合せ数

えたものである。従つて現在は総計六九〇首、連歌十七聯、卷末歌一首となる。

扱、本書は伝経元本と同様に版本系不載歌三十一首を収録する。即ち秋部十八首、冬部六首、恋部(下)七首である。それらは前書の春部七首、夏部六首、恋部(下)の二首を被除歌とするほか、すべて全く重複していて共通する。その点、本書は伝経元本と近似し、続群書類従初度本系に続く、同類系本とみなされるのである。従つて先きに断り書きしたように、併述総括することにする。

又、この三十余首のほかに、版本系に較べて、本書にも欠員歌が散見される。即ち

春部 * (40) 左京大夫経忠歌・* (72) 右兵衛督伊通歌・* (93) 盛経母歌、夏部 (109) 源盛清歌・(110) 大中臣定長歌・* (113) 摂政左大臣歌(但し詞書あり)・* (122) 中納言実行歌、秋部 * (167) 皇后宮美濃歌・(172) 三宮歌、恋部上 (376) 源俊頼歌・(409) 神祇伯頭仲歌・(420) 春宮大夫公実歌・(435) 藤原為忠歌、恋部下 (458) 皇后宮権大夫師時歌・(488) 左京大夫経忠歌・(493) 源親房歌・(509) 源俊頼歌・(517) 藤原永実歌・(531) 読人不知歌・(549) 源行宗歌・(550) 源俊頼歌、雑部上 (572) 平康貞母歌・(621) 皇后宮美濃歌・(630) 賀茂成助歌、雑部下 (675) 覚誉法師歌・(679) 勝超法師歌、連歌 (704) 読人不知・前太政大臣家木綿四手唱和、(706) 読人不知唱和の二十七首が点在する。前書伝経元本に比し、* 印を誌した(40)・(72)・(93)・(113)・(122)・(167)の春部・夏部までの六首が更に被除歌となつている。そのほか、前書は(578) 美濃歌・(579) 内大臣家越後歌・(649) 源俊頼歌の三首が未載であつたが、さきに推論した如く、伝経元本かその親本系の誤脱と考えられるので、この被除歌六首が前書との事実上の異同と想定されるのである。又、この六首は(113)の歌を除き、所謂二度本切継に於ける第三・四次の被除歌と認められるので、前書伝経元本系親本を受けての過程に位置するものと推定される。本書の二度本系不載歌三十余首が、伝経元本のそれに比し、春部・夏部に異同の殆んどが存し

たのを考合せると、この被除も同じ処に見出される現象であれば、右の推定は一応肯首されてよいのではなからうか。
(517)藤原永実歌の欠落については、前書と同一な様態を示している。(516)の詞書「人のゆふかたまうてこむと申ければ」があり、(517)の詞書・作者(藤原永実)・歌「三日月のおほるけならぬ云々」と、更に(518)詞書「周防内侍したしくなりて後ゆめ／＼この事もらすな」と申ければよめる」(本文正保版)を書きおとし、(518)作者名(源信宗朝臣)・歌「あはぬまのまとるむ程の云々」にと続け書写している。前書同様に、この伝本系のもつ誤脱と考えられるのである。(113)摂政左大臣は前述の如く本書の誤脱歌と推定される。

次に本書の歌順形態であるが、本書は、

(一)(39)左兵衛督実能歌・(51)内大臣歌・(41)待賢門院中納言歌、(二)(48)修理大夫顯季歌・(54)大中臣公長朝臣歌・(49)皇后宮摂津歌、(三)(98)源俊頼朝臣歌・(97)藤原顕輔朝臣歌、(四)本書は(113)「郭公の哥十首人／＼によませ侍けるついでに 源雅光」(17ウ末行)の次から(120)「子規を詠める 権僧正永縁」(18才初行)まで、約一葉分を落丁しているのが不明。(五)(506)大納言経信歌・(508)よみ人しらす歌・(507)前斎院六条歌、(六)「読人不知歌」(524)・(528)・(525)、(七)「読人不知歌」(534)・(536)・(535)、(八)(586)小式部内侍歌・(590)平康真女・(591)むすめ歌・(587)修理大夫顯季歌、(九)(664)橘元任歌・(669)源行宗朝臣歌・(665)能因法師歌、(一〇)(685)隆成法師歌・(687)珍海法師歌・(686)源師俊朝臣歌の排列となっていて、前書とは、(一)・(二)・(三)を異にするが、(四)が落丁箇処にて不明のほか、全く同一である。いずれも、春部・夏部の処であるのが留意される。想像されるのは、この部分に於ける改変が、前書から本書にかけて特に試み案じられたのではなからうかということである。両書の歌順の排列形態の詳細については既に一括別記した。

以上、本書の本文・歌順形態を概説したが、本書には、かなり著るしい錯簡が見出される。綴葉装といふ書形から

屢々散見される改装・補修時の綴じ違いによるものと本書の場合も考えられる。

一、七丁裏末行は、(48)修理大夫頭歌の次に(54)詞書・作者名、「山花留人といふ事をよめる 大中臣公長朝臣」で終り、八丁表第一行は(57)の詞書、「後冷泉院御時皇后宮の哥合にさくらをよめる」に続いている。同裏末行は(62)源俊頼朝臣歌「梢には吹とも見えて桜花かほるそかせのしるし成けり」で終り、九丁表はさきの七丁末行の詞書作者名を受け、(54)の歌「をのゝえは木のもとにてや朽なまし春をかきらぬ桜なりせは」にと続き(49)と(52)歌で同表を書き終え、同裏は(53)と(56)行尊歌「余所にてはおしみにきつる花なれとおらてはえこそ帰るましけれ」が末行となつてゐる。十丁表は八丁裏の俊頼歌「梢には云々」を受け、(63)「落花の心を 長実卿母」が第一行となり以下歌順を追つてゐるのを見ると、八丁と九丁が前後してゐるのが判る。明らかに綴じあやまりである。

二、四十丁裏末行は秋部(260)の詞書「承暦二年内裏哥合に紅葉心をよめる」で終り、四十一丁表第一行は恋部上(386)の作者名「少将公教母」に続いている。そしてこの(386)から恋部下(513)詞書・作者名「後朝恋を 藤原顕輔朝臣」までの二十丁―即ち四十一丁表から六十丁裏末行まで―続いている。六十一丁表第一行は、四十丁裏末行の(260)の詞書を受けて、(260)の作者名「源師賢朝臣」・歌「はゝ木々の橋橋カやいつく云々」へとなつてゐる。又この(260)から冬部・賀部・別離を経て、恋上(386)詞書「顕季卿家にて七夕によする恋を」まで続く二十二丁がある。即ち六十一丁表から八十二丁裏末行迄である。

三、(513)詞書・作者名(六十丁裏末行)は前者の次、八十三丁表第一行に(513)歌「あつさ弓かへる朝のおもひにはひきくらふへきことのなき哉」にと続くのである。恋下(513)歌以後は雑部上下・連歌と本来の順をおつてゐる。如上の説明で判るように、この錯簡は明らかに綴葉の上での誤りであり、寧ろ補綴の際の結果―乱丁―と思はれるものであ

る。

附記

猶本書には「イ本」との校合、或は註記等の書入が、かなり散見され、特に、卷一春部に多見する。卷一に限り、例示すると、まず「イ本」とあるのは

(7) 詞書、む月の一日雪のふり侍ければ……、(9) 初句、あさまたき、(10) 初句、年をへて、(23) 大藏卿匡房卿保イ
又在也、(25) 第四句、かたよりしける、(26) 詞書、池岸柳をよめる、(29) 第五句、行かゝるらん、(36) 詞書、……京極
の家の御幸に、(43) 源貞亮朝臣、(44) 第三句、見つるかな、(47) 詞書、深山桜・、(52) 第五句、たつとこそ見れ、
(55) 詞書、堀河院御時女御殿女房たち……、(56) 第五句、帰るましけれ、(71) 詞書、……山田つくるをみてよめる、
(73) 詞書……南殿にわたり給たりけるに……、(98) ……三月尽の心をよませ侍けるに……、(97) 第五句、かなしかりけり、
等が瞥見される。が、イ本は何本かは俄かに決め難い。詳細な調査を後日に待つものである。

又、書入であるが、同様に卷一から例示すると、

(4) 皇后宮肥後藤原定成女、(5) 前齋宮内侍大藏大甫永相、(12) 詞書、百首歌の中に、(23) 詞書、百首歌中に……、
(24) 院御製白河院也、(25) 詞書、百首歌中に、(27) 前齋宮尾張兼昌女也、(31) 新院御製鳥羽院也、(32) 太政大臣雅実右
従一位、(34) 待賢門院兵衛頭仲女、等が散見される。書入は作者出自等を中心とした註記である。このほかに(47) 橘
俊宗女或本前太政大臣家安芸、など「或本」と記する箇所もあるが、さきの「イ本」と同一かは明らかにしない。又筆
写後の同筆の見消ちなど間々散見する。

そのほか、作者名を欠落するなど例へば(259)作者名藤原仲実^{実イ}は初度本(藤原仲家朝臣)・続類従初度本など明記するも本書に欠落するなど見出される。同様に扱えぬかもしれぬが、(681)作者名、覚雅法師(続類従初度本あり、但し、前の伝経元本、或は所謂二度本にも欠落する諸本あり)を書写していないなど、更に詞書・歌等すべてに亘る精査を必要とするものであるので、単に附記するにとどめた次第である。

天理図書館蔵吉田文庫本

袋綴一冊本。表紙は藍地金雲形文様、竪二五・五糎、横十八糎。題簽・外題共にない。料紙は楮。字面高サ約二十二糎。墨付九十六丁。每半葉に四乃至五首を詞書・作者・歌とほゞ別行十二・十三行に書写している。内題「金葉和詞集巻第一(一十)」と記し、その下に細字にて「或本何モ巻ノ字ナシ」と註記する。部立は前兩書同様、春部・夏部……雑部・連歌とする。表紙の次白紙(扉)表に押紙があり「春^{はる}夏^{なつ}秋^{あき}冬^{ふゆ}賀^か／別^{へつ}恋^{こい}上^う下^{さう}雑^{ざう}下^げ此内連哥」と二行に墨し、その下に「崇徳院年号此集因白川法皇勅也」^{大治年中俊頼奉之}と誌す。又その左にやゝ少字にて「詞花ヨリ〔前^カ〕也」と薄く書する筆の跡が窺われる。欄外余白・行間に本書筆写後、同筆の書入歌、又は本文中に他本との校合、見消ち等甚だ多い。筆写後程経ぬ時期の校合・補訂と推定される。本書には奥書はないが、「江戸初期」頃の筆写とみとめられる。

本書は本来所謂二度本の伝存本の一つとして取扱われるべき性質の伝本であるが、欄外歌に多く、前記二書同様の二度本不載歌二十一首を書入、猶本行中にも数首の不載歌が散見され、その多くが前兩書の歌と共通するので、その点、次稿二度本伝本としても、これを扱うが、同時にこの不載歌を対校している意味に於て、前二書に準じて、本稿で併記することにしたのである。

まず欄外歌は比校本歌順位置を○印で本行中に明示し三十二首書かれているが、春部五首、夏部三首、秋部十首（但し、その中で、（167）皇后宮美濃歌「藤はかまはやはころひて云々」・（252）藤原伊通歌「いまはしもほに出ぬらん云々」・（256）藤原行家朝臣歌「河霧のたちこめつれば云々」・（270）長実卿母歌「色ふかきみ山かくれの紅葉を云々」——詞書左肩に「イ本□□□□□□」——とあり——の四首を含むので、事実上の二度本不載歌は六首である。）、冬部五首（但し、（277）源定信歌「をとにさへ袂をぬらす云々」・（293）神祇伯頭仲歌「冬さむみ空にこほれる云々」の二度本歌二首を含むので、同様に事実上は三首である。）、恋部下四首、雑部上一首（但し、（572）平安助女「平康貞女ノ誤歟」歌「イカテカハ袂二月ノヤトラマシ云々」と片仮名交り文であり、詞書肩に「イ本ニアリ 諸本ナシ」とある）、雑部下三首（但し、（648）知信朝臣歌「虫のねはこの秋しもそ云々」・（651）「読人不知」歌「身ニマサルモノナカリケリ云々」と、片仮名交り文で詞書肩に「イ本ニアリ」と註記する。）、（686）源俊頼歌「四方の海の浪にたゞよふ云々」の三首である。）、連歌一聯（（708）頼算法師・読人不知唱和である）である。註三
が、事実上の二度本不載歌は註記の通り二十一首となるわけである。

たゞし本書で注意されるのは○印を誌しながら、異同歌を書落したか、或はすでに依拠した親本にも、かく記号し異同歌が該当箇処に存する事を示しながらに掲示しなかつたものか、事情の如何は現在判断し得ないが、次の如く誌されている。即ち、春部（39）の次（40）の歌、本書は欠歌である。その故歟、夏部（121）の次（122）の歌、本書及び東洋文庫本欠歌。その故歟。但し伝経元本（122）の次に、藤原顕成歌「空になる心のきかは云々」一首あり。）、秋部（169）の次（伝経元本、宗延法師歌「天河君わたりなは云々」、藤原時昌歌「彦星のうきつの浦に云々」の二首あり。本書欠歌故歟）、同（198）の次（伝経元本・東洋文庫本、源明賢歌「さやかなる月をかくせる云々」、藤原為忠歌「いつとなくおなし空ゆく云々」の二首収録す。本書欠歌。その孰れかを書落すの故歟。後述一覽表参照。）、同（211）の次（先の両本、藤原親隆歌「三輪の山杉まよりもる云々」、瞻西上人歌「天

河雲の梯云々」の二首がある。本書欠歌故歟、同(213)の次(たゞし塗沫の印の傍線見消ちす。先の両本、藤原重基歌「秋の夜の更行まゝに云々」、藤原忠兼歌「秋の夜の清水はくまし云々」、源定信歌「ひるとのみいはれのゝへの云々」の三首あり。同本書欠歌故歟、同(124)の次(先の両本枝「林」賢法師歌「なからへは思出にせん云々」一首あり。同本書欠歌故歟、同(218)の次(先の両本、藤原時昌歌「神のすむみかさの山の云々」の一首あり、同本書欠歌故歟、冬部(312)の次(先の両本、平実宣歌「谷川のむすふ水の下にさへ云々」の一首、(313)の次―本書は(313)欠歌―に両本は、慶経法師歌「思ひやれ嵐の山の云々」、藤原致時歌「朝くらやこゑこそ空に云々」の二首あり。同本書以上三首欠歌歟、恋部上(433)の次(先の両本二度本不載歌なし。本書には(434)摂政左大臣歌・(435)藤原為忠歌・(436)読人しらす歌・(437)三宮大進歌の四首を欠いている。その故歟)、恋歌下(466)の次(先の両本、源明賢歌「歎きあまりしらせ初つる云々」、藤原宗国歌「けふこそはいはれのゝへの云々」の二首あり。同本書欠歌故歟、同(470)の次(先の両本、藤原親隆歌「しほたるゝ伊勢をのあまの云々」の一首あり。同本書欠歌故歟)である。従つて、註記の如く○印が両本に記載する歌の該当箇処に附されているのをみると、本書或は依拠本の書落しであるかとも推定されるので、本書或は親本は、春部一首、夏部一乃至二首、秋部十一首、冬部三乃至四首、恋部上四首、恋部下三首の計二十余首のうち、それに近き歌員が、さきの欄外比較歌二十一首に更に更に加えられることが予測されてくるのである。三本間相互には後述総括する如く、各異同が存するが、本書の比較本はさきの両本と類系をなすものと予測され、比較的東洋文庫本系に近似する関係が見出されるのである。

しかしながら、本書の現在からは、如上の推定はあくまでも推定にすぎず、前二本と類似するこの本書欄外歌は二十一首で、春・夏・秋・冬・恋(下)部に散見されるのであつて、前の両本に較べ、歌員は全般に減少しているのが認められる。その点、本書の依拠した比較本は、這般の事情を考慮に入れないかぎり、類系本ではあるが、伝流の過程

に於て派生したところの前二本とも異なる別本系であると考えねばならないのである。がしかし、本書欄外歌で前二本に未収録の歌は次の僅か二首―即ち、(27)・(28)の行間にある、「静念法師 山ひこのこたえさりせはよふことりむなしきねをやなきて過まし」(初度本・続類従初度本系所載歌)、(108)の上欄に「鳥羽殿哥合に卯花 藤原季通 見し人の立しとまれば卯花のさけるかきねや白河のせき」(初度本・続類従初度系所載歌)―である以外はすべて伝経元本に収録する歌である点、やはり同類群の比校本を想定されるのである。この比校本であるが、この欄外歌の中には「イ」「イ本ニアリ」「イ本此哥ナシ」「諸本ナシ」等註記するものと、無註記のものがある(後述一覽表参照)ので、これを一本による校異と断ずることは出来難く、或は二本以上の比校本があつたのではないかとも思われるが、本書は以下誌す如く、かなり錯雑した校異が施されているので這般の事情になかく説明しがたいものがある。

次に右の欄外歌とは別に、本行の中にも、数首二度本不載歌を散見する。即ち

(一)夏部卷末(164)の次に「みな月はらへの心を 藤原季通 けふくれはあさのたちえにゆふかけて夏みな月のみそきをそするイ」(「イ」とあり、初度本・続類従初度本系に於ても卷末歌に続く歌であるので、本行余白に続けて「イ」本校合の際書加えられたものかもしれない。)

(二)秋部卷末(273)の次に「九月尽の心をよめる 源淳国 おしめとものへの草木のかれぬれは露たに秋はとまらさりけり」(初度本は卷末歌―但し後筆補写―であるが前者同様にも考えられる。しかし続類従初度本系は(271)の次に続いているので必ずしも同一の推定はなしがたい。ただ、「イ本此哥ナシ」の註記があるのは、前記した如く無註記の比校本を卷末余白に書加えたとも考え合せられるが、本行と同じ書方であるので、俄かに定め難い。但し、いずれにせよ二度本不載歌であれば、一応比校本に拠つたものと推定しておく。)

(三) 恋部上卷末(448)の次に(443)の「摂政左大臣の家にて寄花恋の心をよめる

源雅光

イ本ナシ

ふく風にたへぬ梢の花より

もとゝめかたきはなみた成けり」の次に「恋の心をよめる

行尋法師

同

恋わひてかへす衣はうみなれやうらになみた

のかゝるとおもへは」とある。(初度本欠部、続類従初度本系には未載である。「同」とあるのは前歌「イ本ナシ」の意である

のは勿論であるが、恋部卷末歌(448)の余白に無註記の比較本によつて、この二首が前歌の場合と同様に併記されたのではなからうか。或いは本書の親本がかく補写してあつたのかもしれない。が、いづれにせよ卷末にかく併記されているのは自然の姿ではない。)

(四) 雑部下(678)と(680)の間に「覚樹法師正雅——イチとせまてむすひし水のたまりゐてわかみのためとおもひやは

露はかりイ

せし」(初度本欠部・続類従初度本系未載歌であり、而も(678)・(680)の間に書写されているのを見ると、本書の依拠本にかくあつ

たものであらう。「イ」本との校合を示すのも猶更にそれを裏付ける。因みにこの歌は、千載集釈教に「提婆品をよめる 僧都覚

雅」とあり、第三句が「露はかり(八代集抄)」とある。)

以上四首は附記したような事情が背後に考えられるにせよ、先の欄外歌二十一首に更にこの四首が加えられ、計二十五首が二度本不載歌となるわけである。特に(三)の「恋わひてかへす衣は云々」と(四)の「千とせまてむすひし水の云々」は前二書にも未載の歌として留意される。

又、本書は卷十卷末歌俊頼の「なゝそちにみちぬるしほの云々」は九十三丁表第一行にて終るが、その次に附箋一葉あり、それに「大永三末以或本一校了校本／者狼籍物也諸本何モ俊頼／なゝそちの哥を終トス一本如此／如何之卯月日」と同筆にて誌す。この附箋によると、大永三年卯月に「或本」を以つて一校したとあるが、さきに内題巻第一の下に「或本何モ卷ノ字ナシ」とある「或本」に相当するものと思われるが、次の「一本如此」とある「一本」とはこの「或本」と異なる別な校本を意味する如く受けとられる。がその一本は前例の欄外歌にも見受けられた「イ」本の

註記のあることや本書に屢々校異する「イ」本をも含むものであるのか、その点判然とし^{註四}ない。ともかく「二本如此」とある附箋以下には次の如く、まず連歌二聯・歌一首を書写す。即ち

よみ人しらす

そはもかくれぬふちはかまかな

野ことにしほころひぬれはをみなへし

ならぬかきなにをたねとて生ぬらん

ねなしかつらのこゝちこそすれ

龍女成仏をよめる

勝超法師

わたつうみのそののみくつとみし物をいかてかそらの月となりけむ(679)(93オ末行)

の如く二度本にみない連歌二首を収録している。更に(93丁裏白紙)九十四丁表から裏第一行に

二度本

第三 秋部

藤原忠隆下風ふけは 忠命^{マ、}上草枕

大納言経信

後冷泉院御時殿上の哥合に月をよめる

俊頼本ニナシ
月影のすみわたるかなあまのはら雲吹はらふ夜はの嵐に(186)

第六別離部

春宮大夫公実

中納言通俊返しさしのほる

俊頼本ニナシ
あさ日とも月ともわかすつかのまも君をわするゝ時しなけれは(370)

第九雜部上

俊頼朝臣下さりとともと(94オ末行)

皇后宮美濃

よなくはまとろますしてあり明の月^{つき}せす物をおもふ比かな(621)

の三首、本書未収録歌を記し、又更に第二行から、

他本有哥

春部

長実卿下あつさゆみ 頭季卿上うくひすの

坂上あきさね

たちわたる霞の衣なかりせは春きたりともいかてしらまし(初度本・続類従初度本系なし)

俊頼朝臣下はる雨は 良暹法師上梅のはな

同心をよめる

藤原たかさね

うくひすの梅の花かさ散ぬれはふる春雨にそほちてそなく(初度本19藤原為真・続類従本系(16)の次藤原為真とす。)

夏部

頭隆卿下夏はて

みな月はらへをよめる」(94ウ末行)

源ありまさ

みそきする川瀬にたてゐるいくるさへすかぬきあけて「み」ゆるけふかな(初度本230・続類従初度本系(163)藤原基俊歌の次にあり、又本書欄外歌にあり。)

をなし心をよめる

藤原俊通朝臣

けふくれはあさのたちえにゆふかけて夏みなつきのらはをそする（初度本232・統類従初度本系（104）の次巻末歌、本書本行中にあり。）

本云此二首普通集になし

秋部

皇后宮美濃

藤はかまはやほころひてにほはなん秋のはつかせふきたゝすとも（167）

隆経朝臣下ひく駒の 仲正上あつまちを

藤原知忠

ひく駒のかけをならへてあふさかのせきちをつゝきこゆる成けり」（95オ末行）（初度本269藤原朝隆・統類従初度本系（195）ノ次藤原朝隆とす。本書

欄外歌にあり。）

顕仲朝臣下世中を 肥後上しら露を

行宗（正保版藤原行家）

秋ならてつまとふ鹿をゝきてみんおりからこゑは身にはしむかと（240）

俊頼下うつらなく 藤原基光上うち河の

河きりをよめる

紀宗兼女

よと河のをちかた見えぬ秋霧にともになゝして舟くたる也（初度本350紀宗兼・統類従初度本系（254）の次紀宗兼とす。本書欄外歌にあり）

長実卿母下 経則上おしめとも

九月尽の心をよめる

源縁法師（正保版中原経則）

あすよりは四方の山辺の秋霧のおもかけにのみたゝんとすらん(271)(初度本・続類従初度本系作者中原経則とす)

冬部「(94ウ末行)」

基長卿下なよ竹の 光清上なにことに

時雨をよめる

覚雅法師「本書欄外歌にあり」

と、これまであり、上欄に「本ノマヽ」と註記する。

先の附箋に「諸本何モ俊頼なゝそちの哥を終トス一本如此如何之」と誌すのは、この附箋以下の連哥・二度本・他本有歌とある上掲の諸歌を指し含めることを意味しているのであろうか。とすると「大永三年未以或本一校了」とあるのは、さきの欄外・行間余白歌や本行中の二度本不載歌、或は本書本来の本文に施された「イ」本との有無・校異すべてを云うものであらうかと想定されるのであるが、欄外歌中にも「イ」本と註記するもの、無註記のものなどもあり、単一に「或本」をもつて比校本を一本とすることも、又決定するわけにはいかない。更に校合の際、「或本」であるとする「イ」を書落としたとも考えられなくもないが、欄外歌の歌数の上からみれば、その歌員もかなりの数を見出すので、これも想像の範囲内を出ないものである。特に本行中に書写されている二度本不載歌、上掲の(一)～(四)までは「イ」「イ本此歌ナシ」「イ本ナシ」等、「イ」本との異同を明記する処からみれば、猶更である。従つて大永三年校合の或本とは一概に附箋箇処以前の校合のすべてを含むというわけにはいかないのである。かつ又、この附箋が、本書筆写者による同筆のものであれば、「大永三年云々」は、本書の依拠した親本にすでに附せられていたものと推定されねばならず、「江戸初期」書写の本書は、この親本をそのまゝに転写したものと想定され得るとすると、この決定は一層困難とならざるを得ないのである。また各所に散見する補訂のあとなど、かなり狼

籍の感はまぬがれず、猶この転写期にも筆写者の手が加わつたかもしれず、現在その親本の伝存本の発見を待たぬ限り、如何とも云いがたいのであるのが実情である。一応粗暴な想像の難はまぬがれぬが、この附箋箇処以前を大永三年校本とみることにし、以下を「一本如此」という、その一本と暫く想定しておくことにする。

それはともかく、この附箋の記事を信ずるかぎりに於ては、大永年間には所謂二度本とは別本系の欄外余白書入歌の如き歌員を持つ伝本が存していたと想定される点、注目されねばならない。その意味では、この欄外余白書入歌の意義は重要である。又附箋に云ふ「一本如此」が「他本有歌」をも含むのであれば、さきの連歌二聯（二度本未収歌の）に更に「板上あきさね」歌・「藤原たかさね〔為真の誤歟〕」歌の二首を加へ、二十九首が二度本不載歌として数えられるわけである。前の連歌二聯は別として、あきさね歌・たかさね歌二首のうち、後者は先行する初度本・続類従初度本に収採されている歌であり、伝経元本・東洋文庫本に欠くも、猶受け継がれゆく可能性ある歌である点、本書に残存する意義は尠くないと云えよう。従つて後述総括する場合も之等を含めて対比することにする。

本稿では如上の二度本未収録歌を問題とするにあるが、参考までに二度本としての本書の特徴をも併せこゝに誌すことにする。（前記の附箋以下は云うまでもないが、この対称としない。）

まず、前例に倣い、正保版に比較すると、本書は次の歌を被除している。

（40）左京大夫経忠歌・（72）右兵衛督伊通歌・（109）源盛清歌・（110）大中臣定長歌・（122）中納言実行歌・（167）皇后宮美濃歌・（186）大納言経信歌・*（219）藤原家経朝臣歌・（240）藤原行家歌・（252）藤原伊家歌・（256）藤原行家歌・（270）太宰大貳長実卿母歌・（277）源定信歌・（289）神祇伯頭仲歌・*（293）神祇伯頭仲歌・（313）源雅光歌・（376）としよりの朝臣歌・（409）神

祇伯顯仲歌・(420)春宮大夫公実歌・*(434)摂政左大臣歌・(435)藤原為忠歌・*(436)読人しらす歌・*(437)三宮大進歌・(458)皇后宮権大夫師時歌・(509)源俊頼朝臣歌・(531)「読人しらす」歌・(549)源行宗朝臣歌・(550)源俊頼朝臣歌・(572)平康貞母歌・(621)皇后宮美濃歌・(630)賀茂成助歌・(648)藤原知陰歌・*(651)「読人不知」歌・(675)覚養法師歌・(679)勝超法師歌・(686)源俊頼朝臣歌・(704)読人しらす・前太政大臣家木綿四手唱和・(708)頼算法師・読人しらす唱和

の三十余首を闕いている。そのほか、卷七恋部上卷末に、前記した通り、(448)(卷末歌)の次に、唐突に(443)源雅光歌「ふく風にたなひく梢の云々」・行尋法師歌「恋わひてかへす衣は云々」とあるが、本書に至る伝流過程に於て附加されたものと推定されるので、本書の原形は寧ろ(443)は欠歌であつたかと考えられる。(93)盛経母歌は(97)・(98)(本書卷一巻末歌)のあとに続くが伝経元本にこの歌順が一本伝存するので暫く後考を待つことにする。

又上掲の*印の六首は本書特有の欠員歌である点、注意される。まず、(219)家経歌は被除歌として本書以外の伝存本では、正宗文庫蔵「南北朝」伝二条為明筆写本にのみ管見する。古鈔本に属する善本であるので、一概に本書系の誤脱歌とすることは出来難い。が他にかような伝本を見ない。(293)神祇伯顯仲歌は(295)匡房歌・(296)公長歌の行間に細字にて補写するも、その上に「水鳥をよめる 源家〔時〕 嵐ふく夜半の河浪たかけれはうきねのをしも夢さめぬらんイ」と重ねて筆写するので、わづか「冬、夜月〔を〕」神祇伯顯仲 冬 イ本爰ニ□□アリと判続される。この細字補写の歌は前記の(293)「冬さむみ空にこほれる云々」の歌であろう。イ本とあるからには他本による補写とみて、本書の欠員歌とした。また一方、伝存二度本中に、この(293)の歌を被除歌とする伝本をいまだ被見しない。現在の処、本書特有の欠員歌とするほかはない。

次の(434)摂政左大臣歌・(436)読人しらす歌・(437)三宮歌は、本書では

皇后宮にて文をかへさるゝ恋といへることをよめる

皇后宮美濃

こふれとも人の心のとけぬにはむすはれなからかへるたまつさ(433)

○

人・く・に・恋・の・哥・よ・ませ・侍・ける・に・

寄・花・恋・とい・へる・こと・を・

摂・政・左・大・臣・

あたなりし人の心にくらふれは花もときはのものとこそみれ(438)

となつてゐる。これは明らかに誤写(本書かその親本か判らぬが)である。まず、(433)は前の伝二条為明筆写本によれば

人・く・に・こ・ひ・の・哥・よ・ませ・は・へ・り・け・る・に・

摂・政・左・大・臣・

こゝろさしあさちのすゑにをく露のたまさかにとふ人はたのまし(434)

次に(436)読人不知歌・(437)三宮大進歌と続き、(435)為忠歌は被除歌で、次に

寄・花・恋・の・心・を・よ・め・る・

摂・政・左・大・臣・

あたなりし人のこゝろにくらふれははなもときはの物とこそみれ(438)

とあるのをみれば一見して、(434)の詞書から、(438)の同作者名に目移りして、書き落としたことが判る。筆写上の誤脱である。たゞし、(435)為忠歌は版本系写本を除く殆んどが被除歌となつてゐるのを思い合すれば、本書もこの(435)の歌は本来欠員歌であり、(434)摂政左大臣歌・(436)読人しらず歌・(437)三宮大進歌は転写上の誤脱歌と推定される。

(434)・(436)・(437)の両三歌を切棄てた現存本が存しないのであれば猶更に、明らかな誤写と云えよう。

(651)「読人不知」歌は管見する伝存本には被除歌となつてゐない。転写過程に於ける誤脱かとも想像されるが、判然

と決定する理由もなく、本書特有の欠歌とみるほかはない。

次に本書の歌順について同様に概略附記しておくことにする。

(一) (39) 左兵衛督実能歌・(51) 内大臣歌・(41) 待賢門院中納言歌、(二) (48) 修理大夫頭季歌・(54) 大中臣公長朝臣歌・(49) 皇后宮摂津歌、(三) (58) 大藏卿匡房歌・(60) 源雅兼歌・(59) 長実歌、(四) (97) 藤原頭輔朝臣—季イ歌・(98) 源俊頼朝臣歌・(93) 〔盛経母〕歌、(五) (118) 作者藤原頭輔(119) 歌「ほとゝきす心も空にあくかれて云々」・(119) 詞書及び作者藤原孝善(118) 歌「ほとゝきすあかて過ぬる声により云々」、(六) (163) 藤原基俊歌・(164) 中納言頭隆歌(卷二卷末歌)・藤原季道歌「けふくれは云々」、(七) (272) 源俊頼歌師俊朝臣イ・(273) 春宮大夫公実歌(卷三卷末歌)・源淳国歌「おしめとも云々」、(八) (448) 皇后宮別当歌・(443) 源雅光歌(卷七卷末歌)・行尋法師歌「恋わひて云々」、(九) 「よみ人しらす歌」(534)・(536)・(535)・(三〇) (586) 小式部内侍歌・(590) 平康貞母・(591) むすめ歌・(587) 修理大夫頭季歌、(一〇) (664) 橘元任歌・(669) 源行宗朝臣歌・(665) 能因法師歌、(一一) (678) 皇后宮権大夫師時イ・覚樹法師正雅—イ歌「ちとせまで云々」・(680) 僧正永縁歌、の歌順形態を示している。その中で、(六)・(七)・(八)・(三)は二度本不載歌を含むものであり前述した通りである。(五)は正保版系の明らかな誤りであり、(一)・(二)・(九)・(三〇)・(一)は精撰本への過渡形態に屢々見出される歌順である。従つて(三)・(四)のみが本書特有の順次を示しているものといえる。しかし(三)は伝存二度本中、尊経閣文庫蔵建武五年奥書本・伝為遠筆写本や正宗文庫蔵〔南北朝〕写伝二条為忠本等の最古鈔本二本と、河野信一記念文庫蔵〔江戸中期〕写八代集本(E)に僅かにみられる程度であるが、前期二本の如き古鈔本にこの歌順をとゞめることは注目に価する。(四)は前記の伝経元本に管見するもので既に述べた如くである。

如上、所謂伝存二度本の一本としては、本書は従來說かれるところの精撰本への過程に於ては、猶錯雑する要因を

含むが、精撰本に近い段階第三次形態（次稿にて扱う）以後の伝流本と想定して略々誤りはなからうかと思われるのである。

猶瑣末なることながら、「或本」「イ本」などの著るしい校合跡とほかに、「橘もとたう元任能因男」（170）とか、（171）

前斎宮河内歌「こひく在千載集てこよひはかりは云々」・（633）源俊頼朝臣歌「世中千載反歌はうき身にそへる影なれや云々」などの註

記、又（610）源光綱母歌の詞書の下に「このはしかきのうた式二書たる本アリ」註五などの書入、或は（496）源縁法師歌「名本ノ

マ、（数字アリ、写真不明）聞くよりかねてもみつる云々」とか、（642）藤原基俊歌、第三・四句「梅かえのの花たにわれに物かたりせよ梅花はなたに諸本」・

（640）「源俊頼朝臣諸本俊頼」とか、（380）・（408）・（466）の「大式長実」の右上の傍に「太宰」などと補筆するなどのほか

漢字に仮名を、仮名に漢字を当てるなど、かれこれ散見される。「イ本」或いは無註記の校合以外にも、（488）「山俊頼本ニナシさ

とのおもひかけひに云々」・（493）源親房歌「物俊頼本ニナシをこそしのへはいはて云々」など、俊頼本云々の校異が僅か数ヶ処―前

記附箋以後の第二度本の処にも―散見されるというような、かなり錯雑・混乱した書入を持ち、執れがこの筆者のも

のか、本書の依拠本以前の姿か、ほとんど截然としがたい様相を示している。

また誤写・誤脱などかなり散見する処などもあり―例えば作者名では、（488）の左京大夫経忠・（691）の源俊頼朝臣を

記さないなど―必ずしも系統正しい善本とは云難いが、前述の欄外歌・附箋箇処からの附記部分など有する意味で

は、種々の問題を猶多く含む伝本といえよう。

河野信一記念文化館蔵八代集本

本書は「江戸中期」頃筆写八代集中の一本である。

綴葉装、一冊。縹色地金泥水辺草花模様表紙。竪二五・四糎、横一七・九糎。題簽（短冊）は表紙左肩に「金葉和歌集」と墨書する。見返しは金銀箔散らし模様。料紙は鳥の子紙。字面高サ約二二糎。墨付一一一葉。前後に白紙各一葉。毎半葉に略々三〇五首を詞書・作者・歌と別行十行に端正に書写している。書入・校合等は殆んど見出さない。内題「金葉和歌集卷第一（一十）」、部立は前書等と異り春部・夏部・秋哥・冬哥・賀哥・別離哥・恋哥上下・雜哥・雜哥下・連哥として、春・夏のみ部とし他は哥としてすでに混淆の態が窺われる。

本書は寧ろ所謂二度本系統として類別されるべきであるが、前記伝経元本・東洋文庫本又はさきの吉田文庫本にもつ欄外歌等とも異る、二度本未収録歌僅か十二首たらずにすぎないが散見される。従つて所謂二度本として総括することも、前記諸本同類群として扱うことも出来難いので、所謂二度本との間の一本として、此処に併述した次第である。

因つて、まず本書の各卷所収歌をみると、春九七首 夏部六三首 秋歌百七首 冬歌五十首 賀歌二九首 別離歌十七首 恋歌上七二首 恋歌下百首 雜歌上九二首 雜歌下五一首 連歌二一聯 卷末歌一首、である。扱本書の伝写する二度本未収録歌を次に掲出すると

秋哥

思ふこと侍る比月をみて

俊頼

1 いとしく心尽の秋しもあれ世を恨ても月をみるかな（210）源行宗歌の次。初度本・続類従初度本系（以下、初・続初と略称す）或は伝経元本・東洋文庫本・吉田文庫（前記三本と以下略称す）欠

源俊頼

2 あたしのゝ萩のすゑこす秋風にこほるゝ露や玉川の水（243）大式長実歌の次。初・続初・前記三本欠

俊頼

3 さきりせしさのゝ中河つゝらゐて井くるに波の音絶にけり (292) 藤原仲実歌の次・初・続初・前記三本欠)

恋下

恋のうたとて

清原すけたか

4 逢ことはかたゝの浜による舟のみるめ渚にこかるとをしれ (469) 読人しらす歌の次。初欠部・続初欠・前記三本に見ゆ)

摂政左大臣家にて恋哥よみけるに

藤原親隆

5 しほたるゝ伊勢男の海士の袖たにもほすなる隙はありとこそきけ (471) 読人しらす歌の次。初欠部・続初中公夏筆両本及び前記三本に見ゆ)

雑哥上

しほゆあみになるをのかたへまかりけるかつねに音つれんなど申てをとつれさりければつかはしける

藤原よしすけ

6 いかなれはなるをのみなときゝしかと便りの風に音つれもせぬ (570) 藤原正季歌の次。初欠部・続初・前記三本欠)

雑哥下

提婆品

覚雅法師

7 千年迄むすひし水を露斗わか身のためと思やはせし (680) 「権僧正永縁」歌の次。初欠部・続初・前記三本中、経・洋本欠、吉本本行に見ゆ)

実範のおほくの仏にあひたてまつらさりけることなといひつゝけ哥よみけるによめる 宋延法師

8 百千度鸛の林にかくれける月をもよそに思ひける哉 (683) 権僧正永縁歌の次。初欠部・続初・前記三本欠)

此身かゝみのことしといふことを

信泉法師

9 はかなしと思ふ心をますかゝみかけに此世をたとへてそみる (684) 懷尋法師歌の次。初欠部・続初・前記三本欠)

光いむ法師身まかりての法事諷誦に書付侍ける

行真法師

10 うたかたの消にし玉はけふやさははすのうき葉にうきてゐるらん (687) 珍海法師母歌の次。初欠部・続初・前記三本欠

連哥

摂政左大臣家にて人く連哥せさせてあそひけるに曉になりてかねの声ほのかにしければ 源俊頼

11 こゝのつのその声とをく聞ゆなり

藤原しけとも

わかむつのをのつみやきるらん (707) 律師慶範・まへなるわらは唱和連哥の次。初欠部・続初・前記三本欠

たるきにとりをさしたるをみて

源俊頼

12 たるきには山のうつはりさしてけり

きやうしん法し

軒には海の月をやとして (709) よみ人しらす唱和連歌の次。初欠部・続初・前記三本欠

である。十二首の中で、(5)藤原親隆歌が続類従初度本系の公夏筆両本に見出され、(4)清原すけたか歌が本稿前記三本に載録される以外十首は、本書に於てのみ撰入している歌員といえるわけである。その意味では前記三本に次ぐ別本系をなすものと一応は想定されなければならない。次に誌るす如く本書は所謂二度本系の類群のなかに本来存すべき伝存本であるので、この十二首は金葉和歌集撰述過程を考察する上ではかなり重要な意義を持つものである。

さて、その十二首のうちわけは、撰者俊頼歌五首の3「さきりせし云々」のほかは、散木葉歌集に載録されている

註六
が、この「さきりせし云々」の歌はこの他にみず留意される以外は、清原すけたか・藤原親隆・藤原よしすけ・覚雅法師・宋延法師・信泉法師・行真法師・藤原しけとも・きやうしん法師（恐らく行真法師と同人歟、とすると二首）は各一首である。そして俊頼・親隆（八代集抄卷末附載異本歌(713)の作者）・覚雅法師はいずれも流布本金葉集作者として見出され、行真法師は吉田幸一氏蔵伝二条為遠本欄外歌作者で且つ当代の歌人である（前稿本集146頁150頁参照）。また、連歌の藤原しけとも・きやうしん法師は俊頼と唱和しており、註記した如く散木棄歌集にも集採しているので共に当代の作者である。更に藤原すけたか歌は前記三本に収録されるのを見ると、他の藤原よしすけ・宋延法師・信泉法師の三歌人が本書に於て新らたに撰出されたわけである。いずれ当代の作者と想定され、加えて前記三本には見出されない雑歌上下の箇処に、この三歌人が撰ばれているのを考合すと、本書は、初度本（欠部）・続類従初度本系、更に前本系等を経たあとに、所謂二度本に至るの間に撰述過程を想定され得る草案本としての形態を示唆しているものと、本資料の上からは考えられるのである。伝存資料としては江戸期のものにすぎず、而もわずか一本をもつて即断するの危険は云うまでもないが、かゝる草案過程を否定するに於ては、比較的整然とした筆写であるところからも、単に現存本伝流の間に於ける錯雑する交流の結果として本書を規定することは一方又同様に殆んど困難に近いと云わねばならない。従つて、一資料ではあるが、現在のところ、かく想定し、所謂二度本に最も近き草稿過程として、本稿の処に於て併せ述べた次第である。

上述の十二首を除くと、本書は二度系―精撰本への途路にある―の形態を示しているのは伝経元本・東洋文庫本同様である。

まず前例に倣い、版本系に存し、本書に欠く歌員を次に誌るす

春部 * (72) 右兵衛督伊通歌、夏哥 (109) 源盛清・(110) 大中臣定長歌・* (122) 中納言実行歌、秋哥 * (167) 皇后宮美濃歌・* (240) 藤原行家歌・* (252) 藤原伊家歌・* (256) 藤原行家歌、冬哥 * (277) 源定信歌・* (289) 神祇伯頭仲歌・* (313) 源雅光歌、恋哥上 (376) 源俊頼歌・(409) 神祇伯頭仲歌・(420) 春宮大夫公実歌・(435) 藤原為忠歌・* (443) 源雅光歌、恋哥下 * (476) 藤原忠隆歌・(488) 左京大夫経忠歌・(493) 源親房歌・(509) 源俊頼歌・(531) 読人しらす歌、雑哥上 (630) 加茂成助歌、雑哥下 (675) 覚誓法師歌・(679) 勝超法師歌

であり、春部一首・夏部三首・秋哥四首・冬哥三首・恋哥上五首・恋哥下五首・雑哥上一首・雑哥下二首の二十四首となっている。

前記伝経元本・東洋文庫本に較べると、本書は、この点では東洋文庫本の欠員歌と比較的近似する。

東洋文庫本の処と同様に (前述二八頁) 伝経元本と比較すると、* 印を附した、(72)・(122)・(167)・(240)・(252)・(256)・(277)・(289)・(313) の冬歌までの九首に恋歌(443)・(476) の二首が欠員歌となっている。東洋文庫本の場合と同傾向に、四季歌に於ける被除が略々異同を共通し、更に恋歌二首が被除されたものとみてよい。たゞし本書では伝経元本には欠員歌であつた、恋歌(458) 皇后宮権大夫師時歌・(517) 藤原永実歌・(549) 源行宗歌・(550) 源俊頼歌、雑部(572) 平康貞母歌・(621) 皇后宮美濃歌、連歌(704)・(706) 等が収録されている。東洋文庫本とは前例の場合―東洋文庫本はこの面では、ほゞ同様な結果を示していたのに反し―と正反対な傾向を見せていることは注目される。それは本書が伝経元本・東洋文庫本系の原形を受けての、恐らくは切継を示唆する異同ではないかと考えられるからである。勿論、本書は二度本不載歌も前述の如く前二書と殆んど相違する伝本でもあり、この三本を同一に処理する危惧は云うまでもな

いが、前二書に続く撰述形態を仮定する理由もあれば、右の示唆するものゝ意義は留意され、更に所謂二度本切継過程を辿る上にも当然充分に考慮されねばならないものであろう。この本書の欠員歌の傾向は、次稿二度本に於て類別する第三系類にもつとも近いが、猶各々異同を残す。

猶、こゝで東洋文庫本とのこの欠員歌の相違を誌るしておく、(40)左京大夫経忠歌(洋欠・本書アリ)・(93)盛経母歌(洋欠・本書アリ)・(113)摂政左大臣歌(洋欠・本書アリ)・(172)三宮歌(洋欠・本書アリ)・(240)藤原行家歌(洋アリ・本書欠)・(252)藤原伊家歌(洋アリ・本書欠)・(256)藤原行家歌(洋アリ・本書欠)・(277)源定信歌(洋アリ・本書欠)・(289)神祇伯頭仲歌(洋アリ・本書欠)・(313)源雅光歌(洋アリ・本書欠)・(443)源雅光歌(洋アリ・本書欠)・(458)皇后宮権大夫師時歌(洋欠・本書アリ)・(476)藤原忠隆歌(洋アリ・本書欠)・(517)藤原永実歌(洋欠・本書アリ)・(549)源行宗歌(洋欠・本書アリ)・(550)源俊頼歌(洋欠・本書アリ)・(572)平康貞母歌(洋欠・本書アリ)・(621)皇后宮美濃歌(洋欠・本書アリ)・(704)連歌(洋欠・本書アリ)・(706)同(洋欠・本書アリ)、等二十首に近い相違が散見されるのである。この点からも二度本不載歌に於ける顕著な相違と共に、前記二書とは緒言した如く明らかに俊別される系統本であることが識られる。次に本書の歌順を誌るすと(前に倣い二度本不載歌に依る変更はこれを除く)

(一) (40)左京大夫経忠歌・(51)内大臣歌・(41)侍賢門院中納言歌、(二) (48)修理大夫頭季歌・(54)大中臣公長朝臣歌・(49)皇后宮摂津歌、*(三) (58)大藏卿匡房歌・(60)源雅兼朝臣歌・(59)太宰大貳長実歌、(四) (118)詞書作者(藤原顕輔)・(119)歌「ほとゝきす心も空にあくかれて云々」・(119)詞書作者(藤原孝善)・(118)歌「時鳥あかて過ぬる声により云々」、*(五) (247)摂政左大臣歌・(251)春宮大夫公実歌・(248)源忠季歌、*(六) (318)前斎宮内侍歌・(317)前斎院六条歌・(319)修理大夫頭季歌、*(七) (487)橘俊宗女歌・(458)皇后宮大夫師時歌・(489)読人しらす歌、(八) (524)読人しらす歌・(528)同上。

(525)同上、*^(九)(534)読人しらす歌・(533)同上・(536)同上・(535)同上・(537)同上、*^(一〇)(570)藤原正季歌・藤原よしすけ歌・(572)平やすさたか母歌・(571)僧正行尊歌、^(一)(586)小式部内侍歌・(590)平康貞歌・(591)皇后宮式部歌・(587)修理大夫顯季歌、*^(二)(618)藤原実光朝臣歌・(649)源俊頼朝臣歌・(619)藤原家経朝臣歌、*^(三)(664)橘元任歌・(669)源行宗歌・(689)田口重如歌・(690)同人歌・(665)能因法師歌、^(四)(681)権僧正永縁歌・(680)同人歌・覚雅法師歌・(682)懷尋法師歌、^(五)(685)隆成法師歌・(687)珍海法師歌・行真法師歌・(686)源俊頼朝臣歌

とあり、本書の持つこの歌順形態を全般にわたって示す伝存本は、初奏本・続群書類従初度本系・前記三本・二度本・三奏本すべてにわたって現在の処管見するにいたらぬ。特に*印を示した^(二)・^(五)・^(六)・^(七)・^(九)・^(一〇)・^(三)・^(四)は、その一二を僅か伝存本に数本散見するか、或は全く本書特有の形態である。現存資料からは如何なる理由・経路によつて改変するに至つたか推定すべきもないと共に、たゞ一伝本にすぎず、また、それが単に一伝存本の錯簡とか転写過程に於ける誤写・改補等によつて起因した異常の結果というには、伝存諸本間に何等かの相互関係が見出されねばならぬであろう。が、ともかくにも説明づけるのは索強な想像をも越えることゝなるう。

別記一括し註記したので参照されたい。^{註七}(一)・^(二)・^(四)・^(六)・^(一)の歌順はすでに先行本である、続群書類従初度本系或は伝

経元本・東洋文庫本等に同形の歌順又はそれに準ずる歌順が見出されるので、贅言するまでもない。^(四)・^(五)の歌順はやゝこれと異なる。即ち^(四)の歌順は前記先行諸本には見えぬが、次の二度本に於ては第二系類(次稿)以降諸本に⁽⁶⁸¹⁾・⁽⁶⁸⁰⁾・⁽⁶⁸²⁾の形が現れるので、恐らくは、この歌順に本書初収の覚雅法師歌が挿入された形であり、本書の祖本に於て案出された新形態と想定されるのである。^(五)の歌順は続群書類従初度本系・伝経元本・東洋文庫本等の先行本にすでに、⁽⁶⁸⁵⁾・⁽⁶⁸⁷⁾・⁽⁶⁸⁶⁾の歌順が見出せるので、これも、その間に行真法師歌が撰出挿入された形態と一応は推定し

てよいであろう。

扱、*印を附した本書特有の歌順であるが、まず(三)の歌順は僅か二度本に、二本を、即ち尊経閣文庫蔵建武五年奥書伝為遠本・正宗文庫蔵〔南北朝〕写伝二条為忠本を管見するにすぎない。而し共に鎌倉期南北朝期の古鈔本であるところから、この歌順は遠因するものがあるのかもしれない。

(六)の歌順は現存伝本の中には見出されていない。たゞ書陵部蔵〔南北朝〕写(函架番号503—227)一本に(317)前斎院六条歌・(318)詞書作者(前斎院内侍)(319)歌・(319)詞書作者(修理大夫頭季)(318)歌の錯誤歌順の如き伝本、正宗文庫蔵天文十六年釈雲岑筆写本に、(319)修理大夫頭季歌・(321)藤原成通歌・(320)内大臣歌の如く、(317)・(321)の間に順次の異同をわずかに散点するので、或はこの間に浮動する有因が想像されないこともない。(五)・(七)・(八)の歌順も全く他本に見出されない。

(九)の歌順も同様である。先行本の続群書類従初度本系には(533)・(534)・(536)・(535)・(537)の歌順である。―但し天文四年公夏筆写本のみ(533)・(534)・(536)・(537)・(535)の順序となつている。―前記三本も、続く二度本も版本系を除くと続類従初度本系を踏襲しており、間々(533)の次に「いとせめて恋しき時は云々」の歌が挿入された形態をみるにすぎない。たゞ僅か数本、即ち天理図書館蔵〔室町中期〕写本に(533)・(534)・(536)・(537)・(538)・(535)、京都大学図書館一本(函架番号23—キ8)に(533)・(534)・(536)・(535)・(538)・(537)、河野信一記念文化館蔵〔江戸前期〕写本(c)に(533)・(536)・(534)・(535)・(537)の歌順など散見される程度である。が、更に一本、本集では古鈔本に属する吉田幸一氏蔵〔南北朝〕写伝兼好法師筆写本にも(533)・(534)・(536)・(535)・(537)・(532)・(538)の前掲書同様の異形の歌順が見出されるのを見ると、この歌順変動はかなり時代を遡り得るものであると同時に、(533)・(538)の間は撰述期に於ても揺れ動く浮動性が推定されるのである。本書も、その動揺の事情を語る一面かとも想像されるが、本書の歌順は現在

の処、本書のみにて如何とも云難い。

(三)の歌順も又同様である。而も(三)の場合、(618)・(619)は卷九雑部上であるにもかゝらず(649)の歌は卷十雑部下の卷に本来置かれていたのであるからして猶更に疑点を残す。而も(649)の歌が撰者自身の歌である点、殊更に乱入したものとも考えられず、然るべき理由が存したものであると思われる。想像されるのは(七)・(九)・(三)の場合共に恋部・雑部であるが故に、四季歌ほどの歌順の重要性は稀薄であつたであらうし、そこに、かゝる異形態をも誘因する結果となつたのではなからうかといふにとどめておく。

(三)の歌順は之も本書のみである。たゞし、続群書類従初度本系では園林本・岡田本をのぞき、(664)・(669)・(665)の歌順である。又伝経元本・東洋文庫本も同様である。先行諸本がかくあり、且つ二度本過半(他本は園林・岡田本同様国歌大観番号順である)が同様であるのは撰述移行の過程として、最も妥当性があるわけであるが、本書のみ、その間に更に(689)・(690)の二首が挿入されているのは、やはり自然の移行とはいへがたく思われる。これも単に類推にすぎぬが、(664)橘元任の歌は兼房朝臣の重服のとぶらひに代りて返しを詠める歌であり、次の(669)源行宗歌は詞書に「例ならぬことありて……心ぼそさによめる」とあるように不例の時期の歌である。続く(690)・(691)は田口重如、死に臨みての歌二首であるので、重服・不例・末期と一種の類群をなすものとして集載される可能性は存するのである。従つて撰者の意図でないとも断言しがたい点もあるが、本書のみの歌順形態であり、前者同様想像の域を出るものではない。

いずれにせよ、本書の歌順形態は、先行諸本形態にも、以後の二度本・奏覧本にも類例をみない本書特有のものであり、特に(三)・(六)・(九)・(三)・(三)は右の如き想像は許されても、同一に共有する一本も伝存するのを見ない―但し管見の範囲内であるが―のは殊に留意されねばならない。単一に伝写・伝流の間に偶発しきたつた結果と断ずることは資

料上の確たる立証の経ない限り云得ることではなからう。その意味では、本書は猶幾多の問題を残すが、さきに掲出した所謂二度本未収録歌十二首、また、この歌順形態の表面的な二つの考察からも、本書は伝経元本・東洋文庫本とも別し、且つそれに続くものかとも想像される草案本過程の一端を暗示していて、本集撰述の過程を辿る上に於て、本書のもつ意義は重視されねばならないことは贅言するまでもない。惜しむらくは本書は江戸期の筆写本にすぎず、且つ又、その祖本を探る手がかりをとどめていないことである。

附記

猶本書には(149)三宮歌「五月雨に入江の橋のうきぬれはおろす筏の心ちこそすれ」の次に、「源俊頼朝臣」とのみあり、恐らく続類従初度本系にみる「五月雨は軒のしつくのつくく」とふりつむ物は日数なりけり」(本文公夏筆本)の欠落が推定される。筆写時の書落しとも前後の様子から見えぬので依拠本のまゝかと思われる。

又先行諸本などとも比較するに相互に本文異同はかなり散見されるのは当然の事であるが、例えば、(377)藤原顕輔朝臣を修理大夫顕季、(402)藤原顕輔朝臣を藤原顕頼朝臣、(475)大納言経信を中納言経実、(559)右近将曹(或ハ右近府生)秦兼方を右近長兼方、(693)公資朝臣を公賢朝臣等々と明らかに誤るなど、猶、詞書・歌等にも誤写・誤謬が存し、必ずしも善本とは云難い。

瑣事ながら、同筆の見せ消ち、イ本校合が、まゝ散見される。(317)第二句「霜のうはけを」^{きイ}、(537)第三句「板しと」^{ひさし}、(584)第五句「鐘の音哉」^{声イ}、(693)第三句「さかりなれ」^{きにけイ}、(700)第五句「おしと思ふに」^{ひてイ}等々である。前記脱落歌など思合わすと筆写時のそれではなく依拠本からの転写かと思われる。

(二)

既述四本は如上の縷述にみたごとく各諸本間には相互に異同を示し、前稿の所謂続群書類従初度本系に看取される一系類として類別することは出来難いが、猶、伝甘露寺経元本・東洋文庫本・吉田文庫本（比較歌を勿論含む）は、特に前二本は共通類似する諸点が存し、略々一系類をなしている。河野信一記念文庫本に於てはその点前両本と儼然と甄別されるが、所謂二度本とは撰述過程を異にする形態を呈示している。その意味では既述四本は所謂二度本系と同一に処理することは出来ず、二度本系以前の草稿期に於ける変遷経過を残存せしめているものと推定され、前稿所謂続群書類従初度本系に続く現存伝本類として、その撰述過程を想定させる諸要因を有している。

従つて、その諸要因を先行系類―続群書類従初度系及び本伝本類に次ぐ二度本系との比較対照によつて、その推移と改削の様相を次に考察することにする。まず最初にこの伝本類の所謂二度本と峻別される二度本未収録歌六十一首に就いて比較対比し、四本相互に於ける異同から、その移行過程を類推することにし、併せて先行本、初度本・続類従初度本系をも一覽掲出対比して系類關係を提示し、四本相互の関連を探索する参考とする。次に本伝本類の切継と、先行二系統本からの切継を具体的に明示し、切継にみる撰述経過を辿ることにする。第三には、歌順形態に就き述べるべきであるが、前述の如く、吉田文庫本は本来所謂二度本系であり、河野記念文庫本は類例をみない形態を示すので、各本の箇処に既述した。たゞし伝経元本・東洋文庫本は、伝経元本解題の場を借り、先行本・二度本との相関々係をすでに考察したので、此処では総括しない。従つて、次には本伝本類に於いて散見するところの、版本系所収歌中の未載歌―猶二十七・八首に及ぶ―と先行撰述本系との比較関連を考察の対称とし、併せて二度本系類への移行過程を推論

してゆくことにする。

さて、所謂二度本未収録歌を次に掲出したが、猶六十一首に及ぶ歌員を前記四本に散見するのである。次掲の如く各本間相互にその歌員の異同は存するが、その過半は先行撰述本系と想定される前稿に於て述べた続群書類従初度本系から受け継いだところのものである。その上、且つそれら歌員は奏覧本に至つても、すべて被除されている一面だけを考へても、続群書類従初度本系に続く草案本の一過程を示唆すると云えるのではなからうか。現存伝本をわずかにとゞめるにすぎない現在、撰述の一過程の原形態と、それを設定するのでないのは勿論であるが、撰述過程に激動する切継ぎの猶続く本集の経過を前提とすれば、この六十一首に及ぶ数多の歌員の意味するものは、単なる諸本伝流の過程に於ける変化とは云難い。而も先述もし、次にも相互の異同を提示するが、河野記念文庫本はともかくも、各本間に共有する歌員の関係が見出されるのであるからしても、撰述草案期に於ける一過程の類群として処理するのが、自然にして妥当性ある方法かと思惟するのである。

まず掲出し比較対照するにあたつては、

(一)、二度本未収録歌の最も多い伝経元本を本文とし、他三本を以つて傍註校異した。三本相互の存欠は掲出歌の許に註記することにした。と同時に未収録歌の歌順は当然の事ながら、本集形態上の問題を含むので()圏内に国歌大観番号を記し、例えば「(29)ノ次」の如く上記同様に註記してその位置を示した。

(二)、伝経元本に載録されていない歌は、東洋文庫本・吉田本・河野記念文庫本の順次に従い、本文をあげ比較し同様に註記した。

(三)、続群書類従初度本系との相互関係を一覧するため上欄に併列掲出した。本文は橋本公夏筆写本(無奥書本)によ

つた。その理由は前稿を参照されたい。公夏本の歌順番号は「」圈内に誌した。猶わずかではあるが、公夏本に欠く本文は続群書類従初度本系一本によつて掲出したものもある。又、参考までに初度本を、これに校異傍記しておいた。歌頭に附した番号は後述の便宜上、私に施したものにすぎない。

(四) 吉田本は本来、所謂二度本であるので掲出歌は殆んど欄外余白に書込まれた校異歌であるのは前に述べた通りである。が既述した如く卷末(711)俊頼歌以後―即ち附箋箇処以降―なお「一本歌」「二度本歌」「他本有哥」等を書し、二度本未収録歌を見出すので、末尾にこれをあげた。前掲歌と重複するものもあるが、附箋紙以降は、前記欄外歌と別して扱うべきと考え附載し、歌頭にへへ印に番号を誌し、前者と区別することにした。

(五) 伝経元本・東洋文庫本・吉田文庫本・河野信一記念文庫本は、それぐ経・洋・吉・河と略記した場合が多い。同様に初度本は初とし、続類従初度本系は註記するに必要を生じた場合にかぎり伝本名を記すことにした。

卷一 春部

卷一 春部

命(初)師(初)
静念法し

静念法師

山ひこのこたへさりせはよふことりむなしき音をや

1 山ひこのこたへさりせはよふことりむなしきねをや

鳴(初)て過(初)まし 公夏本(38)、続類従初度本系諸本アリ(以

なきて過まし 吉本(27)ノ次ニ細記、経・洋・河本ナシ

下歌員異同ナキ限リ(「」圈内ニ番号ヲ記シ、他ハ省略ス)・初42

雅家卿家歌合に帰雁をよめる

三字ナシ(初)

意尊法し

玉札をかけしおりにやかりかねに春帰ること契りそ
めけん [41]・初46

帰鴈をよめる

源忠季

中／＼にちるをみしと思ふらん花のさかりにかへ
るかりかね [42]・初47

雪のふる日帰鴈をきゝてよめる 慶経法し

ゆきかゝる雲ちは春もさえければかすみの衣きてか

へる鴈 [43]・初50

鞍馬寺大門の花さかりなりとて下てよめる

永慶法し

山さくら峯はかすみのこめつれはふもとの花をおり
てこそみれ [65]・初74

まさゝたの卿の家の哥合に帰鴈を 意尊法師

2 玉章をかけし折にや鴈金は春かへりこと契りをきけ
ん 経本(29)ノ次 洋・吉・河本ナシ

源忠季

3 中／＼にちるをみしと思ふらん花のさかりにかへ
るかりかね 経本前歌ノ次 洋・吉・河本ナシ

雪のふるに帰鴈をきゝて

4 ゆきかゝるこしちは春も寒ければ霞の衣きて帰る也
経本前哥ノ次 洋・吉・河本ナシ

鞍馬寺大門・花さかりなりときゝてわたりてよめ

永慶法師

5 山さくら嶺は霞のこめつれはふもとの花を折てこそ
みれ 経本(48)ノ次 吉本(48)ノ欄外余白ニ書入(以下「欄
外云々」省略)・洋・河本ナシ

水上落花と云る事を讀る(初)

醍醐にまかりたりけるに清滝に花のちりかゝりた

りけるか岸には雪のやうにつもりて水にはつもら

さりけるをみてよめる

瞻西上人

ちる花のなかるゝ水につもらぬもそれさへ雪のこゝ

ちこそすれ [70]・初78

覺樹法し 師(初)

岑にちるさくらは谷の埋木に又さく花となりけ

るかな [81]・初92

春駒の心をよめる 二字ナシ(初)

藤原盛経

とりつなく人もなきのゝ春駒はかすみにのみやたな

ひかる覧 [96]・初109

卷二 夏部

詞書ナシ(初)

鳥羽殿歌合に卯花をよめる

藤原季通 朝臣(初)

みる人のたちしとまれは卯花のさけるかきねやしら

清滝川(吉)

醍醐にまかりたりけるにきよたき河に花のちりか

ゝりけるか岸には雪のやうにてつもりて水にはつ

もらさりけるをみて

瞻西上人

散花のなかるゝ水につもらぬはそれさへ雪の心ちこ

そすれ 経本53ノ次 吉本アリ・洋・河本ナシ

覺樹法 師(吉)

嶺にちる桜は谷の埋木に又さく花となりけるかな

経本63ノ次 吉本アリ・洋・河本ナシ

春駒を

藤原盛経

とりつなく人もなき野の春駒は霞にのみやたなひか

るらん 経本75ノ次 吉本アリ・洋・河本ナシ

卷二 夏部

鳥羽殿歌合に卯花

藤原季通

9 見し人の立しとまれは卯花のさけるかきねや白河の

川(河初)の関(せき)〔132〕・初155

雲外郭公といへるころを
藤原顯業(初)

空になる心のきかはほととぎす雲のよそには思はさ
らまし〔147〕・初171

藤原忠季(兼初)

ともしすと山はしづくにそほちつゝおのへに夜をも

あかしつる哉(かな初)公夏筆両本ナシ・宣秀本・続類従本・岡

田本・園林本二見ユ・初216

六月(はらへをよめる初)袂の心を

源有政

御(みそき初)袂する河せにたてるいくゐさへすかぬきかけてみ

ゆるけふ哉(かな初)〔199〕・初230

六月(詞書ナシ初)袂のころを

藤原季通(朝臣初)

けふくれはあさのたち枝にゆふかけて夏(なつ初)みな月(つき初)のみ

そきをそする〔201〕・初232

せき 吉本(108)ノ上欄余白書入・経・河本・洋ナシ

雲外郭公の心を 藤原顯成

10 空になる心のきかは時鳥雲の外には思はさらまし
経本(122)ノ次 洋・吉・河本ナシ

藤原忠兼

11 ともしすと山の雫(しづく吉)にそほちつゝ尾上(おのへ吉)に夜をもあかし

つる哉 経本(156)ノ次 吉本アリ・洋・河本ナシ

六月(心吉)袂のころを

源有政(ナシ吉)

12 御(ナシ吉)袂する河せにたてるゐくひさへすかぬきかけてみ
見(吉)

ゆるけふ哉 経本(163)ノ次 吉本アリ・洋・河本ナシ

みな月(ナシ吉)のはらへのころを

藤原季通(道吉)

13 けふくれは麻(あさ吉)の立枝にゆふかけて夏(みそき吉)みな月(つき初)の御袂

をそする 経本(164)ノ次 吉本同ジク(164)ノ次本行ニア

リ、「イ」本ト註記スル・洋・河本ナシ

卷三 秋部

七夕のころをよめる(初)
・・・・・

宗延法師(師(初))

あまの(初)きみ(初)
天川君わたりなはかさゝきの橋うちみたるなみも
たゝなん [208]・初 236

詞書ナシ(初)
摂政左大臣家にて七夕の心をよめる 藤原時正(昌(初))

ほし(初)う(初) なみ(初)ふな(初)ころ(初)
ひこ星のたきつの波に舟出する心のうちをおもひ
こそやれ [209]・初 238

勝超法師(初)
・・・・・

こひわたるなみたのふちとなりはてゝあふせまれなるあまのかはかな(初)
・・・・・
・・・・・ 続初欠・初 241

藤原朝隆

あふさか(初)せき(初)
ひくこまのかけをならへて相坂の関ちを月もこゆる
なり(初)
成けり [237]・初 269

卷三 秋部

宗延法師

14 天河君わたりなはかさゝきの橋うちみたる浪もたゝ
なん 経本(169)ノ次 洋・吉・河本ナシ

摂政左大臣家にて七夕のころを 藤原時昌

15 彦星のうきつの浦に船出する心のうちをおもひこそ
やれ 経本前歌ノ次 洋・吉・河本ナシ

勝超法師

16 恋わたる涙は袖に朽はてゝあふせまれなる天の河
かな(洋・吉)イ(吉) 川(吉)
なみ 経本(171)ノ次 洋本アリ・吉本(171)ノ次本行ニヤ
、細字ニテアリ、「イ」本ト註記スル・河本ナシ

藤原朝隆

17 ひく(洋) あふ(洋・吉)
引駒のかけをならへて逢坂の関路の月もこゆる成け
り 経本(195)ノ次 洋本アリ・吉本(195)ノ次、本行ニヤ、
細字ニテアリ、「イ」本ト註記スル・河本ナシ

対(初) 依月厭雲といふ事をよめる(初)

源明実朝臣

さやかなる月をかくせる雲なれは心なき名もたつにやある覧(らん)(初) [241]・初273

八月十五夜の月を(のころをよめる)(初)

藤原為忠

いつとなくおなし空行月なれとこよひははれよとおも(初) [242]・初274

初度本・続類従本系ナシ

初度本・続類従本系ナシ

摂政左大臣家にて山月といへる事をよめる

藤原親隆

みわの山杉まもりくる影みれは月こそ秋のしるしなりけれ [257]・初ナシ

対月厭雲といふ事(こと)(洋)

源明賢朝臣

18 さやかなる月をかくせる雲なれは心なき名を立にや有らん 経本(198)ノ次 洋本アリ・吉・河本ナシ

八月十五夜明月の心を

藤原為忠

19 いつとなくおなし空ゆく月なれと今夜をはれとおも(洋) 思ふ成けり 経本前歌ノ次 洋本アリ・吉・河本ナシ

九月十三夜のころを(心)(洋)

覚誉法師

20 天河名になかれたる月なれは波のよるさへかすそみえける 経本(205)ノ次 洋本アリ・吉・河本ナシ

思ふこと侍る比月をみて

俊頼

21 いとしく心尽の秋しもあれ世を恨ても月をみるかな

河本210ノ次 経・洋・吉本ナシ

摂政左大臣家にて山月を

藤原親隆

22 三輪の山杉まよりもる影みれは月こそ秋のしるし成けれ 経本(211)ノ次 洋本アリ・吉・河本ナシ

漢明無雲といへる事を

瞻西上人

あまのかはくも(初)はし(初)
天川雲のかけ橋かきたえて谷より月のすみわたるら
む(初)
〔258〕・初291

皇后宮にて江上月といふことをよめる
人々哥つかうまつりけるに江上月といふ心を詠侍ける(初)
藤原重基

秋の夜はふけ行空に雲はれて入江におつる山のはの
月〔261〕・初293

月浮山水といへることをよめる(初)
藤原忠兼(初)

あきやま(初)
秋山のし水はくましにこりなはやとれる月のくもり
もそする〔262〕・初295

摂政左大臣家にて野径月といふ事をよめる
源定信

ひるとのみいはれの野(初)の月影は露はかりこそよる
とみえけれ〔265〕・初294

山階寺の涅槃会に参ての夜(初)の右、如本ト傍記初)
勝喜法師

漢晴無雲といふことを

瞻西上人

23 天河雲の梯(掛橋)かけたえて谷より月のすみのほるかな
経本前歌ノ次 洋本アリ・吉・河本ナシ

皇后宮にて江上月といふことをよめる

藤原重基

24 秋の夜は更行まゝに雲晴て入江にうつる月のかけか
な 経本(213)ノ次 洋本アリ・吉・河本ナシ

月浮山といふ事をよめる(初)

藤原忠兼

25 秋の夜の清水はくまし濁なはやとれる月のくもりも
そする 経本前歌ノ次 洋本アリ・吉・河本ナシ

摂政左大臣家にて野径月といふ事をよめる(初)
源定信

26 ひるとのみいはれの野(初)の月影は露はかりこそよる
とみえしか 経本前歌ノ次 洋本アリ・吉・河本ナシ

山階寺の涅槃会にまいりてその夜勝超法師にあひ

にナシ(初)あひてよめる(初)
・に・会・て・夜・も・す・か・ら・月・を・み・て

林(初) 師(初)
淋賢法し

なからへは思出にせんおもひいてよ君とみかさの
やま(初) 山のはの月 [267]・初297

摂政左大臣家にて山月といへることをよめる
よめる(初)

藤原時昌

神のすむ三笠の山の月なれはかりそめにる雲たに
もなし [271]・初303

初度本・続類従本系ナシ

重孝(初)
藤原季孝

秋ことにこゑもかはらすなくしかはおなし妻をや
恋わたる覧 [289]・初324

て夜もすから月をみてよめる
よ(洋) 見(洋)

杖賢法師

27 なからへは思出にせん思ひ出よ君とみかさの山のは
の月 経本214ノ次 洋本アリ・吉・河本ナシ

摂政左大臣家にて山月を

藤原時昌

28 神のすむみかさの山の月なれはかりそめにきる雲た
にもなし 経本(218)ノ次 洋本アリ・吉・河本ナシ

月照野花といふことを
事(吉)

隆覚法師

29 いはれのく千くさの花にみたれたる露もくもらぬ秋
のよの月 経本(222)ノ次 洋・吉本アリ・河本ナシ

藤原重孝

30 秋ことに声もかはらす鳴鹿はおなし妻をそ恋
わたるらむ 経本(235)ノ次 洋・吉本アリ・河本ナシ

田家鹿をよめる

藤原宗国

山田もるしつ（初）のいほりのあたりにはしかより外（初）にく
る人もなし〔292〕・初326

初度本・続類従本系ナシ

田家鹿を

藤原宗国

山田もるしつ（初）の庵（吉）のあたなれは鹿より外（初）にくる人も
なし 経本（236）ノ次 洋・吉本アリ・河本ナシ

源俊頼

河霧をよめる

紀宗兼

よと川（初）のをち方みえぬ秋霧（初）にともろならして舟（初）くた
るなり〔310〕・初350

河霧を（洋）・霧を（吉）

紀宗兼

淀川（初）のをちかたみえぬ河霧（初）にともろならして船（吉）く
たすなり 経本（254）ノ次 洋・吉本アリ・河本ナシ

武蔵国にまかりて二むら山（初）の紅葉（初）をみてよめる

橘能元

武蔵（洋）
みかはにまかりて二村山（初）の紅葉（初）を見て

橘能元

いくらとも見えぬみちの錦（初）かなたれ二むらの山と
いふ覧（初）〔318〕・初361

九月辰をよめる（初）

源淳国

おしめとも野（初）への草木の枯ぬれは露（初）たに秋はとまら

九月辰の心をよめる（吉）

源顕国朝臣

おしめとも人の草木の枯ぬれは露（初）たに秋はとまら

さきりけり [328]・初 379

卷四 冬部

時雨をよめる(初)

覚雅法師(初)

あき(初) 秋はてゝとふ人もなき山里に時雨のみこそをとほともなへ [340]・初 392

勝菩提院にて人々こほりの哥よみけるによめる(初)

法橋有禪

かは(初) 山川もこほりにけりな岩間よりとろきおつるをとたゆるまで [348]・初 406

初度本・続類従本系ナシ

水鳥をよめる

源家時

あらし吹よはの川なみたかけれはうきねの鷺も夢さ

さきりけり 経本(271)ノ次 洋本アリ、吉本(273)ノ次、本行ニアリ・但シ「イ本此哥ナシ」ト註記ス・河本ナシ

卷四 冬部

時雨をよめる

覚雅法師

36 秋はてゝ問人もなき山里にをとなふ物はしくれなりけり 経本(282)ノ次、洋・吉本アリ・河本ナシ

奈良勝菩提院にて氷の哥よみけるによめる

法橋有禪

37 山川も氷にけりな岩まよりとろき落る音たゆるまで 経本(290)ノ次 洋・吉本アリ・河本ナシ

俊頼

38 さきりせしさのゝ中河つらゝゐてゐくるに波の音絶にけり 河本(292)ノ次、経本・洋本・吉本ナシ

水鳥をよめる

源家時

39 あらし吹(洋)半(洋)吉浪(吉) 嵐ふく夜はの河音たかけれは浮ねの鷺も夢覚

めにけり [354]・初度本ナシ

月前氷といへる事(初)

冬月宿氷といへることをよめる

平実重

谷川にむすふ氷の下にさへこゝろふかくもやとる月
かな [373]・初427

初度本・続類従本系ナシ

神樂のこゝろをよめる(初)

・・・・・

藤原致時

朝倉のこゑこそ空にきこえけれあまの岩戸を今やあ
く覧 [377]・初431

卷七 恋部上

初度本欠部・続類従本系ナシ

ぬらん 吉イ(吉) 経本(295)ノ次 洋本アリ、吉本(295)ノ次本行余
白ニ「イ」ト細記ス・河本ナシ

冬月宿氷心を

平実宣

40 谷川のむすふ氷の下にさへ心ふかくもやとる月かな
経本(312)ノ次 洋本アリ・吉・河本ナシ

西山にすみ侍ける比雪のあした人のかりいひつか
はしける 住(洋)

慶経法師

41 思やれ嵐の山のふもとにて雪ふりつもる柴のいほ
りを 経本(313)ノ次 洋本アリ・吉・河本ナシ

神樂のこゝろを 心(洋)

藤原致時

42 朝くらやこゑこそ空に聞ゆなれ天の岩戸を今やあ
くらん 倉の(洋) きこ(洋) あま(洋) いはと(洋)
経本前歌ノ次 洋本アリ・吉・河本ナシ

卷七 恋部上

恋の心をよめる

行尋法師

43 恋わひてかへす衣はうみなれやうらになみたのかゝ
イ本ナシ

卷八 恋部下

初度本欠部・続類従本系ナシ

初度本欠部・続類従本系ナシ

初度本欠部・続類従本系ナシ

初度本欠部・続類従本系ナシ

るとおもへは 吉本(443)(巻七卷末歌)ノ次、本行ニアリ、
経・洋・河本共ニナシ

卷八 恋部下

はしめて女のかりつかはしける

藤原有業朝臣

44 いはてのみ心のやみにまとふにはたえぬ思ひぞしる
なり(吉) おも(洋)火(吉)

へ成ける 経本(463)ノ次 洋・吉本アリ・河本ナシ

はしめたる恋を

源明賢朝臣

45 歎きあまりしらせ初つることのはも思斗はいはれさ
ナシ(洋) そめ(洋) 葉(洋) ふはかり(洋)

りけり 経本(466)ノ次 洋本アリ・吉・河本ナシ

藤原宗国

46 けふこそはいはれのゝへのしの薄しのひもあへすほ
野(洋) すゝき忍(洋)

のめかしけれ 経本前歌ノ次 洋本アリ・吉・河本ナシ
つ(洋)

恋の哥とてよめる 三字ナシ(河) 清原祐隆 すけたか(河)

47 あふ事はかたのゝ 浜による船のみるめなきさ
逢(河)こと(洋)吉(河)ゝの(吉)河(はま)洋(吉)舟(吉)河(見)吉(渚)河(河)

摂政左大臣家にて恋歌よみけるに

藤原親隆朝臣

しほたるゝ伊せおのあまの袖たにもほすなるひまは
ありとこそきけ 〔528〕・初度本欠部・宣秀本・続類従

本・岡田本・園林本ナシ

初度本欠部・続類従本系ナシ

にこふるとをしれ ^{か(河)} 経本(469)ノ次 洋・吉・河本アリ

摂政左大臣家にて恋の哥よみ侍けるに ^{ナシ(洋・河)ナシ(河)}

藤原親隆朝臣 ^{二字ナシ(河)}

48 しほたるゝ伊勢 ^{いせを(洋)男(河)蟹(洋)・海士(河)} おのあまの袖たにもほすなる
隙はありとこそきけ ^{ひま(洋)} 経本(470)ノ次 洋・河本アリ、但

シ(471)ノ次・吉本ナシ

冬夜寄衣恋の心を ^{ナシ(洋)}

光雅法師

49 から衣君かきまさぬ冬の夜 ^{よ(洋)} にかさぬる物 ^{なり(洋)} はうらみ成
けり ^{る(吉)} 経本(478)ノ次 洋・吉本アリ・河本ナシ

初度本欠部・続類従本系ナシ

〔題しらす〕

〔よみ人しらす〕

50 いとせめて恋しき時ははりまなるしかまにそむるか
ちよりそくる 経本(533)ノ次 洋・吉本アリ・河本ナシ

卷九 雑部上

初度本欠部・続類従本系ナシ

卷九 雑部上

しほゆあみになるをのかたへまかりけるかつねに
音つれんなと申てをとつれさりければつかはしけ

卷九 雑部下

初度本欠部・続類従本系ナシ

初度本欠部・続類従本系ナシ

初度本欠部・続類従本系ナシ

る

藤原よしすけ

51 いかなれはなるをのみなときゝしかと便りの風に音
つれもせぬ 河本(570)ノ次 経・吉・洋本ナシ

卷九 雑部下

提婆品(河)

覺樹法師 正雅(河)イ

52 ちとせまてむすひし水のたまりゐてわかみの
ためとおもひやはせし 吉本(本行)(678)ノ次、河本(680)
ノ次ニアリ、経・洋本ナシ

実範のおほくの仏にあひたてまつらさりけること
なといひつゝけ哥よみけるによめる

宋延法師

53 百千度鶴の林にかくれける月をもよそに思ひける哉
河本(683)ノ次 経・洋・吉本ナシ

此身かゝみのことしといふことを 信泉法師

54 はかなしと思ふ心をますかゝみかけに此世をたとへ
てそみる 河本(684)ノ次 経・洋・吉本ナシ

初度本欠部・続類従本系ナシ

光いむ法師身まかりての法事諷誦に書付侍ける

行真法師

55 うたかたの消にし玉はけふやさははすのうき葉にう
きてゐるらん 河本(687)ノ次 経・洋・吉本ナシ

連 歌

初度本欠部・続類従本系ナシ

摂政左大臣家にて人く連哥せさせてあそひける
に暁になりてかねの声ほのかにしければ

源俊頼

56 こゝのつのその声とをく聞ゆなり

藤原しけとも

わかむつのをのつみやき^{マ、}るらん 河本(707)ノ次 経・
洋・吉本ナシ

初度本欠部・続類従本系ナシ

たるきにとりをさしたるをみて 源俊頼

57 たるきには山のうつはりさしてけり

きやうしん法し

軒には海の月をやとして 河本(709)ノ次 経・洋・吉
本ナシ

初度本欠部・続類従本系ナシ

初度本欠部・続類従本系ナシ

初度本欠部・続類従本系ナシ

天理図書館蔵吉田本には、(711)卷末歌、俊頼の「なゝそちに云々」の次に、所謂二度本に散見しない次の連歌二聯が見出される。即ち

よみ人しらす

△1▽そはもかくれぬふちはかまかな

野ことにしほころひぬれはをみなへし

△2▽ならぬかきなにをたねとて生ぬらん

ねなしかつらのこゝちこそすれ

又、前者に続いて、「他本有哥」として、八首中、同様に二度本不載歌が六首ある。併せて掲出すると

春部

長実卿下あつさゆみ 顕季卿上うくひすの

坂上あきさね

△3▽たちわたる霞の衣なかりせは春きたりともいかてしらまし (11)ノ次、経・洋・河本ナシ

俊頼朝臣下はる雨は 良暹法師上梅のはな

を(初)こころをよめる(初)
おなし心を・・・

藤原為真

同心をよめる

藤原たかさね

うくひすのむめのはな(初)
鶯の梅の花かさちりぬれはふる春雨にそほちてそな
く〔20〕・初19

△4△うくひすの梅の花かき散ぬれはふる春雨にそほちて
そなく (16)ノ次、経・洋・河本ナシ

夏部

顯隆卿下夏はて

初度本・続類従本系ニアリ・前ニ掲出

みな月はらへをよめる

源ありまさ

△5△みそきする川瀬にたてるいくるさへすかぬきあけて
〔み〕ゆるけふかな (164)ノ次、前註記12ニ同シ

同掲出

をなし心をよめる

藤原俊通朝臣

△6△けふくれはあさのたちえにゆふかけて夏みなつきの
はらへをそする 前歌ノ次、前註記13ニ同シ

秋部

隆経朝臣下ひく駒の 仲正上あつまちを

同掲出

藤原知忠

△7△ひく駒のかけをならへてあふさかのせきちをつゝき
こゆる成けり 194ノ次 前註記17ニ同シ

同掲出

俊頼下うつらなく 藤原基光上うち河の

河きりをよめる

紀宗兼女

△8Vよと河のをちかた見えぬ秋霧にともになろならしてし舟くた

・(すト左ニ傍記)る也・(254)ノ次、前註記33ニ同ジ

冬部

基長卿下なよ竹の 光清上なにことに

同掲出

△9V時雨をよめる

覚雅法師

本ノマ、

(282)ノ次、前註記36ニ同ジ

以上が前記四本に於ける所謂二度本未収録歌のすべてである。吉田文庫本は比校本歌がその殆んどであるので猶問題を残すが(吉田本項参照)、計五十七首、それに吉田文庫本巻末附載歌、連歌二首―△1・△2・△3・△4―を加えると六十一首に及ぶ。初度本から前稿所謂続群書類従初度本の修刪に比すれば撰集内容は質的に異なるものがあるが、二度本の立場から見れば、この撰集歌数の変化は前者に次ぐ激変の過程として予測されねばなるまい。そして一応、前者と二度本との間に猶もこれらの歌員を含む伝本の存在と同時に撰集草案本が切継を継続している様相を類推されるのである。それがどのような伝流によつてなつた現存本の形であつたかは類推するよすがをもたぬが、恐らく短い期間に激しく揺れ動いた切継であつて、長い伝写の過程に於ける変貌の姿として、これをとらえることは出来ないと考ええる。

扱、この六十一首の二度本未収録歌は、次の二十四首を除いての過半は続群書類従初度本に載録されているところの歌である。

即ち伝経元本・東洋文庫本・吉田文庫本では、16勝超法師歌・20覚誓法師歌・29隆覚法師歌・41慶経法師歌・43行尋法師歌・44藤原有業歌・45源明賢歌・46藤原宗国歌・47清原祐隆歌・49光雅法師歌・50「よみ人しらす」歌・52覚樹法師歌の十二首は右三本に初見する歌である。それに吉田文庫本巻末附載歌三首―①②③―を加え、計十五首である。河野記念文庫本では、21俊頼歌・32俊頼歌・38俊頼歌・47清原祐隆歌（前者と重複）・51藤原よしすけ歌・52覚樹法師歌（前者と重複）・53宋延法師歌・54信泉法師歌・55行真法師歌・56・57の両連歌の十一首である。前者と併せると重複歌二首があるので、計二十四首が続類従初度本系に比し、新らたに散見したことになる。従つて他の三十余首は続類従初度本系の歌を踏襲しとゞめたことになるわけである。かくみると、これら四本は続類従初度本系の後を受け継ぎ、後述するように猶被除しながらも、更に二十四首を撰入したものと考えられる。

又、撰入歌二十四首は右記によつても判るように、河野記念文庫本が約半数を占め、二度本未収録歌十二首中の一首のみを続類従初度本系から継入しているにすぎないことなど併せ考慮すると、前三本とは自ら截然と異なる別本であることが明らかである。この十一首中、撰者俊頼歌が四首散見するなど前三本の次の草稿を勘案する撰者みずからの難行を物語るものであろうか。

更に此処で留意されるのは前掲二度本未収録歌六十一首に於て、前稿で謂所続類従初度本系と謂所二度本との比較で述べたが、続類従初度本系の被除歌の分布をみると、恋部一首（藤原親隆歌、しはたる伊せおのあまの云々）をのぞき前半部巻五迄がそのすべてであつたのに対し、この四書は猶後半部、巻七恋下より雑部・連歌に至るまでに十五首（但し⁴⁸藤

原親隆歌は重複)の撰入歌が散見されることである。―即ち歌頭番号43から57まで―。と更に吉田文庫本卷末附載の連歌二聯にへ3の坂上あきさね歌一首を加えると十八首の多きにわたるのである。而も河野記念文庫本には連歌二聯が明記され、又吉田文庫本にも同様に二聯を卷末に附載するなど、後者はともあれ、後半部に於けるこの撰出歌は、さきの推論、続類従初度本系の次期草案過程を示唆するものにほかならないであろう。井上通泰氏が「彼所謂初度本(続類従初度本)ノ他本ト異ルハ賀以上即古写本ノ上卷ニ当レル部ノミニテ別離以下ハ全ク第三種本(所謂二度本中の一本)ニ同ジ。恐ラクハ下卷ノ欠ケタリシヲ人アリテ第三種本ニヨリテ続紹セシ」(校訂金葉集緒言)と推論せられたが、この事實は僅かではあるが、その推論を覆す、ひとつの傍証ともなろうし、憶測の危険をまた其処に呈示するものにならうか。仮りに本書等の如きを続紹せしめたと想起するも、本集前半部に於ける続類従初度本系との異同を―後述するが―みれば二書合綴の如き推測は全く無意義なるを認めざるを得ないと同様である。続群書類従初度本系はさておき、いずれにせよ、所謂二度本撰述の寸前の一過程と、これらは類推されるのである。特に河野記念文庫本の如き、二度本未収録歌十二首中、47・48・51・52・53・54・55・56・57と本集後半部に撰入歌過半が蟬集することは、所謂二度本との間を更に一層近づけていると同時に、前三本に続くものであることを語っているのではなからうか。

さて、この新撰出歌の作者をみると俊頼は云うまでもなく、20覚誓法師・52覺樹法師は続類従初度本系(二度本番号(675)・(674))にそれぐ各一首を撰出され二度本にと継入している作者であり、41慶経法師・44藤原有業・45源明賢・46藤原宗国・53宋延法師は初度本(初50・初276・初273・初326・初236)から続類従初度本系に各一首づゝ初度本撰出歌が受継がれている。47清原祐隆は同様に初度本から続類従初度本系に三首―即ち初172・初207・初225―存続していて、これら作者はいずれも右四本の新出作者ではない。新出の作者は、29隆覚法師・54信泉法師・55行真法師・57きやうしん

法師・56藤原しけとも・へ3の坂上あきさねの五名である。(29)隆覚法師は版本系卷末異本歌(714)の歌の作者その人であろう。57は俊頼との唱和連歌で散木奇歌集(一五七八)に見え、きやうしん法師を慈雲房と記している。恐らく房名で同一人であろう。55の行真法師も同一人の仮名・真名の表記の相違と思われる。また、56藤原しけともも同集(一五六七)に見え、河野記念文庫本では上句が俊頼となつてゐるが(註六参照)散木奇歌集では安芸守重基になつてゐる。そして、河野記念文庫本の「しけとも」とはやゝ違ふが、「しけもと」の誤写ではなからうか。勅撰作者部類に「重基五位中務少輔。近江守藤原佐男。至天承元年。詞花秋1 千載恋二1」と記すその人歟。初度本・続類従初度本(初293)に見えてゐる。いづれ前者と共に撰者俊頼を圍繞する人々のなかであろう。そのほか43行尋法師・54信泉法師・へ3の坂上あきさねの両三名が浅学のため明らかにしない。がともかくも新撰出歌の歌人はすでに先行本、或は同時代人であり、他書からの乱入によるものでないことは明らかである。撰歌の迷いや動揺の様相が、こゝにも猶如実に語りかけてくるのを覚える。

次に初度本・続群書類従初度本系・伝経元本以下四本の本文上の対比は前掲の表によつて、この部分に於ける比較は一覧されば誌すまでもないが、明らかに続類従初度本系を踏襲し、わずか詞書・歌等に撰者の修刪が窺われるように思われるが、これについては別稿を考慮している。たゞ特に目につくのは16勝超法師歌は初度本に見え、続類従初度本系には被除されて、再び伝経元本・東洋文庫本・吉田文庫本(欄外細記)に第二句・第三句をやゝ改訂して載録されている。切継過程に於ける例の復活歌と推定されるのである。

附記

48藤原親隆歌「しはたるゝ云々」は続類従初度本系では、園林本・岡田本・宣秀本・続類従本にこれを欠き公夏本のみに載録する。前稿で類推した如く、宣秀本・続類従本↓園林本・岡田本↓公夏両本の過程を推定する一傍証

をも加えるものではなからうか。

次に右の二度本未収録歌諸本相互間の異同を類別すると

(一) 伝経元本・東洋文庫本・吉田文庫本に共通して収録されている歌員

16 勝超法師歌・17 藤原朝隆歌・29 隆覚法師歌・30 藤原重孝歌・31 藤原宗国歌・33 紀宗兼歌・35 源顕国(淳国)歌・
36 覚雅法師歌・37 法橋有禅歌・39 源家時歌・44 藤原有業歌・49 光雅法師歌・50 読人しらす歌
の十三首である。

(二) 伝経元本・東洋文庫本に共通して収録されている歌員は

18 源明賢歌・19 藤原為忠歌・20 覚誉法師歌・22 藤原親隆歌・23 瞻西上人歌・24 藤原重基歌・25 藤原忠兼歌・26 源
定信歌・27 杳〔淋〕賢法師歌・28 藤原時昌歌・34 橘能元歌・40 平実宣歌・41 慶経法師歌・42 藤原致時歌・45 源明
賢歌・46 藤原宗国歌

の十六首である。

(三) 伝経元本・吉田文庫本に共通して収録する歌員は

5 永慶法師歌・6 瞻西上人歌・7 覚樹法師歌・8 藤原盛経歌・11 藤原忠兼歌・12 源有政歌・13 藤原季通(道)歌
の七首である。

(四) 伝経元本のみ収録する歌員は

2 意尊法師歌・3 源忠季歌・4 〔慶経法師〕歌・10 藤原顕成歌・14 宋延法師・15 藤原時昌歌

の六首である。

(五) 吉田文庫本のみ収録する歌員は

1 静念法師歌・9 藤原季通歌・43 行尋法師歌

の三首である。東洋文庫本特有の収録歌は存しない。

(六) 参考までに吉田文庫本巻末附載歌のみに散見する歌員は

へ1へよみ人しらす唱和連歌・へ2へ同上・へ3へ坂上あきさね歌・へ4へ藤原たかさね〔為真敷〕歌

の四首である。そのほか、へ5へ藤原ありまさ歌は前掲12歌に、へ6へ藤原俊通歌は同13歌に、へ7へ藤原知忠歌は同17歌に、へ8へ紀宗兼歌は同33歌に、へ9へ覚雅法師歌は同36歌に、それ〴〵同一である。

(七) 次に河野信一記念文庫本のみ収録する歌は

21 俊頼歌・32 俊頼歌・38 俊頼歌・51 藤原よしすけ歌・53 宋延法師歌・54 信泉法師歌・55 行真法師歌・56 俊頼・藤原しけとも唱和連歌・57 俊頼・きやうしん法師唱和連歌

の九首である。

(八) 河野記念文庫本・伝経元本・東洋文庫本・吉田文庫本四本に共通して収録する歌には、47 清原祐隆歌一首がある。

(九) 同じく河野記念文庫本・伝経元本・東洋文庫本三本に共通するのは、48 藤原親隆歌一首である。

(一〇) 又河野記念文庫本・吉田文庫本の両本のみ共通するのには52 覚樹(雅)法師歌一首がある。

まず、二度本未収録歌六十一首のうち各本の歌数は、伝経元本四十四首、東洋文庫本三十一首、吉田文庫本二十五首に巻末附載歌四首の計二十九首である。河野記念文庫本は十二首にすぎず、本書は前三本とは別類をなすのは前記

した通りである。

さて、右の分類によつても判るように、この三本は(一)・(二)・(三)から相互にかなり近似する関係が見出されるのである。これを歌員数からみると、この六十一首中、伝経元本・東洋文庫本は三十一首を共通しているのに対して、伝経元本・吉田文庫本のそれは二十一首である。前述した如く吉田文庫本はそれ自体所謂二度本であつて比較欄外歌が此の場合主な対称であり而も校異そのものが猶完全を欠く諸点が予測されるので、必ずしも歌数の上からのみ俄かに判断しがたいが、現存の写本自体からは、やはり伝経元本に対し東洋文庫本よりは疎遠な関係を提示しているといわざるを得ない。

伝経元本は右の(一)・(二)・(三)以外に独自の(四)の2・3・4・10・14・15の六首を収録し、それらは皆、初度本・続類従初度本に散見される歌員であるので、自然な推定としてはこの三本の中では続類従初度本につぐ過程の伝存本とみられるのである。

東洋文庫本はこの三十一首以外独自の歌員を数えぬが、吉田文庫本(欄外歌等)は右の二十一首のほか(五)の1・9・43の三首と巻末附載歌四首を収録する点、東洋文庫本と相異なるわけである。また更に、この両本の異同であるが、伝経元本とこの両本共通の歌員が(一)の十三首あるが、伝経元本・東洋文庫本共通歌(二)の十六首に対し、伝経元本・吉田文庫本共通歌は(三)の七首とほぼ半数に近く、前者と共に両本はかなりな相違を示すものと現時点では云うほかはない。

又、この未収録歌六十一首に於て三本間各々にみる新撰出歌を類別すると、伝経元本では、20・29・41・44・45・46・47・49・50の歌九首で東洋文庫本も全く同一であるが、吉田文庫本は29・43・44・47・49・50・52の歌七首と巻末附載歌四首であり、この点に於ても両三本の相違は瀝然とする。そして同時に、東洋文庫本はこの類似に関する限りに於ては伝

経元本に近いと云える。而しながら吉田文庫本（欄外歌等）には既述のような複雑な要因を含み持つので現存本の状態から両本の祖本関係を推定することは出来難い。従つて、如上の如き諸般の相互関連から総合して伝経元本→東洋文庫本・吉田文庫本（欄外歌等）の撰述経過を大方に想定して差支えないものと思われる。吉田文庫本卷末附載歌は当然の事ながら、これらとは別して考察されるべき性質のものであるが、類本を見ない現在如何とも云い難い。

次に河野記念文庫本の二度本未収録歌十二首であるが、伝経元本・東洋文庫本とも二首―(八)・(九)の47・48の歌―、また吉田文庫本（欄外歌）とも一首―(五)の52―を共通するが、ほか九首は本書のみにみる歌であり、且つ十二首すべて新らたな撰入歌であるのは既述した通りである。前三本に続く経過を予想するほかはない。

以上、所謂二度本未収録歌よりみた四本の相互関係であるが、二度本にと至る過程に猶もかゝる歌員の異同は、単なる転写・伝流の間に於ける変遷とは考えられず、右の現存四本の姿が、そのまゝこの期の撰述に於ける原形とは、もとより想定するのではないが、猶その残映をとゞめる伝存本として本集成立経過を示唆するものであろう。

次に続類従初度本系より、この類系に至る切出に就いて概観しておくことにする。然しながら既述した如く、吉田文庫本の場合は本来二度本本文に比較された欄外歌が、殆んどその主体であり、また校異自体に猶疑問諸点を残すので、この対称とするのは一応避けるのが妥当かと考えられる。河野信一記念文庫本は所謂二度本被除歌十二首を収録するにすぎないので、敢えて掲出するまでもないとして、以下、伝経元本・東洋文庫本の両本を対称とする。先行本と推論される続群書類従初度本系諸本の中では、前稿との関係もあり橋本公夏筆写の無奥書本に依拠した。いま、初度本・二度本番号によることにしたが、次表は便宜上公夏本番号を附して後述の便に供した。その場合〔〕印内に

これを記し區別した。猶公夏本不載歌の場合は続類從初度本系別本をあげ註記した。

春部

庭もせに引つらなれるもろ人の立ゐるけふや千世のはつ春〔2〕

源俊頼朝臣

春從東來といへることをよめる

覺雅法師

みちのくの衣の関をけさたちていつのまにかは春のきつらむ 初2

源俊頼朝臣

いつしかとすゑの松山かすみあひて浪とゝもにや春はこゆ覧〔14〕

おなし心を

藤原為真

鶯の梅の花かさちりぬれはふる春雨にそほちてそなく 初19

関路聞鶯といへる心を

藤原顥頼朝臣

相板にけふもとまりぬうくひすのなく一声や春の関もり 初23

梅花散水といへる事をよみ侍ける

源俊頼朝臣

ちる花は水の岩間によとむとも香はなかれてやせゝにとまらん〔25〕

百首歌の中に若菜の心をよめる

源俊頼朝臣

かすかのゝ雪のわかなにつみそへてけふさへ袖のしほれぬるかな〔29〕

忠能卿家歌合に柳の心を

よみ人しらす

谷風の吹あけにたてる玉柳枝のいとまも見えぬ春かな 初38

長実卿家歌合によめる

源季遠

いかなれは氷はとくる春風にむすほるらん青柳のいと 初40

百首歌中に柳をよめる

源俊頼朝臣

もかり舟はつゝしめなはこゝろせよ川そひ柳風になみよる 初39

静念法し

山ひこのこたへさりせはよふことりむなしき音をや鳴て過まし 初42

雅家卿家歌合に帰雁をよめる

意尊法し

玉札をかけしおりにやかにかねに春帰りこと契りそめけん 初46 経存・洋被除

帰鴈をよめる

源忠季

中／＼にちるをみしとや思ふらん花のさかりにかへるかりかね 初47 経存・洋被除

雪のふる日帰鴈をきゝてよめる

慶経法し

ゆきかゝる雲ちは春もさえければかすみの衣きてかへる鴈 初50 経存・洋被除

山寒花遅といへることをよめる

左京大夫経忠

山さくらこすゑの風のさむければ花のさかりになりそわつらふ (40) 経存・洋被除

鞍馬寺大門の花さかりなりとて下てよめる

永慶法し

山さくら峯はかすみのこめつればふもとの花をおりてこそみれ 初74 経存・洋被除

醍醐にまかりたりけるに清滝に花のちりかゝりたりけるか岸には雪のやうにつもりて
水にはつもらさりけるをみてよめる

瞻西上人

ちる花のなかるゝ水につもらぬもそれさへ雪のこゝちこそすれ 初78 経存・洋被除

円融院にあまたまかりて翫花といへる事をよめる

中納言顯隆

ちれは雪ちらねは雲とみえつるはさかりににほふさくら成けり 初85

覚樹法し

岑にちるさくらは谷の埋木に又さく花となりけるかな 初92 経存・洋被除

白川の花さかりなりと聞て人く具してみにまかりたりけるにさかり過てちりけるを

みてよめる

源俊頼朝臣

身にかへておしむにとまる花ならはけふや我世のかきりならまし 〔87〕 奏覧本67

落花の心をよめる

源俊頼朝臣

山あらし岑こす風にちる花を空ゆく浪とおもひける哉 〔92〕

前斎院にて水上落花といへる事をよめる

平忠盛朝臣

水のおもにちりみちにけりさくら花何をか池のしるしにはせん 〔94〕

春駒の心をよめる

藤原盛経

とりつなく人もなきのゝ春駒はかすみにのみやたなひかる覧 初109 経存・洋被除

夏部

おなし心をよめる

皇后宮肥後

春はいかに契りをきてか過ぬるとをくれてにほふ花にとはゝや 初143

源盛清

卯花をとなし河の浪かとてねたくもおらて過にけるかな (109)

大中臣実長

うのはなの青葉もみえすさきぬれは雪には名のみかはる成けり (110)

鳥羽殿歌合に卯花をよめる

藤原季通

みる人のたちしとまれは卯花のさけるかきねやしら川の関 初155

源俊頼朝臣

時鳥こゑまちつけてきくほとや人に我身のうらやまるらむ [137] 洋欠部

藤原重基

住吉のまつとしりせはほとゝきすうらみぬさきにをとはしてまし 初161 洋欠部

大中臣公長朝臣

いなり山尋ねやみまし時鳥まつにしるしのなきかと思へは (122) 経存・洋被除

雲外郭公といへるころを

空になる心のきかはほとゝきす雲のよそには思はさらまし 初171 経存・洋被除

郭公といふことをよめる

清原祐隆

みわの山すきかてになけ時鳥尋ぬるけふのしるしと思はん 初172

またすてふ我名はたてし時鳥なきおこしつと人にかたるな〔150〕

源俊頼朝臣

たまさかにとふひの杜のこすゑよりなのりて過るほとゝきすかな〔156〕

源忠季

時鳥まつ夜の数はかさなれと声はつもらぬ物にそありける 初180

源俊頼朝臣

独聞郭公を

藤原為忠

ね覚する人もしあらは時鳥これはきくやととはまし物を 初189

源俊頼朝臣

なきつともたれにかいはん郭公影より外に人しなけれは〔166〕

俊頼朝臣

五月雨は軒のしつくのつくく〜とふりつむ物は日数なりけり〔181〕

夏月如秋といへることをよめる

清原祐隆

五月雨のはれまの月のさやけきは秋の空にもをとらさりけり 初207

藤原忠季

ともしすと山はしつくにそほちつゝおのへに夜をもあかしつる哉

(宣秀本ニヨル、続類従本・園林本・岡田本アリ。公夏岡本ナシ) 初(216) 経存・洋被除

緑樹蔵月といへることを

〔清原祐隆〕

月影の青葉か下にもりこねは木からしふかん秋をこそまで 初225

公実卿家にて対水待月といへることをよめる

源俊頼朝臣

山のはを玉江の水にうつしもて月をは浪の下にまつかな 初228

六月被の心を

源有政

御被する河せにたてゐるさへすかぬきかけてみゆるけふ哉 初230 経存・洋被除

六月被のころを

藤原季通

けふくれはあさのたち枝にゆふかけて夏みな月のみそきをそする 初232 経存・洋被除

秋部

待草花心を

皇后宮美濃

藤はかまはやほころひてにほはなん秋のはつかせふきたゝすとも (167) 経存・洋被除

中納言実行

心をもかす物ならはたなはたのあふをはよそにおもはさらまし 初235

宋延法し

天川君わたりなはかさゝきの橋うちみたるなみもたゝなん 初236 経存・洋被除

摂政左大臣家にて七夕の心をよめる

藤原時正

ひこ星のたきつの波に舟出する心のうちをおもひこそやれ 初238 経存・洋被除

勝起法し

天川わかれにむねのこかるれはかへさの舟はかちもとられす (172)

一宮小弁

七夕のあまのとわたるかちのはに思ふことこそかけとつきせね 初 246

旅宿月といへることを

藤原有業

たひねする難波の浦のとまやかたもろともにしもやどる月かな 初 276

後冷泉院御時殿上人あまたくして月みありきけるをみてよめる

よみ人しらす

うらやまし雲のうへ人うちむれてをのか物とや月をみるらん 初 302

源俊頼朝臣

さゝかにの糸にかゝれる藤はかまたれをぬしとて人のかるらん 〔306〕

冬部

百首歌中に霜を

源俊頼朝臣

住吉のちきのかたそきゆきもあはて霜をきまどふ冬はきにけり (289ノ次) (宣秀本ニヨル・続類従本・園林本・

岡田本アリ。公夏筆岡本ナシ)

題不知

源俊頼朝臣

雪ふれは谷のかけ橋うつもれてこすゑそ冬の山ちなりける 〔364〕

十二月廿日比に山家暁といへる心を

春宮大夫公実

山里の竹のすかきしあらければうち外もわかす有明の月 初 438

賀部

源俊頼朝臣

おちたきつ八十うち川のはやきせに岩こす波は千世の数かも〔409〕

恋部下

蔵人にて侍ける比内をわりなく出て女の許にまかりてよめる

藤原永実

みか月のおほろけならぬ恋しさにわれてそ出る雲の上より(517)

たいしらす

よみ人しらす

うとましや木の下陰のわすれ水いくらの人のかけをみるらむ (531)

俊忠卿家にて恋歌十首人くよみけるにおとしめてあはすといへることをよめる

〔源俊頼朝臣〕

あやしきもうれしかりけりおとしむるそのことのはにかゝると思へは (550)

雑部上

山寺に月のあかりける夜経のたうときを聞て涙のおちければよめる

平康定女

いかてかはたもとに月のやとらましひかり待けるなみたならすは (572)

返し

美濃源仲正女

うれしくも秋のみやまの松風にうゐることのねのかよひけるかな (578) 経無シ・洋存

月のあかゝりける夜人の琴ひくをきゝてよめる

内大臣家越後

ことの音は月の影にもかよへはや空にしらへのすみのほるらむ
(579) 経無シ・洋存〔但シ右二首経誤脱歟。既述参照〕

皇后宮美濃

よなくはまとろまでのみ有明のつきせす物をおもふころかな
(621)

返し

賀茂成助

住吉のまつかひありて今日よりはなにはの事もしらすはかりそ
(630)〔伝経元本〔629〕詞書・作者名ノミ、〔630〕詞書・作者名・歌欠落、但し〔630〕ハ被除歌歟〕

雑部下

下藹に超られてなけき侍ける比よめる

源俊頼朝臣

せきもあへぬ涙の川ははやけれと身のうき草はなかれさりけり
(649) 経無シ・洋存〔但し伝経元本欠落歌歟〕

衆罪如霜露といへることをよめる

覚誉法し

つみはしも露ものこらすきえぬらんなかき夜すからくゆる思ひに
(675)

龍女成仏をよめる

勝紹〔超〕法師

わたつ海の底のみくつとみし物をいかてか空の月とみるらむ
(679)〔宣秀本ニヨル、統類従本モアリ〕

連歌

きしを軒にさしたりけるかよこ雨にぬれたりけるをみて

雨ふれはきしもしとゝに成にけり

かさゝきならはかゝらましやは (706)

よみ人しらす

花くきはちるてふことそなかりける

前太政大臣家木綿四手

風のまに／＼うてはなりけり (704)

以上、続類従初度本系より両本に於て被除された歌員である。但し両本には共通の欠落部があり即ち(517)藤原永実歌一首が未収録歌として推定される。また伝経元本のみにある欠落部があり、即ち(630)賀茂成助歌一首が未収録歌として推定される。更に伝経元本には(578)美濃歌・(579)内大臣家越後歌・(649)源俊頼歌の三首を欠くが既述のようにこの三首は誤脱歌とも推定される。が一応此処では、これらを含め扱うことにする。従つて両本の被除歌は七十首を見出すことになるわけである。「猶そのほか園林・岡田本には(266)神祇伯頭仲歌の次に(283)源俊頼歌「あらし山葉守の神も云々」が重複して収載するが、当然の事ながら、これは除いている。前稿参照」

そのうちわけは伝経元本五十三首・東洋文庫本は六十八首―東洋文庫本は(113)歌から(120)作者名まで欠落するので、その間に〔137〕源俊頼歌・初161藤原重基歌の両首の存否が不明なため―が切出されたのであり、歌員数からみれば、既述した推定と同様に伝経元本は東洋文庫本に較べ、続類従初度本系に続く関係が想定され、後者はこれに次ぐ段階が考えられるのである。この約七十首に及ぶ切出しは撰歌の複雑な事情と相俟つて、本集の錯雑する成立過程を如実に語りかけるものがある。と同時に、かゝる草案の流伝がどのように経過、伝存し来つたかは猶幾多の問題を残すものである。がいずれにせよ七十首に及ぶ棄却はさきの続類従初度本系につぐ改修であり、撰者の苦心のほどが窺

われるのである。

扱、その内容をみると、

(一)初度本・続類従初度本系と継続載録されてきた歌で、この段階で切出された歌員数は三十九首―即ち、初2・初19・初23・初38・初40・*初39・初42・初46・初47・初50・初64(二度本(40))・初74・初78・初85・初92・初109・初143・初154(同(109))・初155・初161・初170(同(122))・初171・初172・*初180・初189・初207・初216・初225・初228・初230・初232・初235・初236・初238・初242(同(172))・初246・初276・初302・初438―である。

(二)続類従初度本系撰入歌に於て切出された歌員数は三十一首である。即ち(イ)二度本歌順番号を持つ歌員十五首、即ち(110)・(167)・(517)・(531)・*(550)・(572)・(578)・(579)・(621)・(630)・*(649)・(675)・(679)・(706)・(704)である。

(ロ)続類従初度本系にて公夏本歌順番号の歌員十五首、即ち、*[2]・*[14]・*[25]・*[29]・*[87](三奏本67)・*[92]・*[94]・*[137]・*[150]・*[156]・*[166]・*[181]・*[306]・*[364]・*[409]である。(ハ)続類従初度本系にて公夏本に欠き他本(宣秀本)にて補った*(289)ノ次の一首がある。

被除七十首中、その対称となつたのは、(一)の如く初度本からの歌員が三十九首を占めている。而も初度本は前半部巻五賀部迄の零本である。その意味するものは、結局の処、初度本の面目を一新しようとする撰者の動向のきびしさが目から滲み出ているのが如実に汲みとられる。初度本から続類従初度本系への切出しの一つの大きな指向である三代集の作詠歌の被除とは異なり、この段階に於ては、もう一つの方針、当代の作歌に於ける切継という困難な撰歌事情が、かゝる激動となつて現われているのではなからうか。因みに、(二)の続類従初度本系撰入歌三十一首の中で*印を施したのは撰者俊頼自詠の歌である。三十一首中の半数を数えることは撰者自らの動揺と混迷を語りかけると共に、

本集をして新機軸を示さんとする情熱の流露とでも云おうか。新らたなる胎動と試案が企図され崩れ繰返されてゆく姿を其処にみる感が起るのである。例えば〔87〕は二度本で全く消え、奏覧本にいたつても猶甦らせるなど、撰者の執拗なこだわりにも感じとられるのである。また、いわば勅撰和歌集撰集のとする基盤と撰者の試案に、加うるに白河歌壇との相交錯する様相をも語りかけるものではなからうか。

それはさておき、次に両本に於ける段階にて新らたに撰入し、或は初度本から又再び収載された歌員は前の被除歌に較べ甚だ尠く次の如く二十首に満たない。(前表同様に公夏筆写本による。続類従初度本系に異同ある場合は註記す)。即ち

(72) (初60) 右兵衛督伊通歌「しら雲と嶺には見えて云々」(経存・洋欠)・(93) (初131)〔盛経母〕歌「花のみや暮ぬる春を云々」(経存・洋欠)・*156ノ次(初216) 藤原忠兼「ともしすと山の雪に云々」(経存・洋欠、公夏両本ニ欠クガ宣秀本・続類従初度本・園林本・岡田本ニアリ、前の第一表参照・11ノ歌)・*(171)ノ次(初241) 勝超法師歌「恋わたる涙は袖に云々」(同表16歌)・*(205)ノ次(初ナシ) 覚誓法師歌「天河名になかれたる云々」(同表20歌)・*(222)ノ次(初ナシ) 隆覚法師「いはれのゝ千くさの花に云々」(同表29歌)・(252) (初345) 藤原伊家「今はしもほに出ぬらん云々」・(256) (初353) 藤原行家歌「河霧の立こめつれは云々」・(同様ニ宣秀本・続類従初度本・園林本・岡田本等ニアリ)・(289) (初325) 神祇伯頭仲歌「風寒みとしまか崎を云々」(同様ニ宣秀本・続類従初度本・園林本・岡田本等ニアリ)・*(313)ノ次(初ナシ) 慶経法師歌「思やれ嵐の山のふもとにて云々」(同表41歌)・(415) (初欠部、以下同) 相模歌「ありふるもうき身成けり云々」・(443) 源雅光歌「吹風にたへぬ梢の云々」・*(463)ノ次藤原有業朝臣歌「いはてのみ心のやみに云々」(同表44歌)・*(466)ノ次二首、源明賢歌「歎きあまりしらせ初つる云々」(同表45歌)・藤原宗国歌「けふこそはいはれのゝへの云々」(同表46歌)・*(469)ノ次清原祐隆歌「あふ事はかたのゝ浜に云々」(同47歌)・*(478)ノ次光雅法師歌「から衣君かきまさ

ぬ冬の夜に云々」(同表49歌)・*(533)ノ次よみ人しらす歌「いとせめて恋しき時は云々」(同表50歌)の十七首である。両本の相違は僅か(72)・(93)・(156)ノ次歌の三首にすぎない。他歌はすべて一致する点、比較的近似し、両書に於ける継入は著るしい変化はすでになかったものと推定される。

その内容は、まず、二度本に散見する歌は上述の三首のほか、(252)・(256)・(289)・(415)・(443)の五首を数える。その中で、(256)・(289)の両歌は註記したように公夏筆の両本をのぞき続類従初度本系にすでに載録され、(415)・(443)の両歌は初度本巻六以下の欠巻部に当るので推定すべくもないが、他はすべて初度本に見出され、前稿・本稿では屢々言及したように本集切継に於ける出入の再転・三転する歌員であり、これらは寧ろ撰入歌として扱うべき対称からはずすのが妥当かもしれない。従つて、確実には両書に於ける新採取歌としては*印を施した十首の歌であるとするのがよいのではないかと思われるのである。かくの如く本段階に於ける新らたな撰入歌は前段階に較べ甚だ尠く、所謂二度本への接近の様相を次第と示し進めているのである。

如上続群書類従初度本系からの切継の概略であるが、両書以外の吉田文庫本・河野信一記念文庫本に就いてであるが、特に後者河野記念文庫本は十二首の二度本未収録歌を持つ点注目されるので一言することにする。前に掲出した未収録歌一覧表の十二首のうち続群書類従初度本系に見出される歌員は、僅かに前表の48藤原親隆歌(公夏本〔528〕、宣秀本・続類従初度本・園林本・岡田本ナシ)の一首であり、その48親隆歌・47清原祐隆歌の二首は伝経元本・東洋文庫本にも載入するが他の十首(但し同52覺樹法歌は吉田文庫本本行に載録されるが)は本書特有の新撰入歌である点注目されるのは既述した通りである。そのうち、五首(連歌二首を含む・前表参照)が撰者俊頼の歌であるのをみると、猶、前述両書以後、特に両書に新撰入歌を見出すことの尠い本集後半部に、自詠歌を中心にあらたな補入がなされたのでは

なからうか。いずれにせよ右記の十首は続群書類従初度本系以降に於ける新撰出歌としては、前述の十首に加えられるべきである。吉田文庫本卷末附載歌はやゝ疑点を残すので本稿では論及しないことにする。

次に論述の順序としては、前記四本相互の歌順形態に触れるべきであるが、既述した如く、伝経元本・東洋文庫本をのぞくと、吉田文庫本は本来二度本であり、河野記念文庫本はかなり特異な形態を示すので、総括概略することは殆んど不可能に近い。従つて伝経元本・東洋文庫本は該当箇処でさきに相關關係を対比した。又、吉田文庫本・河野記念文庫本もそれ〴〵別個に説述したので、此処では、それらを参照して頂き更に言及しないことにする。

従つて此処では次期の所謂二度本所収歌と前記諸本の二度本欠員歌との関連を考察し、本稿を終えることにする。圈内に〇印を施したのが諸本欠員歌である。さて、前記四本であるが、吉田文庫本は右の理由から除去することとし、伝経元本・東洋文庫本・河野記念文庫本を対称とする。―さきに簡略に比較しておいたが更に―対比の關係上、先行本である初度本・続類従初度本系とを併せ掲出することにした。初度本は各卷末の補写箇処はこれを除き、*印を施し他の欠員歌と區別した。続類従初度本系は、前稿で縷述したように、(イ)園林本・岡田本、(ロ)宣秀本・続類従初度本、(ハ)橋本公夏兩本(天文四年筆写本と無奥書とはやゝ異なるが必要な場合は註記した)の三系統にわかれるので、次表に於ては、園・宣・公と略記した。伝経元本・東洋文庫本・河野記念文庫本は従来通り経・洋・河と略記する。欠員歌の番号は国歌大観の歌順番号である。

併記した二度本歌は前記諸本二度本欠員歌に比較的類似する二系統の代表的な各一本である正宗文庫蔵長享元年大慈院僧都空済奥書本・京都大学国語国文学研究室蔵〔長享五年〕筆写本を撰び、長・京と略記した。

京 長 河 洋 經 公 宣 園 初

○ ○	○						240
						○	241
						○	246
○ ○	○		○ ○ ○				252
○ ○	○		○				256
						○	262
				○ ○			263
						○	272*
○ ○	○						277
						○	285
○ ○	○		○				289
							307
							309
							312
○	○						313
						○	315
						○	316
						○	317
						○	320*
						○	325*
						○	330*
						○	332*
				○ ○			346
						○	354*
	○					○	370
○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○						376
○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○						409
○			○ ○ ○				415
○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○						420
○	○ ○ ○ ○ ○ ○						435
○ ○	○		○ ○ ○				443
○ ○		○ ○ ○ ○ ○					458
	○						476
						○	474
○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○						488
○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○						493

京 長 河 洋 經 公 宣 園 初

	○	1
	○	2
	○	3
	○	4
	○	5
	○	6
	○	21
	○	23
		40
○		47
		53
		54
○ ○	○ ○	72
		74
		75
		82
		88
○		93
		95*
○ ○	○ ○ ○	109
○ ○	○ ○ ○	110
		112
		113
○ ○	○ ○	122
		166
○ ○	○ ○	167
		172
		174
		177
○ ○		186
		200
		201
	○	213
		218
		230
		237

初	園	宣	公	経	洋	河	長	京
494	○	○						○
495	○							
509	○	○	○	○	○	○	○	○
517				○	○			
531	○			○	○	○	○	○
544	○							
549	○	○	○	○	○			○
550	○	○		○	○			
572	○	○		○	○		○	
578				○				
579				○				
592			*					
599	○							
606	○							
607	○							
621		○		○	○			
630	○	○		○	○	○		○
648	○	○					○	○
649				○				
675	○			○	○	○		○
679	○		○	○	○	○		○
686		○						
687	○							
704				○	○		○	
706				○	○			
711							○	

右表を一覧しても判るように、初度本を別して、以下の園林本・岡田本・宣秀本・続類従初度本・公夏筆両本の所謂続群書類従初度本系と伝経元本・東洋文庫本・河野記念文庫本とは、掲出の二度本系所収歌の異同に於て、かなり共通し類似する諸点を示している。初度本が巻五迄の零本である関係もあるが、本集後半部に異同は蜷集して諸本相互に相違・類似を見るのである。それに就いてはすでに伝経元本の箇処その他に於て指摘してきたところである。従つて、此処ではまず諸本間の類似・共通点を類別し、その相互関係を考察することにする。

(一) 続群書類従初度本系六本と伝経元本・東洋文庫本・河野記念文庫が共通して不載歌となつてゐるのは、(376)・(409)・(420)・(435)・(488)・(493)・(509)の七首である。

(二) 河野記念文庫本のみに存し、諸本共通する不載歌に(458)・(549)の二首がある。但し(313)の歌は河野文庫本のみ被

除歌である(以下長・京の例示にみられる相互関係は除くことにする)。

(三)河野記念文庫本・公夏筆両本には存し、他の諸本に共通する不載歌は(550)・(572)の二首がある。(右同)。

(四)河野記念文庫本・園林本・岡田本・公夏筆両本に存し、他本共通の不載歌には(621)の一首がある。(右同)。

(五)宣秀本系・公夏筆両本に存し、他諸本に共通の不載歌には(531)・(675)の二首がある。(右同)。

(六)公夏筆両本・河野文庫本の三本に不載の歌は(256)・(289)の二首がある。又、公夏筆両本のみの載録歌に(630)の一首をみる。(右同)。

(七)初度本・伝経元本・東洋文庫本に存し、他の諸本に共通の不載歌には(252)・(443) (但し初度本欠巻部)の二首がある。又、続群書類従初度系のみ共通の不載歌に(415)の一首がある。(但し初度本欠部)(右同)。

(八)伝経元本一本のみの不載歌には(578)・(579)・(649)の三首がある。又初度本・伝経元本のみに存し、諸本共通の不載歌には(72)の歌一首がある。そのほか、初度本・伝経元本・河野記念文庫以外の諸本不載歌に(93)の歌一首等が散点される。(右同)。

(九)次に前例とは別に園林本・岡田本両本のみの不載歌には(82)・(88)・(112)・(316)・(370)・(474)・(495)・(544)・(599)・(606)・(607)・(687)の十二首が散見する。

(一〇)宣秀本・続類従両本のみの不載歌は(686)の一首が見える。又、逆に両本のみの収録歌に(679)の一首がある。*印を施した(592)の歌は天文四年公夏奥書本にのみ見える誤脱歌と推定される。(右同)。

(一一)園林本・岡田本・宣秀本・続類従本の二系統に不載の歌は(177) (但し初度本も不載)・(263)・(346)・(494)・(648)の五首がある。公夏両本に存し、他の諸本に不載の歌に(630)の一首がある。(右同)。

如上の(㉒)・(㉓)・(㉔)項は伝経元本・東洋文庫以前の続類從初度本系諸本に関連する異同であり、すでに前稿で述べたので併せ参照されたい。

(㉔)伝経元本・東洋文庫本・河野記念文庫本の三本のみ共通の不載歌は(109)・(110)(初度本も不載)の二首、伝経元本・東洋文庫本両本のみ不載歌は(172)・(517)・(704)・(706)の四首、東洋文庫本・河野記念文庫本両本のみ不載歌は(122)・(167)(初度本も不載)の二首、伝経元本一本のみ不載歌は(578)・(579)・(649)の三首、東洋文庫本のみそれは(40)・(113)の二首、河野記念文庫本のみ不載歌は(240)・(277)・(313)・(476)の四首である。この(㉔)項はすでに本稿で先述したところであるので、一括し附記した次第である。それらに就いては前記を参照されたい。従つて当面の問題を残すものは、(㉕)・(㉖)項までである。

論をすゝめるに当つて前稿に於て推定した撰述過程として、園林本系→宣秀本系→公夏本系の移行経過を前提として、所謂二度本所収歌に於けるこの四本の変移の関係を考察することにする。

先ず(㉕)に就いてであるが、この七首は本集後半の初度本欠巻部に当るので、続群書類從初度本系諸本に一致して散見する不載の歌員であり、伝経元本・東洋文庫本・河野記念文庫本がそのまゝ踏襲したこととなる。又(㉖)の二首は河野記念文庫本を除く両本が同様に前者を受け継いでいるのであつて、この計九首は伝経元本・東洋文庫本に至るまで変化を示さなかつたわけである。但し(313)の一首は河野文庫本のみ被除され、前者と異なるが二度本第三類群伝本系以後多く被除歌となつてゐる。

(㉔)の二首はさきの仮定よりすれば公夏本系に於て撰入され、伝経元本・東洋文庫本にて再び被除されたこととなる。(㉕)の一首は宣秀本系にて被除され更に公夏本系で再び撰入し、三転して、伝経元本・東洋文庫本にて被除したこ

となる。又(五)の二首は同じく園林本系から宣秀本系・公夏本系に於て撰入歌となつていて伝経元本等三本の途次に再び被除されたことになる。右の五首は一旦それ／＼或る過程——即ち園林本系か宣秀系——で被除され再び公夏本系にて撰入し、更に経元本・東洋文庫本の段階で被除されるという不自然さはまぬがれない。更に伝経元本等両本が公夏本の次の過程を予想されるとすると、寧ろ公夏本系では収載歌であつたが、園林本系・宣秀本系にて被除されて、伝経元本・東洋文庫本にと移行経過を辿つたと推測するのが一見妥当であるかのように見受けられる。が然しながら(九)・(一)項(但し(630)は除く)の示す十七首は園林本系か、園林本系・宣秀本系の両系の孰れかに欠く歌員であり、この推測に立脚すればこの両系から公夏本系で収載歌であり、再び園林本系・宣秀本系のいずれかの段階で被除され、更に伝経元本・東洋文庫本で復活し再録されるということとなり、歌数の上からも變則的改更は一層不自然な感をまぬがれないので、やはり、さきの仮定である、園林本系・宣秀本系→公夏本系から、伝経元本・東洋文庫本の如き推移の段階を想定するのが自然ではなからうか。この点でも、前稿の推定は可能性を見出されるのである。

(六)項の(256)・(289)の両歌は園林本系・宣秀本系の収載歌で公夏本系で被除されたが、伝経元本・東洋文庫本で再び収載され、河野文庫本で三転・四転し、被除されたのであるが、もつとも二度本では過半が被除されるところの歌であれば變動する事情も当然そこに考えられるのである。(併記した長・京二本も同様である)。但し附記した(630)の歌は公夏両本のみ収載歌となる点、前者とは全く反対の経過である。がこの歌も前者同様二度本では被除される傾向にある。(七)項の(252)の歌は園林本系・宣秀本系・公夏本系の所謂続類従初度本系で切棄てられ、伝経元本・東洋文庫本で再び載録され、河野文庫本以後二度本に於て過半が棄却される運命にあるのは前稿より縷述した処である。同じく(443)の歌は初度本欠巻部につき推測しがたいので、一応続類従初度本系では不載歌であり、前記両本に至つてまた収

録され、前者(252)歌同様に殆んど棄却される経過を辿っている。附記した(415)の歌は初度本が欠部であるが、前者同様に続類従初度系の過程では未載歌であり、伝経元本等三本の段階で収録されているが、以後二度本京大本系の途次で、その過半が被除歌の対象となつていのである。(八)項は伝経元本・河野記念文庫での箇処に説述してきたので参照されたい。

以上、前掲書の中の二度本所収歌の歌員異同を数字上から一覧すると、一応如上の経過から、最も妥当な可能性として次の過程が推定される。即ち、伝経元本・東洋文庫本の両本は続群書類従初度本系では公夏本系に続く撰述過程にあり、河野信一記念文庫本は類本をみないが、更に両本の過程をすゝめて、所謂二度本に近づきながら、猶その前段階を示す一本として興味ある伝存本である。天理図書館蔵吉田文庫本の欄外比較歌・巻末附載歌等は不完全ながら幾多の示唆をとどめて、その祖本が惜しまれる。

最後に、もう一つ注意されるのは、伝経元本の処でもふれたが、二度本と称せられる流布本の中で、版本系をその撰述初頭に置くのが従来の常識であるが、続類従初度本系や前述の先行諸本が右表の如く、二度本所収歌を、猶かなりの歌数闕いている点で、これらが直接に版本系に移行し、この不載歌が俄かに撰出収録されたと断定することが却つて不自然の感をまぬがれぬことである。且つ又、現存二度本伝本に於ては僅かの版本系未収録歌を含む伝本も存するが、先行諸本のもつこの二度本未収録歌は殆んど切出された形態であるので、前述諸本からの次段階としては版本系を想定するのは、かなり疑義が残るのである。そこで、二度本所収歌に於て前述諸本に比較的近似する二例を右表に加え対比することにしたのである。一例の正宗文庫蔵長享元年奥書本は所謂二度本諸本では仮りにその欠員歌と版本系所収歌との比較の時点からすると第三類群伝本系に属する。^{註八}(次稿にて詳述する予定であるが、第三類群伝本系というの

は本稿に於ける便宜的呼称にすぎない。本書は次の如き奥書、即ち「右集依中嶋小次郎所望／以老父証本令書写校合畢／于時長享元年十月日／大慈院僧都空濟」とあるが、筆写時代は奥書の時代を更に降り室町末期頃かの印象が残っている。がこの系統中では天理図書館「室町中期」写本と共に比較的善本である。たゞ右表に記入した^{註九}(213)の歌及び(711)巻末歌は本書の誤脱歌である。次例の京都大学国語国文学研究室蔵「長享五年」筆写本は前書の次系統に属する伝存本である。奥書の処は摺摩していて、わずか「長□五年六月／□□」^{註十}と判読される。長祿は四年目に改元しているので、長享五年の筆写本と推定される。猶この系統には正宗文庫蔵「鎌倉末南北朝」写伝慈鎮筆写本・吉田幸一氏蔵「南北朝」写伝兼好筆写本等があるが前者は落丁などもあり、後者はこの系統として猶詳記する諸点が存するので次稿に述べることにする。

さて、伝経元本以下前記二度本兩本の欠員歌が全く異同を示さず一致するのは、(109)・(110)・(376)・(409)・(420)・(488)・(493)・(509)・(531)の歌員を数え、まず版本系に直接移行する経過を想定するのは不自然であろう。また(458)の歌は河野記念文庫本のみ収録歌であるが、それも(487)の歌の次に排列されている点、更に所謂二度本に於て第三類群伝本系統以後すべて被除されているなど併せ考えると河野記念文庫の過程で浮動していた歌と推定され寧ろ前者に準ずるものと云える。

次に伝経元本のみ存し以後切出された歌員には(72)・(122)・(167)の三首がある。(72)の歌は続類従初度本系の後、伝経元本で一旦再収載され、更に東洋文庫本・河野記念文庫本・第三類群伝本系以降被除される、(122)の歌は続類従初度本系諸本に載録され伝経元本に受けつがれたが、東洋文庫本・河野記念文庫以後、同じく第三類本系以降は棄却され、又(167)の歌も前歌同様それ以後、被除された歌と推定されるのである。これらは、いずれにせよ版本系・第二

類群伝本系を経過したものとは思われない。

次に(40)・(93)の両歌であるが、(40)の歌は初度本から河野記念文庫迄の間、一例東洋文庫本で被除され、その後第三類伝本系以後の系類で切出された東洋文庫本特有な現象である。(93)はすでに前述した通りであり、前者同様第三類伝本系以後では被除歌である。

又(550)・(621)の両歌は続類従初度本系の伝本(但し(550)は公夏筆両本に(621)は園林本系・公夏両本にあり)・伝経元本・東洋文庫本で一旦被除され、上掲の河野記念文庫本・長享本・京大本に載録されるが、京大本の系類に於ては前記伝兼好筆本・伝慈鎮筆本の如き古鈔本をはじめ過半が被除されているのを見ると、同様第三類群伝本系以後の系類では切出されたものと考えられる。又、(572)は続類従初度本系の公夏筆両本・河野記念文庫本・京大本に載録されているが、同様に伝兼好本・伝慈鎮本等系類に過半被除され第三類伝本系以後の系類で切出されている。(704)の歌は伝経元本・東洋文庫本の過程で切出され、河野記念文庫で再録されるが第三類伝本系で被除されている。京大本では載録されているが、前記古鈔本両本以下過半に被除されていて、前者同様に以後切出されている。

次に(172)・(706)の両歌は伝経元本・東洋文庫本両本のみ欠員歌であり、特に(172)の歌は初度本以後、二度本・奏覧本に至るまで、この(172)三宮歌を欠く伝本を管見しない。従つて(172)の歌は両本の過程に於ける切出歌であるか否かは俄かに決め難い。又、(706)の歌も前歌と共に両本の段階で切出されているが、以後二度本に被除歌となつてゐる伝存本を管見しない。既述の如く両本特有の現象であろう。

さて、次に河野記念文庫本・長享本・京大本共通の欠員歌をみると、(72)・(109)・(110)・(122)・(167)・(240)・(252)・(256)・(277)・(289)・(376)・(409)・(420)・(443)・(488)・(493)・(509)・(531)の十八首が散見される。河野記念文庫本が二

度本撰述目前の過程と推定されるなりに、前記伝経元本等諸本から更に、長享本系・京大本系への移行過程の妥当性が類推されるのである。又、(549)は続類従本初度系・伝経元本・東洋文庫本で被除され、河野記念文庫本・長享本系で再録されるが京大本系以後に於て被除されているのは、やゝ前者とは異なるが、既述の如きと同様の類似傾向を示すものであろうか。しかしながら、(186)・(648)の二首などは伝経元本・東洋文庫本・河野文庫本に載録され、長享本系・京大本系に切出されるなど前者の推定とは相反する一面もある。

前述の先行撰述諸本との相互関係ではないが、長享本系から京大本系に至る過程では、*(40)・*(93)・(313)・(415)・(435)・(494)・*(549)・*(630)・(675)・(679)・(686)の十一首(次稿に分類を予定する)が更に被除されている。

*印の四首はすでに記述したので、他の歌員について触れておくことにする。まず(494)の歌であるが続類従初度本(但し公夏両本にあり)では被除歌となるが伝経元本・東洋文庫本・河野記念文庫本、更に二度本では長享本系では再録歌となつて京大本系以降被除歌となつている。(435)・(675)(但し宣秀本系・公夏筆両本にあり)・(679)(但し宣秀本系にあり)の三首は続類従初度本系の伝本以下伝経元本・東洋文庫本・河野記念文庫本の両三本に未載歌であり(初度本欠巻部)、長享本系では載録されているが京大本以降は再び被除歌となつている。又(686)は京大本には存するが、この系類では過半被除されているので右表に更に一首加えるべきであらう。この歌は続類従初度本系では宣秀本系にのみ被除されているのは既述した如くである。残る(313)・(415)の二首であるが、(415)の歌は初度本は欠部であるが、続類従初度本系では不載歌となり、伝経元本等三本に初めて所載され、二度本では京大本系に至つて更に改めて被除歌の対称となつたものである。(313)は初度本より続類従初度本系・伝経元本・東洋文庫本等の先行諸本に所載され河野記念文庫本に欠員歌となつているが、前記した如く、二度本第三類群伝本系以後殆んど被除歌となつているのを

みると、やはり切継に於て浮動していた歌であろう。従つて、前述の撰述移行過程の推論と相反する一面が、さきの(186)・(648)の歌の場合の如くに全く無いわけではないが、この場合は切継という条件を設定して考えれば、或いは単なる被除歌ともとれないことはない。と同時に比較的自然的な移行とも想定されるのである。

如上、煩瑣に縷述したが、伝経元本・東洋文庫本・河野記念文庫本の欠員歌と所謂二度本の、この第三類群伝本系及びそれに次ぐ系類伝本とは、その間猶曲折はあるが、かなり密接する関係が見出され、二度本に於ける版本系への推移過程を想定するよりも、この両系のいずれかの段階への撰述過程を推論するのが自然である。しかし長享本系である第三類群の伝本系か、それに次ぐ京大本系類かの孰れの系類方向を辿るかは俄かに結論し難い。

ともかくも、本稿四本の二度本欠員歌二十五・七首及ぶ歌員が散見され、且つ二度本撰述形態に類似する系類伝本が多見されることは、本集撰述過程を想定する上に重視されねばならない。所謂二度本にみる最終の精撰本に於ても、別記した長享本系・京大本系からの切継の変動は、版本系から、前記両系のそれに比すると極めてわずかなものにすぎない。それに就いては次稿に詳述する予定であるが、この事実からも類推されるのは、いずれにせよ、この草案本段階を示唆する本稿四本から版本系への移行経過を直接に続く撰述過程として想定するには、この間をつなぐ新出本をみぬ限り不自然な感はまぬがれないのではなからうか。

以上本稿四本に於ける二度本収録の欠員歌に就き、併せ、こゝに附記した次第である。

註一 参考までに 正暦二年四月二十八日内裏歌合を参照するに、この歌(118)は、七番「郭公」の題詠として

左持

左近中将家忠

時鳥飽かで過ぎぬる声によりあとなき空をたづねつるかな

右

藏人辨伊家

郭公あかつきかけて鳴く声を待たぬ寢覚の人や声くらむ

(平安朝歌合大成)

とある、左、家忠歌となっている。恐らく藤原孝善が家忠の代作者として詠んだのであろう。同歌合二番「霞」題の左「谷川の音は隔てず真金吹く吉備の中山霞こむれど」の歌は、左中将家忠朝臣とあるが、続詞花集卷一には作者藤原孝善となっており、袋草紙・八雲抄にも孝善の歌詠として誌しているものであるから、これを藤原顕輔歌とするのは版本系の誤りであろう。が伝兼好本にかくあるのは何か別な事情が或は其処に猶あるのか、いま明らかにしない。

註二 このほか、正宗文庫蔵〔室町末〕写本(巻四・五・六欠零本)・九州大学図書館蔵飛鳥井雅春筆写本・東洋文庫蔵文明十年藤原教国奥書本・京都大学国語国文学研究室蔵〔室町後期〕写本・書陵部蔵〔江戸初期〕写本(函架番号510・38)・同〔江戸初期〕写永正八年奥書本・同〔江戸中期〕写卷子本(函架番号C1・119)・高松宮家蔵〔江戸初期〕写文明十年藤原教国奥書本・某宮家蔵伝飛鳥井雅教筆写本・穂久邇文庫蔵文明五年写本(存巻六・十)・河野信一記念文庫蔵〔鎌倉〕写本(但し、この部分は正徳四年冷泉為久補写)・同〔江戸前期〕写本(B)・同〔江戸前期〕写本(C)(廿一代集之内)等が散見される。その外は版本系写本・版本系に準ずる江戸期の書写本等々である。

註三 参考までに、本書欄外中、略記した二度本所収歌を次に掲出すると、

待草花といふ心を

皇后宮美濃

藤はかまはやほころひてにははなん秋のはつかせ吹たゝすとも(秋部(167)・初度本ナシ・続類従初度本系アリ)

思野花といふ心を

藤原伊通

千載
いまはしもほに出ぬらんあつまちのいはたのをのゝしのゝをすゝき(秋(252)・初度本アリ・続類従初度本系ナシ)

藤原行家朝臣

河霧のたちこめつれは高瀬舟わけ行さほの音のみそする（秋部256・初ナシ・続類従初度本系中公夏両本ニアリ）

紅葉風イ本にしたかふといへることをよめる

長実卿母

色ふかきみ山かくれの紅葉マ、はを嵐の風のたよりにそ見る（秋部270・初度本・続類従初度本系アリ）

源定信

をとにさへ袂をぬらす時雨哉「まき」の板屋「のよはのねさめに」カ（冬部277・初度本・続類従初度本系アリ）

冬月をよめる

神祇伯顯仲

冬さむみ空にこほれる月かけはやとにもるこそとくる成けれ（冬部293・初度本・続類従初度本系アリ）

山寺二月ノアカイ本ニアリ 諸本ナシ、リケルニ経ノタウトキヲ聞テ涙ノ流ケレハ

平安助女マ、

イカテカハ袂二月ノヤトラマシヒカリミチタル涙ナラスハ（雑部上572・初度本欠巻部・続類従初度本系中公夏両本ノミアリ）

返し

知信朝臣

虫のねはこの秋しもそ鳴まざるわかれのとほくなる心ちして（雑部下648・初度本欠巻部・続類従初度本系中公夏両本ノミアリ）

おほちに子ステイ本ニアリ、侍けるおしくおしく、みに歟て身ニ書ツケテ侍ケル

身ニマサルモノナカリケリミトリ子ノヤランカタナクカナシケレトモ（雑部下651・初度本欠巻部・続類従初度本系アリ）

極楽ヲ思ふという心を

源〔師〕頼朝臣

四方の海の浪にたゝよふみくつをも「な」ゝへの綱にひきなもらしそ（雑部下686・初度本欠巻部・続類従初度本中園林本系・公夏両本ニアリ）

うの水にうかへるをみて

頼算法師

あらふとみれはくろきなりけり

さもこそはすみのえならめよとゝもに（連歌（708）・初度本欠巻部・統類従初度本系アリ）

の十一首である。まず平仮名交り・片カナ交り文の如き表記方法の相違が目につくが、雑部（651）の詞書のような混乱もあり、表記それ自体は比校書写上の恣意性が考慮されるので、さして問題にならぬが、「イ本」・「イ本アリ」・「諸本ナシ」等の傍註のものと無註記との比校歌が両存しているのは、単なる註記の書落しとも思えぬ。また「諸本ナシ」「千載」等の註記などから斟酌して、比校本を一本とするのは後記するように諸々の疑点を残す。又圈内に註記した如く、これら十一首は先行本（初度本・統類従初度本系諸本相互には猶異同はあるが）に採入されており、伝経元本・東洋文庫本に於ても、（572）の歌が両本に欠くほか、（167）の歌が東洋本に未載のほかは、すべて両本系に存するのを見ると、前者の先行本以後、後者の両本系の段階までに於ける伝本により比較したといえる。が本論で述べた如く、寧ろ後者の系類本中に位置する或る一伝本が主として対校されていると考え、更に一・二種類の別本が任意的に参酌されたと推定するのが、より自然かと思われるのである。

註四 本書の比校本は欄外歌に於て比較的ではあるが東洋文庫本に近似する関係が見出されるところから、本書の本行に対校された「イ本」と東洋文庫本の本文との対比を当然試みるべきであるが、こゝでは、とりあえず、顯著に呈示する作者名のみを東洋文庫本のそれと次に概略比較したのであるが、結果としては次表にみる如く―参考までに併記掲出した伝経元本・統類従初度本系とも比較して―欄外歌に於けるが如き類似的傾向は見出し得なかつた。「イ本」と東洋文庫本との類似は、ほど伝経元本・統類従初度本系とも類似し、統一的な特性は存せず、この限りに於ては「イ」本は先行諸本中の恐らく伝経元本・東洋文庫本系の一種であつたであろうとは想定されるが、その孰れの系統本であるか否かは示唆する積極的理由を見出し得ない。詞書・歌に於ても略々同様な結果が想定されるであろうかと思われるがそれも本論に述べた如く、本書の親本系に於ける対校の恣意性或は「イ」本「或本」等の不明確な諸点等によるものではないかと思われるが、後々の参考にも思い、煩瑣ながら次

に一覧した次第である。

本書

東洋文庫本

静嘉堂伝経元本

続類從初度本系

(5) 前齋宮内侍院イ

樋口齋宮俊子
前齋宮内侍大藏大甬永相女永縁僧正妹

前齋宮内侍

前齋宮内侍

(43) 源貞高朝臣亮イ 貞資イ

源貞亮朝臣定輔イ

源貞資朝臣

源貞亮朝臣

(97) 藤原顕輔朝臣季イ

藤原顕輔朝臣

藤原顕季

藤原顕輔朝臣

(115) 橘成光成元イ成光諸本

欠落部

橘成光朝臣

橘成元

(142) 右近府生秦兼久兼方イ

左近衛府生秦兼久

右近府生秦兼久

・左・近・府・生・秦・兼・久
(宣・統・園・岡
右近府ニ作ル)

(143) 輔仁親王三宮イ

三宮

三宮

三宮

(155) 源仲正政イ

源仲正

源仲正

源仲正

(168) 土左内侍土佐イ

土佐内侍

土佐内侍

土佐内侍

(198) 前齋宮六条院イ

前齋院六条

前齋院六条

前齋院六条

(251) 東宮大夫公賢公実イ

東宮大夫公実

春宮大夫公実

春宮大夫公実

(272) 源俊頼朝臣師俊朝臣イ

源師俊朝臣

源師俊朝臣

源師俊朝臣

(297) 源頼綱朝臣頼綱イ

源頼綱朝臣

源頼綱朝臣

源頼綱朝臣

(334) 永成法師良暹イ

良暹法師

良暹法師

永成法し

(355) 大納言経長信イ

大納言経長

大納言経長

大納言経長

(362) 共政朝臣為イ 女イ

為政朝臣女

為政朝臣女

為政朝臣女

(413) 橘季通通季イ

橘季通

橘季通

橘季通

(421) 藤原雅光惟規

藤原惟規

藤原惟規

藤原惟規

(478) 前齋宮肥後前イ

前齋院肥前

前齋院肥前

前齋院肥後・宣・統・園・岡、肥前ニ作ル

(494) 橘俊宗女母イ

橘俊宗母

橘俊宗母

橘俊宗女

(502) 摂政家三川堀川イ

摂政家堀河

摂政家堀河

摂政家参河

(545) 頭仲卿母女イ

頭仲卿女

頭仲卿女

頭仲卿女(岡・園、頭仲女ニ作ル)

(558) 源定(陰)経

源定信

源定信

源定信(宣、定俊ニ作ル)

(590) 平康貞母実イ女イ

平康真女

平康真女

平康・真母(宣・統・園・岡、康貞女ニ作ル)

(640) 源俊頼朝臣重歌諸本俊頼

源俊頼朝臣

源俊頼朝臣

源俊頼朝臣

(670) 静厳法師教イ

静教法師

静教法師

静厳法し

(678) 皇后宮権大夫師時イ

皇后宮権大夫師時

皇后宮権大夫師時

皇后宮権大夫師時

(678) ノ次覚樹法師正雅——イ

未載歌

未載歌

未載歌

(685) 證成法師隆□

隆成法師

隆成法師

隆・成・法・し(宣・統・園・岡、證成法師ニ作ル)

(689) 山口重如田口重之イ本

田口重之

田口重之

山・口・重・如(宣・統・園・岡、田口ニ作ル)

(692) 慶範法師律師慶範イ

律師慶範

律師慶範

律師慶範

(702) 神主忠依頼イ

神主忠頼

神主忠頼

神主忠頼

註五 例へば東洋文庫本には(伝経元本も同様であるが既に前記したので省略する)、(610)の処は

源頼家朝臣物申ける人の五節にいて侍けるを聞て

まことにやあまたかさねしをみ衣とよのあかりのかくれなきよに

源頼成

とよみてつかはしたりける返し

源頼家母(正保版、光
綱母ニ作ル)

日影にはなきなたちけりをみ衣きてみよとこそいふへかりけれ

とあり、「日影には云々」(610)の歌の前はすべて、この歌の詞書となつてゐるのが普通である。本書も同様に詞書となつてゐるので、下欄余白に「このはしかきのうた式ニ書たる本アリ」と脚註したのであらう。詞書中の頼成の歌が独立したのであらうが、正宗文庫蔵〔鎌倉〕写伝為家本などもかく二首に分書してゐるので、すでに古くから分離した形態があつたわけである。このほか伝存本中にも屢々散見する。

註六 散木奇歌集には秋部八月 (四九四)に

下藹にこえられてなけき侍ける頃月のあかゝりける夜周防内侍のもとにまかりて物かたりしてことの次のありけるに奏せよとおほしくて

いとゝしく心つくしの秋しまれ世を恨みても月をみるかな

同部八月 (四〇九)に

基俊の君の堀河の家にて人々哥よみけるに草花露深といへる事をよめる

あたし野の萩の末こそ秋風にこほるゝ露や玉川の水

連歌 (二五六七)

殿下にて人々に連歌をせさせてあそはせ給ひけるにあけかたに成て鐘の声ほのかに聞えければ

安芸守重基

こゝのつ^マのちのこゑ遠くきこゆなり

つく

わかむつのねのつみやきゆらん

同、(一五七八)

中宮亮仲実か家に人々あまたまかりてあそひけるにたるきにとりをさしたりけるを見て
たるきにはやまのうつはりさしてけり

慈雲房

のきはに海の月をやとして(以上詳書類従本)

とある。散木奇歌集に較べ、本書は詞書は殆んど省略され歌の小異、連歌作者の前後(一五六七)・別称など散見されるが、同歌と認められる。

註七

(一) 山寒花遅といへることをよめる

左京大夫経忠

(40) 山桜木すゑの風の寒ければ花のさかりになりそわつらふ
花為春友といへることを

内大臣

(51) ちらぬまは花を友にて過ぬへし春より後のしる人も哉
新院の御方にて花契^マ遙年といへることを

待賢門院中納言

(二) 人々に桜の哥十首よませ侍けるによめる

修理大夫顯季

(48) 桜花咲ぬる時はよし野山たちものほらぬみねの白雲

山花人をとゝむといへることをよめる

大中臣公長朝臣

(54) 斧のえは木の本にてや朽なまし春にかきらぬ桜なりせは

宇治前太政大臣家の哥合に桜の心をよめる

皇后宮摂津

(49) 散つもる庭をそみまし桜花風よりさきに尋さりせは

(三) 月前見花といへることをよめる

大藏卿匡房

(58) 月影に花みる夜半のうき雲は風のつらさにをとらさりけり

水のうへに散花といへることをよめる

源雅兼朝臣

(60) 花さそふ嵐やみねを渡るらん桜なみよる谷河の水

顕季卿家にて桜の哥十首人々によませ侍けるによめる

太宰大貳長実

(59) 春の日の長開けき空に降雪は風にみたるゝ花にそ有ける

(四) (118) 時鳥をよめる

(118) 藤原顕輔朝臣

(119) ほとゝきす心も空にあくかれてよかれかちなる太山への里

(119) 承暦二年内裏の哥合に時鳥を人にかはりてよめる

(119) 藤原孝善

(118) 時鳥あかて過ぬる声により跡なき空を詠めつるかな

(五)

摂政左大臣

(247) 女郎花よのまの風におれふしてけさ白雲に心をかるな

鳥羽殿前裁合にをみなへしを

春宮大夫公実

(251) あたしのゝ露吹みたる秋風になひきもあへぬ女良花哉

摂政左大臣家にてふちはかまを

源忠季

(248) さほ河の汀にさけるふちはかま浪のよりてやかけんとすらん

(六) いけのこほりを

前斎宮内侍

(318) 波まぐらいかにうきねをさたむらん氷ります田の池のをし鳥

みつとりをよめる

前斎院六条

(317) 中／＼に霜のうはけきイをかさねてや鴛の毛衣さえまさる覧

修理大夫顯季

(319) さむしろに思こそやれさゝのはのさゆる霜よのをしの独ね

(七) 忘れにける人の思ひ出てをとつれたりければつかはしける

橘俊宗女

(487) めつらしや岩間によとむ忘水いくかを過て思ひ出らん

忍恋を

皇太后宮大夫師時

(458) 人しれぬ恋をしすまのあま人はなきしほたれてすくすなりけり

山哥合に

読人しらす

(489) たまさかに逢夜は夢の心ちして恋しさなとかうつゝなるらん

(八) 題しらす

読人しらす

(524) 足引の山のまに／＼たふれたるからきは独ふせるなりけり

(528) 三態野に駒のつまつく青つゝら君こそまろかほたしなりけれ

(525) 津の国のまろやは人をあくた河君こそつらきせゝは見せしか

(九) 題しらす

読人しらす

(534) あふことはかたねふりなるいそひたひひねりふすれとかひやなからん

(533) 逢ことの今はかたみのめをあらみもりてなかれん名こそおしけれ

(536) あふことの交野に今は成ぬれは思ふかりのみ行にやあるらん

(535) あふみにかありといふなるかれる山君こえにけり人とねくさし

(537) 逢ことはなかめふるやの板ひさししとみさすかにかけて年のへぬらん

(二) 深待
対山・月待といふことを

藤原正季

(570) 此世には山の端出る月をのみ待ことにてもやみぬへき哉

しほゆあみになるをのかたへまかりけるかつねに音つれんなど申てをとつれさりければつかはしける

藤原よしすけ

いかなれはなるをのみなときゝしかと便りの風に音つれもせぬ

山里に経たうとかりけるを月のあかゝりける夜きゝて涙おちければ

平やすさたか女

(572) いかてかは袂に月の宿らまし光まちとる涙おちすは

有明の月をみて

僧正行尊

(571) 木のまもるかたわれ月のほのかにも誰か我身を思出へき

(二) 和泉式部保昌にくして丹後国に侍ける比都に哥合侍けるに小式部内侍哥よみにせられて侍けるを宣頼卿すのぶつほねのかたに
まうてきて哥はいかゝせさせ給丹後へ人つかはしけんや使いまたまうてこすやいかに心もとなくおほすらんなとたはふ
れて立けるをひきとゝめてよめる

小式部内侍

(586) 大江山いくのゝ道の遠ければまたふみも見す天橋立

しほゆあみに西海のかたへまかりたりけるにみるといふものをみつからとりて都に侍けるむすめのもとへつかはすとて

(590) 磯菜摘入江の波の立かへり君みるまでの命ともかな

平康貞

かへし

皇后宮式部

(591) 長居する海士のしはさとみるからに袖の浦にもみつ涙哉

百首歌中に夢の心を

修理大夫頭季

(587) 転寝の夢なかりせは別にし昔の人を又も見ましや

(三) したしき人春日にまいりて鹿のありつるよしなと申けるをきゝて

藤原実光朝臣

(618) 三笠山神のしるしのいちしるくしかありけると聞そ嬉しき

下藹にこえられて歎侍ける比よめる

源俊頼朝臣

(649) 関もあへす涙の河は早けれと身のうき草は流れさりけり

屏風のゑにしかすかの渡りゆく人たちわつらふかたかきたる所をよめる

藤原家経朝臣

(619) 行人も立そわつらふしかすかの渡りや旅のとまりなるらん

(三) 兼房朝臣重服にてこもり居て侍ける比出羽弁かもとよりとふらひたりけるを返しせよと申ければよめる

橘元任

(664) 悲しさのその夕暮のまゝならはありへて人にとはれましやは

例ならぬことありていかゝと思ひつゝけて心ほそさによめる

源行宗

(669) いかにせん憂世中にすみかまのはてはけふりと成ぬへき哉

人のもとに侍けるに俄にたえ入てうせなんとしければ都のもとにかき入て大路にをきたりけるに郭公

なきけるをきゝていきのしたによめる

田口重如

(689) 草の葉にかとてはしたり郭公しての山ちもかくや露けき
さてたえいりにけるに

(690) たゆみなく心をかくるみた仏人やりならぬちかいたかふな
範国朝臣にくして伊与国にまかりたりけるに正月より四月迄いかにも雨のふらさりければ苗代もせて
さはきければよろつにいのりけれとかなはてたえかたかりければ守能因^マを哥^マよみて一宮にまいらせて
いのれと申ければまいりてよめる
能因法師

(665) 天河苗代水にせきくたせあまくたります神ならば神

(四) 不軽品を

権僧正永緑

(681) あひかたき法をひろめしひしりにそ打みし人も道ひかれける

涌出品

(680) たらちねはくろかみなからいかなれはこのまゆしろくいとゝ成らん

提婆品

覺雅法師

千年迄むすひし水を露斗わか身のためと思やはせし

藥王品

懷尋法師

(682) 憂世をし渡すときけはあまをふね法に心をかけぬ日そなき

(五) 常住心月輪といへることをよめる

隆成法師

(685) 世とゝもに心のうちにすむ月をありと知こそはるかなりけれ^マ

たいこの釈迦会に花のちるをみて

珍海法師母

(687) 今日も猶おしみやせまし法のためちらす花そと思はさりせん^{マ、}

光いむ法師身まかりての法事諷誦に書付侍ける

行真法師

うたかたの消にし玉はけふやさははすのうき葉にうきてゐるらん

極楽を思ふといふことをよめる

源俊頼朝臣

(686) 世を^{マ、}うみの波にたゝよふみくつをまなへの網に引ならしそ

註八 この系類の伝本系には、猶伝本相互に異同は散見されるが、この長享本のほかに、同正宗文庫本蔵〔江戸中期〕写本・天理図書館蔵〔室町中期〕写本（函架番号911・23-1イ97）・京都大学図書館蔵〔江戸末期〕写本（函架番号4-23キ19）・書陵部蔵嘉永五年写本・同蔵嘉永七年写本・同蔵飛鳥井雅章筆廿一代集本・同蔵前掲本の〔江戸初期〕転写本・同蔵〔江戸初期〕写廿一代集本（同番号400-7）・同蔵〔室町末期〕写吉田兼右筆廿一代集本・神宮徴古館蔵伝東坊城長淳写八代集本ほか等々が伝存する。

註九 但しこの(213)藤原忠隆歌を欠く伝本は、この他正宗文庫蔵〔南北朝〕写伝二条為明筆写本の一本に管見するにすぎないが、本書は本集伝存本の古鈔本中の一本でもあり、且つ本書が所謂精撰本の中でも、最終的な精撰過程を経た伝存本と想定されるので、既述長享元年奥書本・天理図書館蔵本のみ誤脱と決定するのは、猶疑点が存するので附記する次第である。

註十 上掲古鈔本のほかに、正宗文庫蔵天文十六年釈雲岑筆写本・同文庫蔵〔室町末〕写本・同文庫蔵山崎宗鑑筆写本・同文庫蔵〔近世初〕写本（岡田真氏旧蔵本）・河野信一記念文庫蔵山崎宗鑑筆写本・九州大学図書館蔵伝飛鳥井雅春筆写本・京都大学図書館蔵〔江戸前期〕写本（4-23・キ8）ほか等々が伝存し、前期系統及びこの系統以降の現存諸本は甚だ多く、且つ古鈔本類はこの系統期以降の所謂精撰本に蝟集することは二度本撰述過程上、特に留意されねばならない。この問題に就いては次稿に予定している。